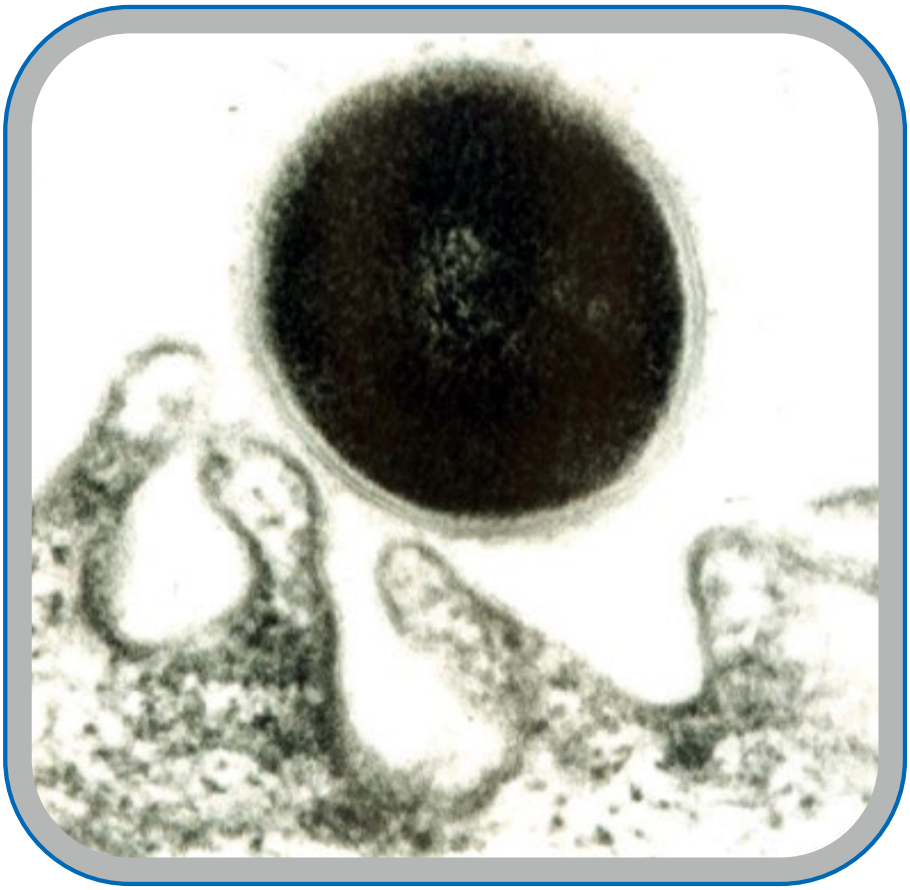
第34号

さくらじま

2020

黒野祐一教授退官記念号



鹿児島大学大学院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室

同門会誌

〔**表紙撮影の説明**〕

溶連菌が上皮細胞に接着している様子。

（撮影者：黒野祐一）

目　　次

巻頭言 …… 1

会長挨拶 …… 4

Ⅰ．黒野名誉教授功績 …… 6

Ⅱ．同門会員業績・学会発表 …… 78

Ⅲ．教室行事

1．共催の講演会 …… 79

2．第22回さくらじまフォーラム …… 79

3．第18回『鼻の日』市民講座 …… 80

Ⅳ．同門会報告 …… 81

Ⅴ．地域医療報告 …… 82

Ⅵ．特殊外来通信

難聴・耳鳴り・補聴器外来 …… 84

Ⅶ．病理集計 …… 86

Ⅷ．手術実績 …… 87

Ⅸ．各種科学研究費 …… 88

Ⅹ．業　　績

1．原　著 …… 89

2．総　説 …… 90

3．国内学会発表 …… 91

4．国際学会発表 …… 96

5．学位論文要旨 …… 97

Ⅺ．黒野教授の退官に寄せて …… 101

Ⅻ．医局通信

1．新入局員紹介 …… 111

2．医局人事 …… 112

３．学会報告

①第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 … 113

②第14回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 … 116

③第43回日本頭頸部癌学会 …… 116

④第81回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会 … 117

⑤第34回　日耳鼻九州連合地方部会学術講演会…… 117

⑥第7回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会総会・学術講演会 … 118

⑦第32回日本口腔・咽頭総会ならびに学術講演会… 118

⑧第29回 日本耳科学会 総会・学術講演会に参加して… 119

⑨第58回日本鼻科学会総会および学術講演会 …… 120

⑩第71回日本気管食道科学会総会・学術講演会… 120

⑪第30回　日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会… 121

⑫ RHINOWORLD CHICAGO 2019　ISIAN・IRS・ARS
38th International Symposium of Inflammation and Allergy of Nose … 121

⑬15th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery …… 122

４．関連病院便り

①鹿児島医療センター便り …… 123

②鹿児島市立病院便り …… 125

③鹿児島厚生連病院便り …… 127

④藤元総合病院便り …… 128

⑤鹿児島生協病院たより　－最終報－ …… 129

⑤天辰病院便り …… 132

XIII. 関連病院と診療日案内 …… 133

XIV. 海外同門会名簿 …… 136

XV. 自治医大研修生 …… 140

同門会会則 …… 142

編集後記…… 144

巻頭言：退官の挨拶

黒　野　祐　一

平成９年（1997年）11月１日に鹿児島大学に着任して早や22年余りが過ぎ去り，令和２年３月31日に恙なく任期を終えることができました。新型コロナウイルスの流行によって退官祝賀会が中止となり，同門会そして地方部会の皆様にご挨拶ができず，大変申し訳なく，また残念でなりません。そこで，今回のさくらじまの巻頭言の頁を借りて，皆様への感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

鹿児島大学に就任時はまだ42歳の若輩者で，鹿児島市立病院での研修中に短期間でしたが繊細な手術指導をしてくださった久保教授，温かい人となりに憧れ私が耳鼻咽喉科を志すことを決める大きな要因となった大山教授の後任に選出されたことで，ずいぶんと気負いがあったよう思います。そのため，教室員や同門会，地方部会の先生方にはいろいろとご迷惑をおかけしたことを，まずお詫び致します。しかし，そうした私の我儘を寛大な気持ちで受け入れていただいたおかげで，私がライフワークとする粘膜免疫に関する研究を継続でき，2018年の第119回日耳鼻総会・学術講演会で宿題報告を担当する栄誉をいただきました。また，臨床面でも多くの成果を上げ，それによって翌2019年には第120回日耳鼻総会・学術講演会の会長に指名され，その大役を無事に果たすことができました。125年の長い歴史を持つ本学会を鹿児島大学が担当したのは初めてのことで，教室の大いなる誇りと自信になったと思います。

「後悔はあるか？」と聞かれて，イチロウのように「後悔などあろうはずがありません」と答えることはできません。私の不徳に加え，2003年の医歯学統合に伴う人員削減や2004年に開始された新医師臨床研修制度の影響で教室員を増やすことができず，地域医療に十分貢献できなかったことが悔やまれます。「先生が厳しすぎるから」と言われたこともありますが，医師は患者さんのために学び技術を磨くという信念に基づくためで，学生にも「君たちが勉強しないで困るのは君たちではなく，そんな君たちに診てもらう患者さんだ」と常に言い続けてきました。このことの理解や共感が得られたからかどうかは分かりませんが，この数年，毎年複数名の入局者を得ており，いずれ教室のマンパワーは充足されると信じています。

昨年のワールドラグビーカップでは，日本代表チームの活躍に世界が熱狂しました。このラグビーが他の球技と異なる点は，監督がベンチに入れず，選手自身でゲームを組み立て戦うことにあるそうです。それが2015年大会での「ブライトンの奇跡」をもたらしたと言われています。この日本代表チームのように，今後も教室員が自ら考え，ONE TEAM で戦い続けてくれることを期待しています。同門会そして地方部会の先生

方には新体制となる教室を引き続きご支援いただくようお願い申し上げます。ありがとうございました。

略　　歴

氏　　名　黒　野　祐　一（くろの　ゆういち）

生年月日　昭和30年３月24日

学　　歴　昭和55年３月　鹿児島大学医学部医学科卒業

資　　格　医師免許（昭和55年５月27日）
医学博士（昭和63年６月　大分医科大学）

職　　歴　昭和55年６月　鹿児島大学医学部附属病院 医員（研修医）採用（耳鼻咽喉科）
昭和57年６月　大分医科大学医学部 助手 採用
平成５年６月　大分医科大学医学部 講師
平成８年６月　大分医科大学医学部 助教授
平成９年11月　鹿児島大学医学部 教授
平成９年11月　鹿児島大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科長に併任
平成15年４月　鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 教授に配置換
平成15年10月　鹿児島大学医学部・歯学部附属病院感覚器センター長に併任
平成27年４月　学術研究院医歯学域医学系 教授に配置換
令和２年３月　鹿児島大学職員就業規則により定年による退職予定

主な学会活動

○日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事長（平成20年２月～平成26年２月）
○日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会顧問（平成31年２月～）
○日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会理事長（平成28年９月～令和元年９月）
○日本耳鼻咽喉科感染症エアロゾル学会監事（令和元年９月～）
○日本耳鼻咽喉科学会ならびにその関連する学会（日本鼻科学，日本頭頸部外科学会，日本気管食道科学会，日本口腔咽頭科学会，日本小児耳鼻咽喉科学会）理事

主な社会貢献

○鹿児島県公害健康被害認定審査会委員（平成10年４月～）

○環境省臨時水俣病認定審査会委員（平成26年４月～）

○鹿児島県社会福祉審議会委員（平成10年４月～）

○鹿児島県アレルギー疾患医療連絡協議会委員長（平成30年８月～）

研究テーマ

○上気道粘膜免疫機構と粘膜ワクチン開発に関する研究

○上気道感染症の病態とその治療ならびに予防に関する研究

受 賞 歴

○平成24年度「科研費」審査委員表彰（日本学術振興会）

○平成27年度「科研費」審査委員表彰（日本学術振興会）

会長挨拶

森　山　一　郎

この度，鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室同門会の会長を拝命いたしました。誠に僭越ながら，先の総会で山本誠前会長の後を次ぐことになりました。歴史ある同門会の来し方行く末を思うにつけ，その重責に押し潰されそうになりますが，ここは初心に帰れと，私が編集長を務めた「第３号さくらじま1989」を読み返してみました。

当時の会長の故大山勝教授の「はしがき」では「教室の歴史も四十路を越え，私が主宰してからは中学生になろうとしている。元号は「昭和」から「平成」に変わり，その歴史的瞬間をも経験した。このように，教室は今，最も難しく，かつ大切な転換期にあるといえる。（中略）教室は物心両面で，かってない豊かさを誇るまでになった。その結果，研究・臨床分野の裾野は一段と広がり，学際化や国際化の路も着実に拓かれ固められている。」とありました。そして，私の編集後記には「基礎研究や医療技術の水準は高くても，まだまだ第一人者として世界をリードするには，仕事一辺倒ではなく高い文化人，豊かな個人たるべきことを痛感した。飽食と働き過ぎをすぐに是正することもないが，豊かな表情を取り戻すためにもう少し有意義な余暇の過ごし方を考え直す時期にきているといえよう。華やかな昭和も終わり，21世紀に向け平成も始動した。」と記していました。

ちょうど，昭和から平成に移行した変動の年でしたが，昭和を平成に，平成を令和に置き換えれば，今現在同じ提言をしても，全然違和感がありません。ということは，日本はこの30年間に何も進歩していないことになります。明日はよくなるだろうという希望的観測で漫然とその日を送っても，人間の本質は100年経っても何も変わらないということです。

そのように考えれば，100年前のスペイン風邪の流行った時と，今の新型コロナウイルス感染の現状は，人身に与える影響度としてはほぼ酷似しているのも不思議ではないかもしれません。人類は，同じ過ち同じ歴史を繰りかえすのでしょうか。一方，100年前の日本では箝口令（かんこうれい）が敷かれました。これは，スペイン風邪の風評をむやみに流さないようにという口に蓋をする箝口令ではなく，人に迷惑をかけないように外出時には必ずマスクしなければならないという勧告です。実に先見の明があり，100年後の今でも金言に値します。今では世界中の人々のマスク姿に違和感がなくなっています。100年前に比べ現政権の新コロナに対する対応のまずさは，嘗てマスク文化を普及させた先見性はみじんも見られず，後手々々の政策で目に余るものがあります。

いったい日本はどうしたのでしょうか。

こうゆう状況で我が同門会の今後を慮るにつけ，有職故実的に決まりきったことを繰り返すか，それとも何もしないことはむしろ後退であるとの考えで，積極的に自ら動きだすことを最優先にするか，やはり私個人だけでは同門会の方向付けは難しく思われます。そこで，同門会の沿革を紐解いてみますと，鹿児島大学耳鼻咽喉科学教室を開講したのが野坂保次教授で1946年（昭和21）年のことでした。（注：前教授黒野祐一先生が記された鹿児島大学耳鼻咽喉科教室史には，以下の文章がありそのまま引用します。『当教室の創立は，昭和18年４月の県立鹿児島医学専門学校の発足に遡り，その初代教授は寺師忠雄である。しかし，寺師忠雄は一度も教鞭をとることなく戦死したため，実質的な教室の運営は，昭和21年にその後任である野坂保次の着任から開始された。従ってその頃から同門会は発足していたと考えられるが，正確な記録は残っていない。』）そして，1994年（平成６年）には同教室開講50周年記念式典が開かれ（注：開設を1943年（昭和18年）として計算されと思われる），同年に会長や役員や監事などを規定した会則をともなった今日ある同門会が発足しました。それ故，今年は教室開講74年（注：同様に計算したら77年）になり，現行の同門会設立26年になります。また，同門会誌「さくらじま」は発刊してから33年経ちます。（注：いつか総会で正式な同門会発足日を決定したいと思います）

まさに，冷めたスープを温めなおして飲むように，過去の伝統をもう一度考え直して新しい意味を知る「温故而知新」の精神を改めて痛感する次第です。同門会の会員の皆様が，覚束ない私をお助けになって，佳き方向へと導いてくださることを祈念してやみません。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

2020年４月９日

森山一郎

Ⅰ．黒野名誉教授功績

最終講義

耳鼻咽喉科医としての道程を振り返って

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学　黒　野　祐　一

はじめに

私は昭和55年に本校を卒業し，鹿児島大学病院と鹿児島市立病院で２年間の研修をしたのち，大分医科大学で15年間研鑽し，平成９年（1997年）に鹿児島へ戻ってきました。当時42歳で，本邦の耳鼻咽喉科教授のなかで最年少でしたが，早や22年余りが過ぎ去り，今年３月末に定年退職します。そこで，これまで私が行ってきた臨床そして研究内容を紹介させていただこうと思います。

なぜ耳鼻咽喉科医になったか

「先生はなぜ耳鼻咽喉科医になろうと思ったのですか？」と学生からもよく聞かれます。医学部に入学した時には，漠然と外科医になりたいと思っていましたが，そんな私が耳鼻咽喉科に興味をひかれたのは，耳鼻咽喉科の臨床実習でのある出来事でした。担当教官から，額帯鏡を使って学生同士で鼓膜を観察し，それをスケッチしなさいと指示されました。暗い診察室で，しかも額帯鏡の小さな穴から覗くという作業は，どうも苦手で，また，当時の自分の将来の選択肢に耳鼻咽喉科が全くなかったので，真剣さが足りなかったせいもあってか，どうしても鼓膜が見えません。そこで，他の同級生が教科書を参考にしながらきれいな鼓膜の絵を描くのをしり目に，「何も見えませんでした」とレポート用紙に書いて提出しました。すると案の定，「誰だ，これを書いたのは」と怒鳴られました。ところが，「君は誰の耳を見たのか」と言われて，その教官に私が診察した同級生の耳を見てもらうと，「耳垢が詰まって確かに鼓膜は見えないな。君は正直でよろしい」と逆に褒められてしまいました。まさにこの時，耳鼻咽喉科も面白そうだなと思いました。

そのような単純な理由で耳鼻咽喉科に入局したものの，額帯鏡の扱いや局所麻酔下の上顎洞根本術などの痛々しい耳鼻咽喉科の手術はなかなか馴染めませんでした。しかし，クリニカライトの登場によって額帯鏡も使われなくなり，副鼻腔手術も今では内視鏡下に行われるようになりました。もう一つの理由は，マイクロサージャリーに興味があったからで，耳の手術を学び，数多くの症例を経験しました。また，微小血管吻合術や神経吻合術など，形成外科の手技を応用した頭頸部再建術も，優れた多くの恩師の指導を受けていち早く習得することができました。

頭頸部外科手術の進歩

頭頸部癌の手術は舌全摘出術や下顎骨離断による中咽頭側壁切除術など殺伐としたものですが，最近はNBI内視鏡の開発によって早期診断が可能となり，そのため当科では九州で最も早く，低侵襲な経口的腫瘍切除術を導入し，これによって患者さんの術後QOLも向上し，再建術が必要な症例は年々減少しつつあります。

さらに，現在，頭頸部外科領域でもロボット支援手術が導入され，当科でも，いつでも開始できるよう，すでにその準備を終えています。また，経口的手術のためのシングルポートが開発され，本邦でもその応用が期待されており，こうした手術が鹿児島大学病院で実施される日を楽しみにしています。

耳鼻咽喉科領域の謎

耳鼻咽喉科領域には多くの興味深い謎があります。たとえば，鼓膜は何もしないのにいつもピカピカできれいです。目の角膜は涙でいつも洗われているから当然でしょうが，鼓膜はどうしてだろうと不思議に思いました。こんな他愛無い疑問を持つ人は私以外にもいたようで，その耳鼻咽喉科医は，鼓膜の中心に小さなカーボン粒子を置くと，わずか1週間で，鼓膜の外周縁まで移動し，そこで吸収され消失することを発見しました。つまり，鼓膜上皮は非常に速いスピードで周囲へmigrationし，常に新陳代謝されている，すなわち自浄作用があるため，わざわざ洗わなくても鼓膜はいつもピカピカなのです。

鼻中隔の弯曲はすべてのヒトに見られますが，イヌやサルなど他の哺乳類には認められません。これに関しては，東京慈恵医科大学の故高橋教授が研究されヒトが進化の過程で，前頭蓋が発達し，四つ足から二本足歩行になったことで，イヌやサルと比較してヒトでは鼻中隔にかかる重力が大きく，そのため鼻中隔が弯曲すると推理し，「鼻の話」という著書にその詳細を記されています。ところが，最近，哺乳類の軟骨の発生が遺伝子によって制御されていることが実証され，この高橋教授の重力説は否定されました。ヒトの胎児は羊水中で重力の影響を受けないにも関わらず，すでに軽度ながら鼻中隔が弯曲しているそうで，ヒトとサルやイヌとでは，軟骨で構成される臓器，例えば耳の形などが全く異なることからも，鼻中隔軟骨の発生も遺伝子で制御されているのは当然かもしれません。

上気道粘膜免疫

鼻や咽頭には肺炎球菌やインフルエンザ菌を含めたくさんの常在菌が存在していますが，容易に感染は起きません。常在菌と病原菌はどう違うのか，これも大きな謎です。ここで重要な役割を演じているのが粘膜免疫であり，私のライフワークとなりました。

粘膜免疫と最初に出会ったのは大分大学へ赴任したときで，故茂木五郎先生にその基礎を教わり，学位を取得しました。その後，オハイオ州立大学の故David Lim先生，

アラバマ大学そして現在は東大医科研におられる清野宏先生のご指導を受け，本校に就任してからは粘膜ワクチンの開発を目指して経鼻，舌下，経皮ワクチンの有用性に関する研究を行い，粘膜ワクチンによって上気道感染症そしてアレルギー性炎症の予防が可能であることを明らかにしてきました。そして，その成果が日本耳鼻咽喉科学会に認められ，2018年５月に横浜で開催された第119回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会において，宿題報告として発表させていただきました。

粘膜ワクチンの開発を目指して

急性中耳炎など上気道化暗線症の予防ワクチンとして，結合型肺炎球菌莢膜多糖体ワクチンであるプレベナーやシンフロリックスがすでに用いられています。しかし，海外でのプレベナーの予防効果を検証した報告によると，急性中耳炎に対する効果は，侵襲性肺炎球菌感染症とは大きく異なり，極めて低値でした。その理由として，ワクチン株以外の他の血清型の細菌による急性中耳炎が増加したことが指摘されており，上気道感染症を予防できる広域スペクトラムワクチンの開発が期待されています。そこで，我々が注目しているのがホスホリルコリンです。

細菌のホスホリルコリン発現が滲出性中耳炎の遷延化に関与し，ホスホリルコリン特異的 IgM は自然抗体として働いて炎症を抑制することが知られています。そこで，ホスホリルコリンの粘膜ワクチンとしての有効性を証明するため，マウスに経鼻投与したところ，唾液や鼻腔洗浄液中のホスホリルコリン特異的 IgA 抗体，そして血清中のホスホリルコリン特異的抗体の有意な上昇が認められ，細菌感染の発症が抑制されました。また，ホスホリルコリン経鼻ワクチンによって，感染症のみならずアレルギー性炎症も制御できることも分かりました。

さらにホスホリルコリンは直接細菌の受容体と結合して感染を阻止する作用も有しており，その重合体であるリピジュア® によって細菌の接着や侵入が抑制されました。すなわち，リピジュア® を含嗽薬やネブライザー薬として応用することが可能であり，これらの一連の研究成果をもとに特許を出願しました。

私はもうすぐ退職しますが，今後も客員研究員として，もうしばらくこの研究に携わり，リピジュア® の医薬品としての製品化を目指したいと考えています。

おわりに

今思い返すと鹿児島大学で教授として過ごした22年余りもあっという間でした。この間お世話になった鹿児島大学医学部さらに私が顧問を務めた空手道部ならびにゴルフ部の学生諸君，そしてこれまで多大なるご支援を頂いた鹿児島県医師会の皆様に心より御礼を申し上げます。

教授退任ご挨拶

平成９年（1997年）11月１日に大分医科大学から母校である鹿児島大学へ耳鼻咽喉科科学教室教授として赴任し，今年３月に無事定年を迎えます。今日までの22年間，本学医学部で大いに学び，楽しい日々を過ごすことができたのは，ひとえに鶴陵会会員の皆様をはじめ，多くの方々のご指導とご支援によるものと心より御礼を申し上げます。

昭和55年（1980年）に本校を卒業し，さらにその後の２年間を鹿児島大学病院と市立病院で研修させていただいたため，大学はもとより鹿児島にもすぐに馴染むことができました。しかし，教授が代わった時の常とはいえ，次々に教室員が退局したため関連施設の人事に追われ，また，自らの研究を始めるためには実験室の改修や新しい機器の購入も必要で，本来の業務に専念できず焦りを感じました。さらに，手術室に設置された顕微鏡は私が研修医時代に使用していた代物で，これでは難易度の高い耳科手術やマイクロサージャリーを行うことは到底できないと，途方に暮れる日々が続きました。ところが，幸いにも科学研究費基盤研究（B）と（C）をともに獲得することができ，自らの研究を開始するための環境が一気に整いました。また，手術室の器機整備計画に伴い最新の手術用顕微鏡を購入していただき，大学病院としてはかなり遅れをとったものの，人工内耳の埋め込み術も実施することができました。その他にも様々な器機を設置していただきましたが，とくにその当時，鹿児島県ではどの病院も所持していなかった小児気管支異物除去術に用いる直達鏡は，これが納入された数日後に２歳児のピーナッツ気管支異物患者が救急搬送され，「良かった間に合った」と胸をなでおろしたことを今でも覚えています。

こうして何とか新たな教室の船出を切ることができましたが，その後の新医師臨床研修制度や医歯学統合に伴う人員削減などの影響もあって教室員を増員することができず，多くの関連施設，とくに離島や僻地へ教室員を派遣するのが困難となりました。そのため，今日に至ってもなお，そうした地域への十分な耳鼻咽喉科医療の提供や支援ができず，大変申し訳なく思っています。

大学の運営に関しても，自らの力不足と教室のマンパワーの不足等によってあまり貢献できなかったことが悔やまれます。しかし，平成17年（2005年）４月から平成19年（2007年）３月まで，高松病院長から病院長補佐に任命され，その時に設置された臨床研究倫理委員会の委員長等を務めさせていただきました。臨床研究倫理とは何ぞやという原点からのスタートで，毎月提出される膨大な数と量の申請書に埋もれ，何度となく溺れそうになりましたが，他大学の専任者の指導や事務担当者の皆様のご協力のおかげで，何とか職務を全うすることができました。

一方，研究や学会活動においては，少ないながらも教室員の努力と協力のおかげで，多くの実績を残せました。とりわけ，平成30年（2018年）５月に横浜で開催された第119回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会では，名誉ある宿題報告の機会をいただき，前任地の大分医科大学在職中から自らのライフワークとしてきた粘膜免疫に関する研究成果をまとめ，「上気道炎症の粘膜ワクチンによる制御」と題して講演させていただきました。なお，この研究テーマに関連して昨年，科学研究費基盤研究（C）を獲得できたので，退職後もしばらく研究活動を続けたいと考えています。

また，その翌年の令和元年（2019年）５月には，第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会の会長に指名され，国内の耳鼻咽喉科関連で最大の学会を大阪国際会議場で開催させていただきました。創立されて125年と長い歴史を持つ本学会の総会・学術講演会を鹿児島大学が担当したのは初めてのことで，教室の大いなる誇りと自信になりました。

医学部の学生とも，講義や臨床実習のほか，空手道部そしてゴルフ部の顧問として楽しい年月を過ごすことができました。その甲斐あって，両部の OB や OG が当教室に入局し臨床と研究に頑張ってくれています。また，昨年の西医体では男子空手道部が団体準優勝，男子ゴルフ部は悲願の団体優勝という快挙を遂げ，私の退職に花を添えてくれました。こうした数々の素晴らし思い出も，鹿児島大学でともに学ばせていただいたからに他なりません。教室員，同門会会員，そして医学部学生の諸君に改めて感謝申し上げます。

私が入学した年（1974年）に桜ヶ丘へ移転した大学病院の再開発も順調に進み，新病院の完成がとても楽しみです。その生まれ変わる病院を軸に，鹿児島大学医学部そして鶴陵会が更なる発展を遂げることを期待するとともに，会員の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

【著　書】

茂木五郎，黒野祐一：副鼻腔炎の病態－免疫関連物質との関連，野村恭也，本庄　巌，大山勝（編），耳鼻咽喉科頭頸部外科 Mook No.1 副鼻腔炎，金原出版，1986, p.60-68.

Kurono Y, Shimamura K, Kato A, Mogi G: Fibronectin in Nasal Secretion and Bacterial Adherence, Ohyama M, Muramatsu T (Eds), Glycoconjugates in Medicine, Professional Postgraduate Services, 1988, p.205-209.

Mogi G, Kurono Y, Ichimiya I: Reconstructive Surgery for Head and Neck Tumors by Contact Nd:YAG laser Technique, Joffe SN Ogura Y (Eds), Advances in Nd:YAG Laser Surgery, Springer-Verlag, 1988, p.179-182.

Tomonaga K, Kurono Y, Mogi G: Type I allergic reaction in the middle ear and eustachian tube mucosa-An experimental study-, Lim DJ, Bluestone CD, Klein JO, Nelson JD (Eds), Recent Advances in Otitis Media, BC Decker, 1988, p.71-75.

Kawauchi H, Ueyama S, Ichimiya I, Kurono Y, Mogi G: Suppression of immune mediated otitis media by mucosa derived suppressor T cells, Lim DJ, Bluestone CD, Klein JO, Nelson JD (Eds), Recent Advances in Otitis Media, BC Decker, 1988, p.202-206.

Kurono Y, Tomonaga K, Mogi G: Are Staphylococcus aureus and Staphylococcus epidermidis causative antiges?, Lim DJ, Bluestone CD, Klein JO, Nelson JD (Eds), Recent Advances in Otitis Media, BC Decker, 1988, p.338-340.

茂木五郎，黒野祐一：老人の気道免疫，野村恭也，本庄　巌（編），頭頸部外科 Mook No. 12 老年者と耳鼻咽喉科，金原出版，1989, p.250-257.

Mogi G, Kurono Y, Ichimiya I: Contact Nd:YAG Laser in Head and Neck Reconstructive Surgery, Joffe SN (Ed), Laser in General Surgery, Williams & Wilkins, 1989, p.233-237.

Kurono Y: Mucosal Immunity against Bacterial Infection in the Nose, Sacristan T, Alvarez-Vicent J, Bartual J, Antoli-Candela F, Rubio L (Eds), Oolaryngology, Head & Neck Surgery, Kugler & Ghedini Publications, 1991, p.1613-1616.

茂木五郎，黒野祐一：滲出性中耳炎，高坂知節（編），耳鼻咽喉科ハンドブック，南江堂，1992，p.212-214.

Shigemi H, Kurono Y, Shimamura K, Mogi G: Role of secretory immunoglobulin A in nasopharyngeal bacterial adherence, Lim DJ, Bluestone CD, Klein JO, Nelson JD, Ogra PL (Eds), Recent Advances in Otitis Media，Decker Periodicals, 1993, p.182-184.

Kurono Y, Bakaletz LO, Lim DJ: Inhibition of the adherence of Streptococcus pneumoniae to buccal epithelial cells in BALB/c mice by oral immunization, Lim DJ, Bluestone CD, Klein JO, Nelson JD, Ogra PL (Eds), Recent Advances in Otitis Media，Decker Periodicals, 1993, p.206-208.

Mogi G, Kawauchi H, Kurono Y: Panel on etiology of otitis media with effusion: tubal dysfunction or infection?, Mogi G, Honjo I, Ishii T, Takasaka T (Eds), Recent Advances in Otitis Media, Kugler Publications, 1994, p.73-77.

Watanabe T, Kawauchi H, Kurono Y, Mogi G: Adenoids and otitis media with effusion in children, Mogi G, Honjo I, Ishii T, Takasaka T (Eds), Recent Advances in Otitis Media, Kugler Publications, 1994, p.177-181.

Kurono Y, Shimamura K, Mogi G: The effect of mucosal and systemic immunization on nasopharyngeal colonization by nontypeable *Haemophilus influenzae* in BALB/c mice, Mogi G, Honjo I, Ishii T, Takasaka T (Eds), Recent Advances in Otitis Media, Kugler Publications, 1994, p.479-483.

Ueyama T, Kurono Y, Shirabe K, TakeshitaM, Mogi G: Detection of *Haemophilus influenzae* in the nasopharynx and middle ear effusions by polymerase chain reaction, Mogi G, Honjo I, Ishii T, Takasaka T (Eds), Recent Advances in Otitis Media, Kugler Publications, 1994, p.595-599.

Mogi G, Kurono Y: Effect of oral immunization on nasopharyngeal clearance of nontypeable *Haemophilus influenzae*, Sade J (Ed), Infections in Childhood, Elservier Science Publishing, 1994, p.41-45.

Mogi G, Kurono Y, Kawauchi H: Mucosal immunity of the nose and nasopharynx, Passali D, Bellusi L, Lauliello M (Eds), Industria Grafica Rommana, 1994, p.59-64.

Kurono Y, Shigemi H, Suenaga S, Hirano T, Mogi G: Effects of oral immunization on nasopharyngeal clearance of nontypeable *Haemophilus* influenzae, Mogi G, Veldman JE, Kawauchi H (Eds), Immunobiology in Otorhinolaryngology-Progress of a Decade, Kugler Publications, 1994, p.41-44.

Kurono Y, Mogi G: Mucosal Immunity in the Middle Ear, Kiyono H, Ogra PL, McGhee JR (Eds), Mucosal Vaccine, Academic Press, 1996, p.451-458.

Mogi G, Kurono Y: Mucosal Immune Responses in the Nose, Cauwenberge P, Wang D-Y, Ingels K, Bachert C (Eds), The Nose, 1996, p.3-6.

黒野祐一：耳鼻咽喉科疾患への免疫学的アプローチ－中耳炎経口ワクチン療法の展望，茂木五郎（編），図説耳鼻咽喉科 NEW APPROACH N0.4，メジカルビュー社，1996, p.58-61.

Kurono Y, Lim DJ, Mogi G: Middle ear and eustachian tube. Pearay L Ogra, Jiri Mestecky, Michael E Lamm, Warren Strober, Jerry R McGhee, John Bienenstock (Eds), Mucosal Immunology, Academic Press, 1999, p.1305-1311.

Kurono Y, Suzuki M, Mogi G: Mucosal vaccine against otitis media, Veldman E, Passali D, Lim DJ (Eds). New Frontiers in Immunobiology, Kugler Publications, 2000, p.29-33.

黒野祐一：鼻における局所免疫応答，野村恭也，小松崎篤，本庄　巌（編），CLIENT 21 －免疫・アレルギー疾患－，中山書店，2001, p.9-16.

黒野祐一：口腔咽頭異物，小田恂（編），耳鼻咽喉科オフィスクリニック－主訴への対応編，医学書院，2002, p.136-138.

黒野祐一：免疫不全と中耳炎－ワクチン治療－，川城信子（編），耳鼻咽喉科診療プラクテイス 9. 小児の耳鼻咽喉科診療，文光堂，2002, p.254-255.

黒野祐一，出口浩二：鼻出血（オスラー病を含む）．池田勝久（編），耳鼻咽喉科診療プラクテイス 10. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科のレーザー治療，文光堂，2002, P.56-58.

黒野祐一，西元謙吾：新しい味覚機能検査－全口腔法－，阪上雅史（編），耳鼻咽喉科診療プラクテイス　12. 嗅覚・味覚障害の臨床最前線，文光堂，2003, p.124-127.

黒野祐一：咽喉頭異常感症，山口　徹，北原光夫（編），今日の治療指針 2004 年，医学書院，2004，p.5-6.

牛飼雅人，黒野祐一：鼻粘膜上皮に与える薬剤の浸透圧，耳鼻咽喉科診療 Q&A，六法出版社，2004, p.514-515.

Kurono Y, Lim DJ, Mogi G: Middle ear and Eustachian tube. Mestecky J, Lamm ME, Bienenstock J, Mayer L, McGhee JR, Strober W (Eds), Mucosal Immunology, Elsevier, 2005, 1509-1516.

黒野祐一：鼻漏，森山　寛，岸本誠司，小林俊，川内秀之（編），今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針 第 3 版，医学書院，2008，p.31-32.

黒野祐一：口腔底蜂窩織炎（Ludwig アンギーナ），今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針 第 3 版，医学書院，2008，p.342.

黒野祐一：滲出性中耳炎に対するアデノイド切除術の EBM とは？，池田勝久，ほか（編），EBM 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の治療 2010-2011．中外医学社，2010，p.128-130.

黒野祐一：深頸部膿瘍の診断，薬物治療の EBM とは？，池田勝久，ほか（編），EBM 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の治療 2010-2011．中外医学社，2010，p.392-395.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎治療薬の特徴と治療選択．今野昭義（編），新しい診断と治療の ABC 12，最新医学社，2011，p.127-133.

松根彰志，黒野祐一：顎顔面外傷，山岨達也，小川　郁（編），耳鼻咽喉科・頭頸部外科研修ノート，診断と治療社，2011，p.327-330.

黒野祐一：副腎皮質ステロイドの使い方，山岨達也，小川　郁（編），耳鼻咽喉科・頭頸部外科研修ノート，診断と治療社，2011，p. 531-532.

黒野祐一：抗アレルギー薬の使い方，山岨達也，小川　郁（編），耳鼻咽喉科・頭頸部外科研修ノート，診断と治療社，2011，p.533-534.

黒野祐一：予防医学とは？－鼻アレルギーの予防－，山岨達也，小川　郁（編），耳鼻咽喉科・頭頸部外科研修ノート，診断と治療社，2011，p.542, 2011.

黒野祐一：急性・慢性副鼻腔炎，五十嵐隆，喜多村健（編），小児科臨床ピクシス　耳・鼻・のど・いびき，中山書店，2011，p.94-98.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎 - 日常生活の指導，日本アレルギー学会（編），臨床医のためのアレルギー診療ガイドブック，診断と治療社，2012，p.187-194.

黒野祐一：抗ヒスタミン薬の適応疾患－アレルギー性鼻炎（通年性）－，宮地良樹，岡本美孝，谷内一彦（編），ファーマナビゲーター－抗ヒスタミン薬編－，メデイカルトリビュー社，2012，p.74-81.

黒野祐一：上顎複雑骨折（Le Fort II 型），岡本美孝（編），耳鼻咽喉科・頭頸部外科Q&A“　，中外医学社，2013，p.74-76.

黒野祐一：抗 LT 薬と抗 PG/TX 薬の作用機序の違いは？，市村恵一（編），ENT 臨床フロンテイア－耳鼻咽喉科最新薬物療法マニュアル－，中山書店，2014，p.182-183.

黒野祐一：マイクロニードルによるワクチンの免疫誘導の可能性，技術情報協会（編），注射剤・経口製剤に代わる新しい薬剤投与デバイスの開発，2014，p.23- 25.

黒野祐一：扁桃周囲膿瘍のエビデンスに基づいた治療法は？，池田勝久，ほか（編），EBM 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の治療 2015-2016.，中外医学社，2015，p. 333-338.

黒野祐一：花粉症，泉　孝英（編），ガイドライン外来診療 2016，日経メデイカル開発，2016，p.334-340.

黒野祐一：花粉症，泉　孝英（編），ガイドライン外来診療 2017，日経メデイカル開発，2017，p.342-348.

黒野祐一：急性副鼻腔炎－スコアリングシステムによる重症度分類と治療アルゴリズム－．小林俊光，ほか（編），ENT 臨床フロンテイア　耳鼻咽喉科標準治療のためのガイドライン活用術，中山書店，2017，p.131-135.

黒野祐一：急性副鼻腔炎－ネブライザー療法－．小林俊光，ほか（編），ENT 臨床フロンテイア　耳鼻咽喉科標準治療のためのガイドライン活用術，中山書店，2017，p.136-138.

黒野祐一：伝染性単核球症，大森孝一，藤枝重治，小島博己，猪原秀典（編），今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針　第 4 版，医学書院，2018，p.367-369.

【総　説】

Mogi G, Kawauchi H, Kurono Y: Development of the immune system in children. Rhinology 1986; 24:15-24.

茂木五郎，黒野祐一副咽頭間隙の膿瘍切開法．JOHNS 1987; 8: 1204-1208

黒野祐一，茂木五郎：有茎皮弁．JOHNS 1994; 10: 10-15.

黒野祐一，吉村弘之，茂木五郎：嚢胞状リンパ管腫の手術．JOHNS 1994; 10: 1477-1480.

茂木五郎，黒野祐一：花粉症発症機序．Pharma Medica 1994; 12: 13-18.

茂木五郎，黒野祐一：アレルギー性鼻炎の最前線－発症機序－．Nikkei Medical 1994; 2: 141-144.

茂木五郎，黒野祐一：中耳炎予防ワクチンの現況と新しい展望，耳展 1995; 38: 285-295.

黒野祐一，茂木五郎：耳管と免疫・アレルギー．Otology Japan 1995; 5: 189-193.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎と耳管．JOHNS 1996; 12: 371-373.

黒野祐一：耳下腺多形腺腫の治療－深葉型の切除手術－．JOHNS 1997; 13: 69-72.

黒野祐一，鈴木正志，須小　毅，茂木五郎：遊離弁法における術前・術後管理のコツと合併症への対応．JOHNS 1998; 14: 113-116.

黒野祐一，鈴木正志，茂木五郎：アレルギー性鼻炎と中耳炎．アレルギーの領域 1998; 5: 157-160.

黒野祐一，鈴木正志，渡辺哲生，茂木五郎：高齢者の滲出性中耳炎．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 1998; 70: 23-26.

黒野祐一，鈴木正志，茂木五郎：上気道粘膜免疫研究の展望－中耳炎予防ワクチンの開発に向けて－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 1998; 70: 713-721.

松根彰志，西園浩文，黒野祐一：耳鼻頭頸部病変患者の多臓器不全．JOHNS 1998; 14: 357-361.

黒野祐一，鈴木正志，茂木五郎：上気道感染症と粘膜免疫．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1999; 17: 176-179.

黒野祐一：反復性中耳炎の病態と治療．耳鼻臨床 1999; 92: 566-567.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎に他臓器疾が重なるとき．Allergy 21st Century 1999; 1: 13-16.

黒野祐一：中耳炎とサイトカイン．耳鼻臨床 2000; 93: 259-265.

黒野祐一，牛飼雅人：耳性・鼻性髄膜炎．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2000; 72: 55-60.

黒野祐一，福岩達哉，松根彰志，宮之原郁代，牛飼雅人：エアロゾルによる上気道ワクチン療法の可能性．耳展 2000; 43: 37-42.

黒野祐一：上気道感染症と粘膜免疫－扁桃の機能と病態－．西日本歯科矯正学会雑誌 2000; 45: 6-10.

黒野祐一：鼻漏の鑑別診断．JOHNS 2000; 16: 1583-1586.

黒野祐一，出口浩二：副腎皮質ホルモン．JOHNS 2000; 16: 1325-1327.

黒野祐一：急性・慢性副鼻腔炎．化学療法の領域 2000; 16: 1684-1689.

松根彰志，黒野祐一：慢性咽喉頭炎．JOHNS 2000; 16: 881-884.

黒野祐一：マクロライド系薬の作用点．感染と抗菌薬 2001; 4: 174-176.

黒野祐一：EBM をこう考える－アレルギー性鼻炎－．医薬ジャーナル 2001; 37: 161-165.

黒野祐一：感染症の画像診断－耳鼻咽喉科－．化学療法の領域 2001; 17: 1569-1576.

黒野祐一：経鼻ワクチン開発へ向けて－最新の展開．炎症と免疫 2001; 9: 632-637.

黒野祐一：エホバの証人の治療を通して思ったこと．小児耳鼻咽喉科 2001; 22: 67-68.

黒野祐一：鼻閉のメカニズム．アレルギー・免疫 2002; 9: 62-66.

黒野祐一：院内感染の現況とその取り扱い－ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP, PISP）－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2002; 74: 17-21.

黒野祐一：診断・治療ガイドライン－アレルギー性鼻炎－．臨床と研究 2002; 79: 207-210.

黒野祐一：鼻出血に対する顎動脈結紮術．日耳鼻専門医通信 2002; 71: 10-11.

黒野祐一，松根彰志，出口浩二：抗ロイコトリエン薬・抗トロンボキサン A2 薬の作用機序と適応．Prog Med 2002; 22: 369-373.

黒野祐一：お母さんへの回答マニュアル耳鼻咽喉科 Q&A －鼻汁がよくたまります。なぜでしょうか？どうしたらいいでしょうか？－．JOHNS 2002; 18: 424-425.

黒野祐一：お母さんへの回答マニュアル耳鼻咽喉科 Q&A －鼻クソが溜まりやすいのは病気でしょうか？－．JOHNS 2002; 18: 430-431.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎診療における患者とのコミュニケーションのとり方．現代医療 2002; 34: 13-19.

黒野祐一：鼻粘膜の免疫生理と病態．日薬理誌 2002; 120: 7-12.

黒野祐一，牛飼雅人：急性扁桃炎と扁桃摘出術．小児科診療 2002; 65: 1497-1501.

黒野祐一：頸部腫瘤の理学的鑑別診断．Medical Practice 2002; 19: 1574.

黒野祐一：滲出性中耳炎－マクロライド療法の可能性を探る－．感染と抗菌薬 2202; 5: 200-208.

黒野祐一，松根彰志：アレルギー性副鼻腔炎の概念と発症機序．MB ENT 2002; 17: 7-11.

松根彰志，西元謙吾，黒野祐一：Th2 サイトカイン抑制薬の作用機序と適応．Prog Med 2002; 22: 375-377.

DeMaria TF, Bakaletz LO, Chonmaitree T, Heikkinen T, Hurst DS, Kawauchi H, Kurono Y, Patel JA, Sih TM, Stenfors LE, Suzuki M: Recent advances in otitis media. 6. Microbiology and immunology. Ann Otol Rhinol Laryngol. 2002; 188 (Suppl): 62-81.

Bakaletz LO, Barenkamp SJ, Eskola J, Green B, Gu XX, Harada T, Heikkinen T, Karma P, Klein JO, Kurono Y, Mogi G, Murphy TF, Ogra PL, Patel JA, Suzuki M, Yamanaka N: Recent advances in otitis media. 7. Vaccine. Ann Otol Rhinol Laryngol 2002; 188 (Suppl): 82-94.

黒野祐一，出口浩二：私の処方「耳鳴り」．脳神経外科速報 2003; 13: 109-111.

黒野祐一：アレルギー性副鼻腔炎の病態に関する考察．耳鼻臨床　2003; 96: 657-663.

松根彰志，黒野祐一：鼻アレルギー診療ガイドラインに基づくアレルギー性鼻炎Q&A－抗ヒスタミン薬の適応と留意点について教えてください－．Progress in Medicine 2003; 23: 678.

松根彰志，積山幸祐，黒野祐一：外傷－眼窩底吹き抜け骨折－．MB ENT 2003; 32-37.

松根彰志，宇宿功市郎，黒野祐一：新興感染症－ HTLV-I －．MB-ENT 2003; 24: 8-12.

宮之原郁代，黒野 祐一：耳痛の鑑別診断．日本医事新報 2003; 4137: 8-12.

牛飼雅人，黒野祐一：扁桃手術におけるトラブルの予防と対応．JOHNS 2003; 19: 403-406.

牛飼雅人，黒野祐一：耳鼻咽喉科領域の皮膚・粘膜疾患－口腔粘膜疾患－：耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2003; 75: 548-551.

出口浩二，宮下圭一，黒野祐一：耳鼻咽喉科における救急疾患－急性喉頭蓋炎と扁桃周囲膿瘍－．鹿児島市医報 2003; 42: 7-10.

福山　聡，黒野祐一，清野　宏：上気道・消化管における粘膜関連リンパ組織形成プログラムからみた粘膜免疫の特異性．化学療法の領域 2003; 19: 1733-1738.

福山　聡，黒野祐一：上気道の生態防御機構．JOHNS 2003; 19: 779-782.

黒野祐一，西元謙吾：味覚障害のガイドラインをめぐって－味覚障害に対する診察のすすめかた－．口腔・咽頭科 2004; 16: 193-194.

黒野祐一：鼻アレルギーと副鼻腔炎－アレルギー性副鼻腔炎の発症機序と確定診断へのアプローチ－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2004; 76: 99-105.

黒野祐一：上気道粘膜免疫の誘導機序．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2004; 22: 1-5.

松根彰志，黒野祐一：花粉症のエビデンスに基づく治療指針－花粉症に対する鼻用ステロイド－．臨床と研究 2004; 81: 463-466.

松根彰志，孫　東，牛飼雅人，黒野祐一：慢性副鼻腔炎の病態形成における VEGF の意義．アレルギー科 2004; 17: 189-194.

松根彰志，吉福孝介，黒野祐一：鼻茸の発生部位 JOHNS 2004; 20: 1793-1796.

牛飼雅人 , 黒野 祐一：耳鼻咽喉科領域におけるクリニカルパスとインフォームドコンセント－口腔咽喉頭疾患におけるインフォームドコンセント－．MB ENT 2004; 37: 53-58.

牛飼雅人，林　多聞，相良ゆかり，黒野祐一：中耳炎と扁摘．MB ENT 2004; 39: 33-38.

牛飼雅人，黒野祐一：急性喉頭蓋炎の診療－外来診療における処置と注意－．MB ENT 2004; 40: 25-29.

牛飼雅人，林　多門，相良ゆかり，黒野祐一：急性中耳炎，滲出性中耳炎とアデノイド，扁桃．JOHNS 2004; 20: 735-738.

上村隆雄，松根彰志，黒野祐一．好酸球性中耳炎の病因．MB ENT 2004; 34: 1-7.

出口浩二，黒野祐一：プライマリ・ケアのストレス緩和－咽喉頭異常感症のストレス緩和治療－．綜合臨床 2004; 53: 203-205.

西元謙吾，黒野祐一：味覚障害のガイドラインをめぐって－全口腔法味覚検査・ソルセイブ法による味覚検査－．口腔・咽頭科 2004; 16: 195-198.

古川　仞，西崎和則，森山　寛，村上信五，洲崎春海，小林俊光，加藤寿彦，山下敏夫，阪上雅史，夜陣紘治，中島　格，黒野祐一，山下裕司，高橋　姿，山根英雄，細　裕司；日本鼻科学会嗅覚検査検討委員会：噴射式基準嗅力検査の測定方法に関するガイドライン．日本鼻科学会会誌 2004; 43: 372-374.

黒野祐一，松根彰志：アレルギーの臨床免疫学－アレルギー性副鼻腔炎－．日本臨床 2005; 63 (Suppl. 5): 102-105.

黒野祐一：チャイルドヘルス Q& －乳幼児の鼻閉－．チャイルドヘルス 2005; 8: 72.

黒野祐一：チャイルドヘルス Q&A －乳幼児の聴力検査－．チャイルドヘルス 2005; 8: 72.

黒野祐一：頭頸部外科手術における剥離鉗子．JOHNS 2005: 21; 1069-1071.

黒野祐一：耳鼻咽喉科学と粘膜免疫学の融合．感染・炎症・免疫 2005; 35: 175-177.

黒野祐一：反復性中耳炎－ワクチン療法の現況と可能性－．MB ENT 2005; 56: 71-76.

黒野祐一：上気道粘膜免疫機構とアレルギー予防・治療戦略．アレルギー科 2005; 20: 473-477.

松根彰志，積山幸祐，黒野祐一：耳鼻咽喉科系のマクロライド療法．感染と抗菌薬 2005; 18: 217-222.

松根彰志，黒野祐一：耳鼻科難病－難病の種類とその特徴－．臨床と研究 2005; 82: 1089-1092.

宮之原郁代，黒野祐一：ステロイドの上手な使い方－アレルギー性鼻炎（花粉症）におけるステロイドの上手な使い方－．アレルギーの臨床 2005; 25: 866-870.

西元謙吾，黒野祐一：難治性疾患への対応－頸部膿瘍－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2005; 77: 855-860.

大久保公裕，黒野祐一，藤枝重治：花粉症の治癒をめざして．Q&A でわかるアレルギー疾患 2005; 1: 276-290.

Barenkamp SJ, Kurono Y, Ogra PL, Leiberman A, Bakaletz LO, Murphy TF, Chonmaitree T, Patel JA, Heikkinen T, Sih TM, Hurst DS, St Geme JW 3rd, Kawauchi H, Stenfors LE: Recent advances in otitis media. 5. Microbiology and immunology. Ann Otol Rhinol Laryngol. 2005;194 (Suppl): 60-85.

Giebink GS, Kurono Y, Bakaletz LO, Kyd JM, Barenkamp SJ, Murphy TF, Green B, Ogra PL, Gu XX, Patel JA, Heikkinen T, Pelton SI, Hotomi M, Karma P: Recent advances in otitis media. 6. Vaccine. Ann Otol Rhinol Laryngol. 2005; 194 (Suppl): 86-103.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点．花粉症研究会報 2006; 17: 2-7.

黒野祐一：上気道粘膜免疫と経鼻ワクチン．日耳鼻専門医通信 2006; 86: 16-17.

黒野祐一：気管食道科医のための上気道感染症の診方．日本気管食道科学会会報 2006; 57: 186-190.

黒野祐一，相良ゆかり：小児アレルギー疾患はなぜ増加しているのか　統計調査からみた動向と要因－アレルギー性鼻炎－．Pediatric Allergy for Clinicians 2006; 2: 23-25.

黒野祐一：副鼻腔感染とアレルギー．呼吸 2006; 25: 927-932.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎に合併する副鼻腔炎の病態をどう考えるか？ JOHNS 2006; 22: 1451-1453.

黒野祐一，相良ゆかり：最新版ガイドラインの通年性鼻炎の治療とは．Q & A でわかるアレルギー疾患 2006; 2: 421-422.

黒野祐一：予防ワクチンの可能性について．小児科臨床 2006; 59: 2524-2528.

松根彰志，林　多聞，黒野祐一：滲出性中耳炎に対するアデノイド切除の有用性について．MB ENT 2006; 68: 43-46.

松根彰志，黒野祐一：スポーツと耳鼻咽喉科疾患－鼻・副鼻腔－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2006; 78: 849-852.

松根彰志，黒野祐一：病態に基づく副鼻腔炎の治療戦略－副鼻腔気管支症候群の治療戦略－．JOHNS 2006; 22: 76-80.

松根彰志，黒野祐一：上気道と下気道の関連について．呼吸と循環 2006; 54: 49-54.

松根彰志，大堀純一郎，黒野祐一：鼻アレルギーにおけるリモデリング－ Th2 型サイトカイン，VEGF，好酸球とリモデリング－．アレルギー・免疫 2006: 13; 1119-1123.

出口浩二，相良ゆかり，福岩達哉，黒野祐一：脈管原性腫瘍をどう扱うか－若年性鼻咽腔血管線維腫の放射線定位照射－．JOHNS 2006; 22: 1611-1614.

黒野祐一，吉福孝介：好酸球性副鼻腔炎の疫学・診断．JOHNS 2007; 23: 844-846.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点．八女筑後医報 2007; 320: 14-16.

黒野祐一：気道アレルギー診療における留意点－ One Airway, One Disease の観点から－．日本気管食道科学会会報 2007; 58: 217-219.

黒野祐一：粘膜免疫による耳鼻咽喉科疾患の制御．医学のあゆみ 2007; 221: 887-890.

黒野祐一，福岩達哉：経鼻粘膜ワクチンの現況と展望．耳鼻咽喉科展望 2007; 50: 136-141.

黒野祐一，田中紀充：身体の入り口における免疫機構－インフルエンザ感染と粘膜ワクチン－．実験医学 2007; 25: 3121-3125.

黒野祐一：ラストでみる病態生理－小児アレルギー性副鼻腔炎－．ALLERGIA TRENDS 2007; 12: 14-17.

黒野祐一：感染症とアレルギーをめぐって－アレルギー性鼻炎と感染症－．Topics in Atopy 2007; 6: 22-25.

黒野祐一：鼻疾患と中耳炎．鼻アレルギーフロンティア 2007; 7: 18-22.

松根彰志，黒野祐一：耳鼻咽喉科における小児への投薬－鼻出血－．MB ENT 2007; 79; 67-70.

松根彰志，黒野祐一：症候からみた小児の診断学－鼻出血－．小児科診療 2007; 70（増刊）: 378-380.

松根彰志，積山幸祐，花牟礼　豊，黒野祐一：鼻科画像診断マニュアル－急性副鼻腔炎の合併症－．MB ENT 2007; 77: 33-38.

西元謙吾，黒野祐一：急性副鼻腔炎眼窩合併症の診断と治療．耳鼻臨床 2007; 100: 614-615.

福岩達哉，黒野祐一：喉頭・気管・食道領域の救急対応と医事問題．日本気管食道科学会・専門医通信 2007; 34: 8-15.

黒野祐一，田中紀充，福岩達哉，宮下圭一，早水佳子：上気道炎症とワクチン療法．日耳鼻 2008; 111: 689-694.

黒野祐一：花粉症　患者の望む治療とは－患者満足度を高める花粉症治療－．MEDICO 2008; 39: 53-55.

福岩達哉，藤橋浩太郎，黒野祐一：Drug Delivery System (DDS) としてのエアロゾルの将来性　鼻粘膜を介した新たな治療戦略の開発と応用－免疫賦活のためのアジュバント－．耳展 2008; 51（補 1）: 39-42.

黒野祐一：鼻閉用薬剤の使用法．Prog. Med. 2009; 29: 311-314.

黒野祐一：ここが知りたいアレルギー性鼻炎 Q&A －アレルギー性鼻炎の薬物療法において投与終了時期はどのように判断すればよいのか教えてください－．JOHNS 2009; 25: 390-392.

黒野祐一：鼻アレルギー診療ガイドライン改訂に臨んで－鼻閉用薬剤の使用法－．Progress in Medicine 2009; 2: 311-314.

黒野祐一：上気道－下気道－連関．呼吸 2009; 28: 579-584.

黒野祐一：耳鼻咽喉科アレルギーの治療薬 update －鼻・副鼻腔のアレルギー疾患と治療薬の使用法－．MB ENT 2009; 104: 6-11.

黒野祐一：副腎皮質ステロイド治療の臨床－扁桃疾患－．JOHNS 2009; 25: 1004-1006.

黒野祐一：深頸部感染症における合併症への対応－筋壊死・筋膜壊死－．JOHNS 2009; 25: 1681-11684.

黒野祐一：喘息・アレルギーガイドラインの使い方のポイント－アレルギー性鼻炎ガイドライン－．アレルギア 38: 23-26, 2009.

黒野祐一：ガイドラインのワンポイント解説　アレルギー性鼻炎－第 6 版改訂のポイント－．アレルギー 2009; 58 (11) : 1484-1489.

黒野祐一：炎症性耳鼻科疾患の病態と診断・治療－急性中耳炎－．医学と薬学 2009; 62: 951-956.

黒野祐一：小児期における扁桃の役割と扁桃摘出術の適応．小児耳鼻咽喉科 2009; 30: 196-199.

松根彰志，大堀純一郎，吉福孝介，黒野祐一：好酸球性副鼻腔炎の病態と診断に関する問題点．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2009; 81: 11-17.

大堀純一郎，林　多聞，黒野祐一：耳下腺腫瘍の診断　現行の検証と新たな提言－MRI による耳下腺腫瘍の画像診断－．口腔・咽頭科 2009; 22: 79-82.

永野広海，吉福孝介，黒野祐一：プライマリケア医が深頸部感染症を見つけるためのポイント．JOHNS 2009; 25: 1602-1608.

黒野祐一：内科医のための花粉症入門－花粉症治療－．Mebio 2010; 27: 33-41.

黒野祐一：急性喉頭蓋炎の取り扱い．日耳鼻専門医通信 2010: 102; 8-9.

黒野祐一：診療ガイドライン・診療の手引き概要－副鼻腔炎－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2010; 82: 205-212.

黒野祐一：外来診療における初期診療－花粉症－．診断と治療 2010; 98 (suppl.): 109-113.

黒野祐一：耳鼻咽喉科疾患をめぐる内科と耳鼻科の接点－専門医との医療連携を含めて－．Prog Med 2010; 30: 1015-1018.

黒野祐一：鼻・副鼻腔の検査－鼻アレルギー検査－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2010: 82; 167-173.

黒野祐一：好酸球関連の病変－好酸球総論－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2010; 82: 653-659.

黒野祐一：お母さんへの回答マニュアル耳鼻咽喉科 Q&A 2010 －鼻が悪くて通院していますが，スイミングは通わせてよいでしょうか－． JOHNS 2010; 26: 1394-1395.

黒野祐一：鼻咽腔関連リンパ組織．炎症と免疫 2010; 18: 557-559.

黒野祐一：耳鼻咽喉科医がアレルギー性鼻炎に使う抗ヒスタミン薬．Topics in Atopy 2010; 9: 27-31.

松根彰志，大堀純一郎，林　多聞，黒野祐一：頭頸部癌診療の ABC- 診療所における基本戦略－鼻副鼻腔癌－．MB ENT 2010; 116: 16-20.

松根彰志，川畠雅樹，黒野祐一：嗅覚に関する検査：基準嗅力検査，噴霧式基準嗅力検査．JOHNS 2010; 26: 1113-1116.

大堀純一郎，黒野祐一：耳鼻咽喉・頭頸部画像アトラス－咽後膿瘍－．JOHNS 2010; 26: 409-410.

大堀純一郎，黒野祐一：頭頸部外傷への対応－上顎骨（前頭骨を含む）・頬骨骨折－．頭頸部外科 2010; 20: 81-85.

山中　昇，飯野ゆき子，宇野芳史，工藤典代，黒野祐一，洲崎春海，春名眞一，保富宗城，堀口茂俊，間島雄一，松原茂規，中山健夫，岡本美孝，平川勝洋；急性鼻副鼻腔炎診療ガイドライン作成委員会：急性鼻副鼻腔炎診療ガイドライン 2010 年版．日本鼻科学会会誌 2010; 49: 143-247.

黒野祐一：Bedside Teaching －急性喉頭蓋炎－．呼吸と循環 2011; 1: 77-82.

黒野祐一：ステロイド療法の実際－耳鼻咽喉科疾患－．臨床と研究 2011; 1: 50-54.

黒野祐一：慢性副鼻腔炎のマクロライド療法 up-to-date. 診断と新薬 2011; 48: 247-254.

黒野祐一：病原体をマスターする　ウイルス感染症－ RS ウイルス－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2011; 83: 201-205.

黒野祐一：耳鼻咽喉科領域の感染症と対応－中耳炎－．化学療法の領域 2011; 27: 1813-1819.

黒野祐一：点鼻・噴霧・吸入薬の使い方．JOHNS 2011; 27: 1302-1303.

黒野祐一：耳鼻咽喉科領域のウイルス・細菌・真菌感染症治療戦略－急性喉頭蓋炎－．MB ENT 2011; 131: 135-140.

黒野祐一：気道アレルギー疾患の早期診断と早期介入－アレルギー性鼻炎の早期診断と早期介入－．アレルギーの臨床 2011; 31: 976-980.

黒野祐一：マクロライド薬の新作用とその有用性－耳鼻咽喉科領域：慢性副鼻腔炎を中心に－．医薬ジャーナル 2011; 47: 2749-2753.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎に対する抗ヒスタミン薬の用い方．日本医事新報 2011; 4570：73-77.

黒野祐一：抗アレルギー薬の現状と近未来－次世代の抗ヒスタミン薬－．アレルギーの臨床 2011; 31: 1256-1260.

黒野祐一：鼻吸引の有効性はどう考えられていますか．小児内科 2011; 43: 590-592.

黒野祐一，平川勝洋，飯野ゆき子：アレルギー性鼻炎に合併する副鼻腔炎陰影の取り扱い－アレルギー性鼻副鼻腔炎の治療方針－．THE JAPANESE JOURNAL OF ANTIBIOTICS 2011; 64: 345-353.

大堀純一郎，黒野祐一：好酸球性副鼻腔炎における好酸球浸潤の機序．耳鼻臨床 2011; 104: 465-473.

Okubo K, Kurono Y, Fujieda S, Ogino S, Uchio E, Odajima H, Takenaka H, Baba K; Japanese Society of Allergology: Japanese guideline for allergic rhinitis. Allergol Int. 2011;60: 171-189.

黒野祐一：花粉症における薬物療法－花粉症治療薬選択のポイント－．Clinic Magazine 2012; 511: 27-30.

黒野祐一：花粉症の疑問に答える－スギ花粉症に自然治癒はあるのか？－．JOHNS 2012; 28: 27-29.

黒野祐一：感染症と抗菌薬の使い方　多剤耐性菌感染症時代の予防から治療まで－耳鼻咽喉科領域－．診断と治療 2012; 100: 408-412.

黒野祐一：アレルギー疾患診断・治療ガイドラインの活用ポイント－アレルギー性鼻炎－．臨床と研究 2012; 89: 298-302.

黒野祐一：小児耳鼻咽喉科 108 の疑問－免疫系・リンパ組織はどのように発達するのか？－．JOHNS 2012; 28: 275-276.

黒野祐一：炎症・感染症診療 NAVI －深頸部膿瘍－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2012; 84: 201-205.

黒野祐一：目で見る咽喉頭・気管食道の検査－咽頭の CT 検査－．JOHNS 2012; 28: 853-857.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎遷延化の要因とその対応．臨床免疫・アレルギー科 2012; 58: 608-612.

黒野祐一：日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 30 年の歴史を振り返って．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2012; 30: 261-264.

黒野祐一，大堀純一郎：喘息難治化の要因と治療－鼻・副鼻腔炎－．アレルギーの臨床 2012; 32: 1315-1318.

松根彰志，大久保公裕，黒野祐一：花粉症研究の最前線－ VEGF をターゲットとした花粉症治療の可能性－．臨床免疫・アレルギー科 2012; 57: 52-55.

大堀純一郎，黒野祐一：耳鼻咽喉科における抗ウイルス薬・ステロイドの効果的処方－耳介軟骨膜炎等の診断と治療におけるステロイドの使い方－．MB ENT 2012; 139: 117-121.

Fujieda S, Kurono Y, Okubo K, Ichimura K, Enomoto T, Kawauchi H, Masuyama K, Goto M, Suzaki H, Okamoto Y, Takenaka H: Examination, diagnosis and classification for Japanese allergic rhinitis: Japanese guideline. Auris Nasus Larynx. 2012; 39: 553-556.

黒野祐一：最新の鼻・副鼻腔疾患診療「スギ・ヒノキ花粉症」．日本医師会雑誌 2013; 141: 2173-2175.

黒野祐一：アレルギー疾患ガイドラインとその使い方－アレルギー性鼻炎－，Modern Physician 2013; 33: 156-159.

黒野祐一：新薬展望 2013　治療における最近の新薬の位置付け－抗アレルギー薬－．医薬ジャーナル 2013; 49: 394-402.

黒野祐一：“図でみる免疫学の ABC”免疫系の仕組みと基礎－免疫とは－．JOHNS 2013; 29: 283-286.

黒野祐一：疾患ごとの救急処置法・処方　炎症 / 感染症－鼻性眼窩内合併症－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2013; 85: 204-207.

黒野祐一：鼻アレルギー診療ガイドラインとその使い方．アレルギーの臨床 2013; 33: 813-818.

黒野祐一：上気道炎症と粘膜免疫．THE LUNG-perspectives 2013; 21: 334-337.

黒野祐一：耳鼻咽喉科領域の外傷－上顎・頬骨骨折－．MB ENT 2013; 155: 44-50.

春名眞一，友田幸一，黒野祐一，平川勝洋，三輪高喜，松根彰志，鴻　信義，朝子幹也，竹内裕美，竹中　洋，岡本美孝，日本鼻科学会副鼻腔炎手術技術機能評価委員会：慢性副鼻腔炎に対する内視鏡下副鼻腔手術－新たな手術分類とその評価－．日本鼻科学会会誌 2013; 52: 143-157.

黒野祐一：花粉症患者に対する鼻アレルギー診療ガイドラインの読み方．アレルギーの臨床 2014; 34: 119-123.

黒野祐一：スギ・ヒノキ花粉症－初期療法の考え方の変遷－．アレルギー・免疫 2014: 21; 64-69.

黒野祐一：外来処置の秘訣－ネブライザー－．JOHNS 2014: 30; 367-370.

黒野祐一：診療の秘訣－急性喉頭蓋炎の診方－．Modern Physician 2014; 34: 854.

黒野祐一：ワクチン療法　治療から予防へ－肺炎球菌，インフルエンザ菌－．日耳鼻 2014; 117: 955-957.

黒野祐一：小児上気道感染症と粘膜免疫．愛知県小児科医会会報 2014; 99: 33-36.

黒野祐一：“こんなときどうする？”鼻漏・後鼻漏を訴えるが副鼻腔Ｘ線撮影は正常所見！ JOHNS 2014; 30: 1204-1206.

黒野祐一：副鼻腔気管支症候群．日本気管食道科学会会報 2014; 65: 431-432.

黒野祐一：感染症診療 update －急性上気道炎・急性喉頭蓋炎－．日本医師会雑誌 2014; 143（特別号）: 114-115.

吉福孝介：喉頭急性炎症に対する局所薬物療法．MB ENT 2014; 168: 52-56.

東田有智，黒野祐一：One airway, one disease. 日本気管食道科学会会報 2014; 65: 160-161.

山中　昇，飯野ゆき子，宇野芳史，工藤典代，黒野祐一，洲崎春海，春名眞一，保富宗城，堀口茂俊，間島雄一，松原茂規，中山健夫，岡本美孝，平川勝洋；日本鼻科学会急性鼻副鼻腔炎診療ガイドライン作成委員会：急性鼻副鼻腔炎診療ガイドライン　2010 年版（追補版）日本鼻科学会会誌 2014; 53: 103-160.

三輪高喜，黒野祐一，平川勝洋，小林正佳，都筑建三，吉田厚子，吉福孝介：日本鼻科学会嗅覚検査検討委員会嗅覚検査検討委員会　ポジションペーパー．日本鼻科学会会誌

2014; 53（別冊）: S29-S51.

Okubo K, Kurono Y, Fujieda S, Ogino S, Uchio E, Odajima H, Takenaka H; Japanese Society of Allergology: Japanese Guideline for Allergic Rhinitis 2014. Allergol Int. 2014;63: 357-375.

黒野祐一：花粉症の実地診療　日常実地診療の基本とその活用　治療のポイント－治療指針と薬の選び方－．Medical Practice 2015; 32: 566-572.

黒野祐一：咳を聴きとり，咳を止める－後鼻漏を伴う咳を見た際には？－．総合診療 2015; 25: 472-475.

黒野祐一：総合アレルギー専門医とガイドライン－アレルギー性鼻炎－．アレルギーの臨床 2015; 35: 839-843.

黒野祐一：今また結核を見直す－頸部リンパ節結核－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2015; 87: 742-747.

黒野祐一：鼻アレルギー診療ガイドライン－通年性鼻炎と花粉症－2013 年版（改訂第 7 版）－耳鼻咽喉科医以外の医師のための活用法－．アレルギー 2015; 64: 1205-1209.

黒野祐一：アレルギー診療のトータルアプローチ－総合アレルギー専門医に求められる耳鼻咽喉科領域－．喘息 2015; 28: 174-178.

黒野祐一：季節性アレルギー性鼻炎と周辺疾患－抗ヒスタミン薬の効果　耳鼻咽喉科から－．アレルギー・免疫 2015; 23: 30-35.

川畠雅樹，黒野祐一：耳鼻咽喉科薬物療法 2015　耳鼻咽喉科の疾患・症候別薬物療法－外耳炎－．JOHNS 2015; 31: 1178-1179.

Yamanaka N, Iino Y, Uno Y, Kudo F, Kurono Y, Suzaki H, Haruna S, Hotomi M, Horiguchi S, Mashima Y, Matsubara S, Nakayama T, Hirakawa K, Okamoto Y; Drafting Committee for Acute Rhinosinusitis Management Guideline, Japanese Rhinologic Society: Practical guideline for management of acute rhinosinusitis in Japan. Auris Nasus Larynx. 2015; 42: 1-7.

黒野祐一：季節性アレルギー性鼻炎と周辺疾患 II．抗ヒスタミン薬の効果－耳鼻咽喉科から－．アレルギー・免疫 2016; 23: 30-35.

黒野祐一：各領域における「アレルギー総合医」と「アレルギー専門医」－耳鼻咽喉科領域－．アレルギー・免疫 2016; 23: 782-787

黒野祐一：耳鼻咽喉科処方マニュアル－扁桃炎・扁桃周囲膿瘍－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2016; 88: 140-143.

黒野祐一：アレルギー疾患のすべて－アレルギーの予防－．日本医師会雑誌 2016; 145（特別号）: 112-113.

黒野祐一：鼻アレルギー診療ガイドライン－通年性鼻炎と花粉症－2016 年版（改訂第 8 版）－抗ヒスタミン薬使用のポイント－．アレルギー 2016; 65: 982-986.

黒野祐一：アレルギー性鼻炎発症・治療のメカニズム－通年性鼻炎・花粉症の重症度に応じた治療法の選択と効果－．Prog. Med. 2016; 36: 1491-1495.

黒野祐一：耳鼻咽喉科と慢性炎症－耳鼻咽喉科領域の慢性炎症とその要因－．別冊 Bio Clinica: 慢性炎症と疾患 2016; 5: 6-7.

宮之原郁代：アレルギー性鼻炎治療の新たな展開－アドヒアランス向上のために－．JOHNS 2016; 32: 725-728.

黒野祐一，大堀純一郎：扁桃周囲膿瘍の病態と治療．アレルギー・免疫 2017; 24: 109-116.

黒野祐一：日常診療に潜む怖い耳鼻咽喉科疾患－急速に進行し窒息に至る急性喉頭蓋炎の臨床－．臨牀と研究 2017; 94: 129-133.

黒野祐一：鼻アレルギー診療ガイドライン 2016 年版の使い方と新規抗ヒスタミン薬への期待．鼻アレルギーフロンテイア 2017; 17: 98-102.

黒野祐一：診断と治療の ABC アレルギー性鼻炎－抗ロイコトリエン薬－．最新医学 2017; 別冊 アレルギー性鼻炎 : 71-76.

三輪高喜，池田勝久，小河孝夫，小林正佳，近藤健二，志賀英明，鈴木元彦，石橋卓弥，都築建三，古田厚子，松脇由典，元雄良治，藤枝重治，黒野祐一；嗅覚障害診療ガイドライン作成委員会：嗅覚障害診療ガイドライン．日本鼻科学会会誌 2017; 56: 487-556.

Okubo K, Kurono Y, Ichimura K, Enomoto T, Okamoto Y, Kawauchi H, Suzaki H, Fujieda S, Masuyama K; Japanese Society of Allergology: Japanese guidelines for allergic rhinitis 2017. Allergol Int. 2017; 66: 205-219.

黒野祐一：急性喉頭蓋炎および下極型扁桃周囲膿瘍の診療における留意点．INFECTION FRONT 2018; 42: 8-10.

黒野祐一：「急性鼻副鼻腔炎に対するネブライザー療法の手引き」について．MB ENT 2018; 219: 49-54.

黒野祐一：上気道炎症の粘膜ワクチンによる制御．日耳鼻 2018; 121: 338-341.

黒野祐一：ガイドライン・手引きからみた副鼻腔炎の治療－副鼻腔炎診療の手引きによる慢性副鼻腔炎の治療－．日耳鼻 2018; 121: 1118-1120.

黒野祐一：感覚器症候のみかた－嗅覚障－害．日本医師会雑誌 2018; 147: 112-113.

黒野祐一：これだけは知っておきたい医療安全と感染制御－耳鼻咽喉科診療における感染対策の特徴－．JOHNS 2018; 34: 1451-1453.

黒野祐一：今さら聞けないかぜ診療の ABC －高齢者のかぜと肺炎球菌ワクチン－．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2018; 90; 964-967.

大堀純一郎，黒野祐一：口腔底類皮嚢胞．耳鼻臨床 2018; 111: 804-805.

河野　茂，砂川慶介，二木芳人，東山康仁，堀　誠治，荒川創一，八木澤守正，柳原克紀，小笠原和彦，小田島正明，小野　真，加藤研一，高橋　誠，津下宏之，長島正人，丸尾彰範，佐藤淳子，三鴨廣繁，赤松浩彦，大西誉光，山崎　修，渡辺晋一，草地信也，竹末芳生，小谷明弘，弦本敏行，松下和彦，門田淳一，綿貫祐司，石川清仁，清田　浩，重村克己，高橋　聡，濱砂良一，速見浩士，村谷哲郎，安田　満，山　新吾，渡邉豊

彦，竹末芳生，野口靖之，吉村和晃，相楽裕子，外園千恵，中川　尚，秦野　寛，黒野祐一，鈴木賢二，山中　昇，金子明寛，山根伸夫，岩田　敏，尾内一信，坂田　宏，舘田一博；抗菌薬臨床評価ガイドライン改定委員会：抗菌薬の臨床評価方法に関するガイドライン．日本化学療法学会雑誌 2018; 66: 1-81.

黒野祐一：私のこの 1 冊「耳鼻咽喉科手術全書」（全 3 巻）．JOHNS 2019; 35: 250-251.

黒野祐一：治療法の再整理とアップデートのために　専門家による私の治療－扁桃周囲炎・扁桃周囲膿瘍－．日本医事新報 2019; 4967: 48.

黒野祐一：気管食道科領域における好酸球性疾患－耳鼻咽喉科領域における好酸球性疾患－．日本気管食道科学会会報 2019; 70: 320-325.

Miwa T, Ikeda K, Ishibashi T, Kobayashi M, Kondo K, Matsuwaki Y, Ogawa T, Shiga H, Suzuki M, Tsuzuki K, Furuta A, Motoo Y, Fujieda S, Kurono Y. Clinical practice guidelines for the management of olfactory dysfunction - Secondary publication. Auris Nasus Larynx. 2019; 46: 653-662.

Ohki M, Hyo Y, Yoshiyama Y, Takano H, Takahata J, Suzuki M, Takeno S, Ogoshi T, Suzuki K, Takeuchi K, Naito K, Haruna S, Fujisawa T, Yamaguchi S, Hotomi M, Kawauchi H, Kurono Y; working group of the Japan Society for Infection and Aerosol in Otorhinolaryngology: Consensus guidance of nebulizer therapy for acute rhinosinusitis. Auris Nasus Larynx. 2020; 47: 18-24.

【原著論文】

黒野祐一，大山　勝，昇　卓夫，古田　茂，清田隆二，深水浩三，坂本邦彦，矢野博美：頭頸部腫瘍に対するレーザー手術の検討．耳鼻臨床，1982; 75: 1525-1533.

黒野祐一，大山　勝，橋本真実，小幡悦朗，清田隆二，坂本邦彦，深水浩三，矢野博美：口腔癌に対する新しい併用療法の試み．耳鼻と臨床 1982; 29: 353-359.

Ohyama M, Furuta S, Kurono Y, Yano H, Ogawa K, Katsuda K:.Reflectance spectrophotometric studies on mucosal pathology of the upper airway. Laryngoscope. 1982; 92: 1168-1172.

黒野祐一，藤吉達也，梅原豊治，前田昇一，茂木五郎：僧帽弁狭窄症を有する頭頸部腫瘍患者の術後管理．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会報 1983; 1: 108-111.

黒野祐一，茂木五郎：鼻分泌液中の分泌型 IgA と血清型 IgA．日本鼻科学会会誌 1983; 22: 166-168.

黒野祐一，茂木五郎：鼻分泌液中の免疫グロブリンならびにその M protein に対する抗体活性．日本鼻科学会会誌 1984; 23: 52-53.

黒野祐一，茂木五郎：鼻分泌液中の分泌型 IgA と血清型 IgA ならびにその M protein に対する抗体．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 1984; 2: 24-25.

茂木五郎，黒野祐一：中耳貯留液の IgA．Ear Res Jpn 1984; 15: 34-36.

藤吉達也，茂木五郎，黒野祐一：腸骨を移植した広背筋皮弁による下顎骨再建．日耳鼻 1984; 87: 1643-1649.

藤吉達也，茂木五郎，前田昇一，梅原豊治，黒野祐一，川内秀之，吉村弘之：頭頸部再建術後感染とくに下顎・口腔底・食道再建術後の頭頸部感染について．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1984; 2: 34-37.

黒野祐一，友永和宏，加藤博文，茂木五郎：滲出性中耳炎における I 型アレルギーの役割（第 3 報）．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 1985; 3: 74-75.

黒野祐一，友永和宏，茂木五郎：鼻アレルギーに対するヒスタミン加ヒト免疫グロブリン療法．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 1985; 3: 62-66

黒野祐一，吉村弘之，川内秀之，藤吉達也，茂木五郎：頭頸部疾患における敗血症発症の問題点．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1985; 3: 76-80.

茂木五郎，黒野祐一，川内秀之：中耳腔貯留液の分泌型 IgA と血清型 IgA, ならびに連鎖球菌膜抗原（M 抗原）に対する抗体活性．耳展 1985; 28: 371-375.

梅原豊治，茂木五郎，前田昇一，藤吉達也，黒野祐一，川内秀之，吉村弘之：滲出性中

耳炎におけるⅠ型アレルギーの役割－臨床的観察－．耳鼻臨床 1985; 78: 1051-1057

渡辺徳武，鈴木正志，黒野祐一，茂木五郎：諸検査の総合的評価による顔面神経麻痺の早期予後判定．Facial Nerve Research 1985; 5: 235-244.

藤吉達也，黒野祐一，吉村弘之，堀　文彦，友永和宏，茂木五郎：眼窩壁骨折例における治療法の選択．日本鼻科学会会誌 1985; 24: 155-156.

馬場駿吉，木下治二，森　慶人，鈴木賢二，大山　勝，勝田兼司，古田　茂，大野郁夫，小幡悦郎，昇　卓夫，山本　誠，小川　敬，矢野博美，伊東一則，飯田冨美子，茂木五郎，黒野祐一，本堂　潤，羽柴基之，河合　乍，村井兼孝，波多野　努，高野　剛，武藤允人，松下　隆，丸尾　猛，伊藤晴夫，野田　勝，小林武弘，和田健二，稲垣光昭，関谷芳正，伊藤弘美，杉山和子，大野　聖，橋本真実，大堀八洲一，小川和昭，前山拓夫，渡辺徳武，中島光好，出口浩一：急性化膿性中耳炎および慢性化膿性中耳炎急性増悪症に対するS6472（セファクロル持続性製剤）とセファクロル通常製剤薬効比較試験．耳鼻と臨床 1985; 31:993-1011.

Mogi G, Fujiyoshi T, Kurono Y, Kawauchi H, Yoshimura H: Reconstructive surgery of head and neck cancer using various pedicle flaps. Auris Nasus Larynx 1985; 12 (suppl): S24-29.

黒野祐一，佐藤春生，友永和宏，茂木五郎：当科におけるレーザー手術症例の検討．日本レーザー医学会誌 1986; 6: 423-426.

黒野祐一，友永和宏，茂木五郎：鼻粘膜誘発による耳管機能の変化．臨床耳科 1986; 13: 340-341.

黒野祐一, 一宮一成，茂木五郎：鼻粘膜上皮の細菌定着性に関する免疫学的検討．日本鼻科学会会誌 1986; 25: 144-145.

黒野祐一，加藤博文，茂木五郎：当科における滲出性中耳炎の細菌学的検討－外耳道・鼻咽腔検出菌との相関について－．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1986; 4: 76-80.

黒野祐一：上気道の免疫と生体防禦 抗体と補体．日本鼻科学会会誌 1986; 24: 258-266.

友永和宏，黒野祐一，茂木五郎：小児鼻アレルギーに対するヒスタグロビンネビュライザー療法の治療効果．日本医用エアロゾル研究会報告 1986; 9: 68-72.

久我正明，藤吉達也，黒野祐一，堀　文彦，茂木五郎：小児頸部腫瘤 13 症例．耳鼻と臨床 1986; 32: 350-354.

堀　文彦，藤吉達也，川内秀之，黒野祐一，渡辺徳武，茂木五郎：頭頸部悪性腫瘍に対するシスプラチンの使用経験．耳鼻と臨床 1986; 32: 529-533.

加藤博文，黒野祐一，茂木五郎：滲出性中耳炎に対する細菌学的検討．臨床耳科 1986; 13: 404-405.

Mogi G, Fujiyoshi T, Kurono Y, Kawauchi H: Latissimus dorsi myocutaneous-iliac bone flap for reconstruction of massive defects of mandible and oral basis. Laryngoscope 1986; 96; 171-177.

黒野祐一，藤吉達也，茂木五郎：粘膜上皮細胞への細菌定着性に関する検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1987; 5: 87-91.

吉村弘之，黒野祐一，友永和宏，茂木五郎：中耳貯留液の細菌学的研究．臨床耳科 1987; 14: 96-97.

友永和宏，黒野祐一，川内秀之，茂木五郎：当科における小児鼻アレルギーの統計的観察．耳鼻と臨床 1987; 33: 881-882.

友永和宏，黒野祐一，吉村弘之，茂木五郎，出口浩一：滲出性中耳炎の細菌学的検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1987; 5: 10-14.

友永和宏，黒野祐一，茂木五郎：当科における小児滲出性中耳炎における鼻アレルギーの役割－臨床的観察－．日耳鼻 1987; 90: 1840-1848.

友永和宏，黒野祐一，島村康一郎，茂木五郎：滲出性中耳炎における I 型アレルギーの役割．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 1987; 5: 72-73.

一宮一成，黒野祐一，茂木五郎：頭頸部外科手術におけるレーザーの応用．日本レーザー

医学会誌 1987; 7: 173-174.

植山茂宏，渡辺徳武，藤吉達也，黒野祐一，茂木五郎：扁桃周囲膿瘍－若年者と高齢者について－．日本扁桃研究会会誌 1987; 26: 90-94.

Kurono Y, Mogi G.: Secretory IgA and serum type IgA in nasal secretion and antibody activity against the M protein. Ann Otol Rhinol Laryngol. 1987; 96: 419-424.

黒野祐一，加藤宏司，島村康一郎，茂木五郎：インフルエンザ菌の鼻咽腔粘膜上皮への定着に関する免疫学的検討．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 1988; 34: 6786-800.

大山　勝，宮崎康博，古田　茂，矢野博美，坂倉康夫，鵜飼幸太郎，原田　泉，竹内理子，原田康夫，鈴木　衛，平川勝洋，古内一郎，馬場廣太郎，王　主栄，清野　仁，馬場駿吉，稲垣光昭，茂木五郎，友永和宏，黒野祐一，小川浩司，須貝六實，椿　茂和，増田閃一：通年性鼻アレルギー及び感冒時の鼻炎に対する局所温熱療法の臨床的検討－二重盲検比較試験による臨床的検討－．耳展 1988; 31 (Suppl): 133-146.

藤吉達也，渡辺哲生，一宮一成，佐藤春生，堀　文彦，黒野祐一，茂木五郎：咽頭扁桃の組織構築．日本扁桃研究会誌 1988; 223-231.

友永和宏，黒野祐一，茶園篤男，茂木五郎，出口浩一：アデノイドと滲出性中耳炎－鼻咽腔細菌叢－．日本扁桃研究会誌 1988; 27: 250-254.

友永和宏，黒野祐一，茂木五郎：耳鼻咽喉科感染症に対する Cefotiam hexetil の臨床的検討．日本化学療法学会雑誌 1988; 36 (Suppl): 839-842.

友永和宏，黒野祐一，茶園篤男，茂木五郎，出口浩一：滲出性中耳炎の細菌学的検討－薬剤耐性菌の関与について－．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1988; 6: 36-40.

佐藤春生，黒野祐一，茂木五郎：耳鼻咽喉科感染症に対する NY-198 の臨床的検討．日本化学療法学会雑誌 1988; 36 (Suppl): 1314-1320.

久我正明，黒野祐一，茂木五郎：耳鼻咽喉科感染症に対する RU28965 の検討．日本化学療法学会雑誌 1988; 36 (Suppl): 508-513.

一宮一成，黒野祐一，弓崎明輝，渡辺徳武，茂木五郎：通年性鼻アレルギーに対する AA-673 錠の使用経験．耳展 1988; 31 (Suppl): 109-118.

植山茂宏，黒野祐一，茂木五郎：耳鼻咽喉科感染症に対する Cefodizine (THR-221) の使用経験．日本化学療法学会雑誌 1988; 36 (Suppl): 918-921.

渡辺哲生，藤吉達也，友永和宏，黒野祐一，茂木五郎：鼓膜の肥満細胞．Ear Res Jpn 1988; 19:119-121.

島村康一郎，黒野祐一，加藤宏司，茂木五郎：インフルエンザ菌の鼻咽腔粘膜上皮への定着性に関する検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1988; 6: 1-4.

Kurono Y, Tomonaga K, Mogi G: *Staphylococcus epidermidis* and *Staphylococcus aureus* in otitis media with effusion. Arch Otolaryngol Head Neck Surg 1988; 114:1262-1265.

Kurono Y, Mogi G: Otitis media with effusion and the nasopharynx. A bacteriological and immunological study. Acta Otolaryngol. 1988;454 (Suppl): 214-217

Tomonaga K, Kurono Y, Mogi G: The role of nasal allergy in otitis media with effusion. A clinical study. Acta Otolaryngol 1988; 458 (Suppl) :41-47.

黒野祐一，茂木五郎，弓崎明輝，佐藤春生，久我正明，加藤博文，友永和宏，川内秀之：通年性鼻アレルギーに対する Ketotifen 点鼻液の使用経験．耳鼻と臨床 1989; 35: 933-939.

黒野祐一，金田則嗣，茂木五郎：携帯型インピーダンスオージオメーターの使用経験．日耳鼻 1989; 92: 772-776.

黒野祐一，島村康一郎，重見英男，茂木五郎：鼻咽腔粘膜上皮細胞への細菌定着性と分泌型 IgA の役割．Therapeutic Research 1989; 10: 4433-4437.

島村康一郎，黒野祐一，茂木五郎：耳鼻咽喉科領域における BMY-28100 の臨床的検討．日本化学療法学会雑誌 1989; 37 (Suppl): 794-799.

Kurono Y, Fujiyoshi T, Mogi G: Secretory IgA and bacterial adherence to nasal mucosal cells.

Ann Otol Rhinol Laryngol. 1989; 98: 273-277.

Tomonaga K, Kurono Y, Chaen T, Mogi G: Adenoids and otitis media with effusion: nasopharyngeal flora. Am J Otolaryngol. 1989; 10: 204-207.

重見英男，黒野祐一，島村康一郎，茂木五郎：*Haemophilus influenzae*, *Streptococcus pneumoniae* の鼻咽腔粘膜上皮細胞への定着性と分泌型 IgA の役割．日本耳鼻咽喉科感染症学会会誌 1990; 8: 16-20.

重見英男，黒野祐一，島村康一郎，茂木五郎：ヒト頬粘膜上皮細胞へのカンジダの定着と唾液の影響．Therapeutic Research 1990; 11: 3029-3032.

Tomonaga K, Chaen T, Kurono Y, Mogi G: Type I allergic reactions of the middle ear and eustachian tube: an experimental study. Auris Nasus Larynx. 1990;17: 121-131.

Shimamura K, Shigemi H, Kurono Y, Mogi G: The role of bacterial adherence in otitis media with effusion. Arch Otolaryngol Head Neck Surg. 1990; 116:1143-1146.

友永和宏，黒野祐一，島康一郎，茶園篤男，重見英男，茂木五郎，出口浩一：滲出性中耳炎と細菌－中耳貯留液の検出菌と臨床像－．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1991; 9: 78-82.

Kurono Y, Shimamura K, Shigemi H, Mogi G: Inhibition of bacterial adherence by nasopharyngeal secretions. Ann Otol Rhinol Laryngol. 1991;100: 455-458.

Kurono Y, Shimamura K, Mogi G: Inhibition of nasopharyngeal colonization of *Hemophilus influenzae* by oral immunization. Ann Otol Rhinol Laryngol 1992; 157(Suppl): 11-15.

黒野祐一，鈴木正志，重見英男，茂木五郎：遊離弁血管端側吻合の有用性と問題点．頭頸部外科 1993; 3: 131-134.

黒野祐一，重見英男，松下　太，茂木五郎：舌・口腔底，中咽頭再建例の術後機能．口腔・咽頭科 1993; 5: 161-166.

黒野祐一，重見英男，末永　智，茂木五郎：当科における眼窩壁吹き抜け骨折症例の検討．日本鼻科学会会誌 1994; 32: 276-280.

黒野祐一，堀　文彦，鈴木正志，茂木五郎：心臓血管外科的マイクロサージャリー．頭頸部外科 1994; 4: 9-13.

重見英男，黒野祐一，渡辺徳武，茂木五郎：下顎骨骨折の治療成績．耳鼻臨床 1994; 87: 67-71.

植山朋代，黒野祐一，調　恒明，竹下正純，茂木五郎：鼻咽腔細菌検査における PCR 法の応用．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1993; 11: 33-36.

熊澤忠躬，岩野　正，藤田明彦，黒野祐一，谷村史子，青木和博：滲出性中耳炎の病態－最近の知見から－．耳鼻臨床 1994; 87: 583-594.

黒野祐一，重見英男，末永　智，平野　隆，茂木五郎：経口免疫によるインフルエンザ菌鼻咽腔定着の抑制．BACTERIAL ADHERENCE 研究会会誌 1995; 8: 125-128.

黒野祐一，重見英男，平野　隆，堀　文彦，茂木五郎：当科における原発不明頸部癌症例の検討．頭頸部腫瘍 1995; 21: 120-124.

重見英男，黒野祐一，茂木五郎，江頭　亨：中耳貯留液中 SOD 活性の測定．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1995; 13: 91-95.

鈴木正志，黒野祐一，茂木五郎：当科における口腔領域良性腫瘍症例の検討．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 1995; 67: 290-291.

松下　太，分藤準一，黒野祐一，渡辺徳武，茂木五郎：外耳道正常な耳小骨奇形症例の検討．Otology Japan 1995; 5: 205-208.

Tanaka T, Kurono Y, Kawauchi H, Mogi G: Effect of oxatomide on otitis media with effusion--an experimental study. Acta Otolaryngol 1995; 115: 532-538.

Ichimiya I, Kurono Y, Mogi G: Immunology of the tympanic membrane. Acta Otorhinolaryngol

Belg 1995; 49: 121-125.

Ueyama T, Kurono Y, Shirabe K, Takeshita M, Mogi G: High incidence of *Haemophilus influenzae* in nasopharyngeal secretions and middle ear effusions as detected by PCR. J Clin Microbiol 1995; 33: 1835-1838.

黒野祐一，松下　太，茂木五郎：深葉型耳下腺多形腺腫の切除手術．口腔・咽頭科 1996; 8: 187-191.

黒野祐一，分藤準一，平野　隆，螻川内英臣，須小　毅，茂木五郎：小児副鼻腔炎の変遷と最近の治療の現況－鼻アレルギーとの関連性から－．小児耳鼻咽喉科 1996; 17: 29-31.

分藤準一，黒野祐一，茂木五郎：当科におけるアレルギー性副鼻腔炎症例について．耳展 1996; 39: 61-64.

分藤準一，黒野祐一，末永　智，茂木五郎：当科における喉頭癌症例の検討．喉頭 1996; 8: 44-47.

Kurono Y, Shigemi H, Kodama S, Mogi G: Effects of oral and systemic immunization on nasopharyngeal clearance of nontypeable *Haemophilus influenzae* in BALB/c mice. Laryngoscope. 1996; 106: 614-618.

Kurono Y, Shigemi H, Kodama S, Mogi G. The role of adenoids in nasopharyngeal colonization with nontypeable *Haemophilus influenzae*. Acta Otolaryngol 1996; 523 (Suppl): 147–149.

Sakamoto N, Kurono Y, Ueyama T, Mogi G: Detection of Haemophilus influenzae in adenoids and nasopharyngeal secretions by polymerase chain reaction. Acta Otolaryngol 1996; 523 (Suppl): 145-146.

黒野祐一，坂本菜穂子，螻川内英臣，茂木五郎：咽頭・扁桃の感染に対する粘膜免疫応答．日本気管食道科学会会報 1997; 48: 76-80.

黒野祐一，肖　艶霊，児玉　悟，茂木五郎，山本正文，清野　宏：マウス経鼻免疫によ

る鼻腔 IgA 応答の誘導．日本鼻科学会会誌 1997; 36: 117-121.

黒野祐一，児玉　悟，茂木五郎，山本正文，清野　宏：インフルエンザ菌外膜蛋白の経鼻免疫による粘膜免疫応答の誘導．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 1997; 15: 10-13.

黒野祐一，螻川内英臣，坂本菜穂子，茂木五郎：滲出性中耳炎とサイトカイン．Otology Japan 1997; 7: 139-143.

平野　隆，黒野祐一, 一宮一成，茂木五郎：インフルエンザウイルスによるマウス鼻咽腔糖鎖構造の変化．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1997; 15: 44-47.

坂本菜穂子，黒野祐一，螻川内英臣，茂木五郎：滲出性中耳炎患者の鼻咽腔インフルエンザ菌に対するアデノイドの免疫応答．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1997; 15: 48-51.

平野　隆，黒野祐一, 一宮一成，茂木五郎：インフルエンザウイルス感染による鼻咽腔糖鎖構造の変化．BACTERIAL ADHERENCE 研究会会誌 1997; 10: 82-83.

Ichimiya I, Kurono Y, Mogi G: Immunological potential of the tympanic membrane. Observation under normal and inflammatory conditions. Am J Otolaryngol 1997; 18: 165-172.

Ueyama S, Kurono Y, Sato H, Suzuki M, Mogi G: The role of immune complex in otitis media with effusion. Auris Nasus Larynx. 1997; 24: 247-254.

Kerakawauchi H, Kurono Y, Mogi G: Immune responses against Streptococcus pyogenes in human palatine tonsils. Laryngoscope 1997; 107: 634-639.

黒野祐一，鈴木正志，坂本菜穂子，児玉　悟，茂木五郎：ヒト扁桃の細菌抗原に対する免疫応答．口腔・咽頭科 1998; 10: 161-167.

黒野祐一，児玉　悟，鈴木正志，茂木五郎：経鼻免疫による鼻腔 IgA 応答の誘導と鼻腔細菌クリアランス．BACTERIAL ADHERENCE 研究会会誌 1998; 11: 21-24.

黒野祐一，藤橋浩太郎，鈴木正志，茂木五郎，清野　宏：インフルエンザ菌外膜蛋白 P6 に対する鼻粘膜 IgA 応答における IFN-γ の役割．日本鼻科学会会誌 1998; 37: 98-102.

黒野祐一，平野　隆，渡辺哲生，鈴木正志，茂木五郎：マウス実験的滲出性中耳炎モデルにおける IL-1β の役割．日耳鼻 1998; 101: 1093-1098.

児玉　悟，廣井隆親，黒野祐一，茂木五郎：鼻咽腔における誘導組織と実効組織の免疫応答．口腔・咽頭科 1998; 10: 169-174.

Suzuki M, Kurono Y, Kodama S, Shigemi H, Mogi G: Enhancement of nasal clearance of nontypeable Haemophilus influenzae by oral immunization with outer membrane proteins. Acta Otolaryngol 1998;118: 864-869.

Ichimiya I, Kurono Y, Hirano T, Mogi G: Changes in immunostaining of inner ears after antigen challenge into the scala tympani. Laryngoscope 1998; 108: 585-591.

Xiao YL, Kurono Y, Ichimiya I, Mogi G: Induction of antigen-specific antibody-secreting cells in the nasal mucosa by intranasal immunization of BALB/c mice. Acta Otolaryngol 1998; 118: 124-130.

Shigemi H, Egashira T, Kurono Y, Mogi G: Role of superoxide dismutase in otitis media with effusion. Ann Otol Rhinol Laryngol 1998; 107: 327-331.

Sakamoto N, Kurono Y, Suzuki M, Kerakawauchi H, Mogi G: Immune responses of adenoidal lymphocytes specific to Haemophilus influenzae in the nasopharynx. Laryngoscope 1998; 108: 1036-1041.

松根彰志，井手章子，松尾克彦，丸山征郎，黒野祐一：鼻副鼻腔炎症性疾患における血管内皮細胞増殖因子に関する予備的研究．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 1999; 17: 12-16.

西園浩文，松根彰志，平瀬博之，松崎　勉，黒野祐一：当科入院患者における MRSA 発生状況．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1999; 17: 44-47.

林　多聞，松根彰志，黒野祐一：術後性上顎嚢胞に対する内視鏡下鼻内手術．耳鼻と臨床 1999; 45:369-374

西元謙吾，松崎　勉，西園浩文，吉福孝介，福山　聡，黒野祐一：頭頸部悪性腫瘍治療後の味覚機能の検討．耳鼻と臨床 1999; 45: 348-353.

Kurono Y, Yamamoto M, Fujihashi K, Kodama S, Suzuki M, Mogi G, McGhee JR, Kiyono H: Nasal immunization induces *Haemophilus influenzae*-specific Th1 and Th2 responses with mucosal IgA and systemic IgG antibodies for protective immunity. J Infect Dis 1999; 180: 122-132.

Kurono Y, Suzuki M, Mogi G, Yamamoto M, Fujihashi K, McGhee JR, Kiyono H: Effects of intranasal immunization on protective immunity against otitis media. Int J Pediatr Otorhinolaryngol 1999; 49 (Suppl): 227-229.

Kurono Y, Fujihashi K, Mog Gi, Kiyono H: The role of interferon (IFN)-γ in inducing IgA responses in nasal mucosa against outer membrane protein P6 of nontypeable *Haemophilus influemzae*. Proceedings of The Third Asian Research Symposium in Rhinology. Rhinology 1999; 15 (Suppl): 53-55.

Watanabe N, Yoshida K, Shigemi H, Kurono Y, Mogi G: Temporal bone chondroblastoma. Otolaryngol Head Neck Surg 1999; 121: 327-330.

Hirano T, Kurono Y, Ichimiya I, Suzuki M, Mogi G: Effects of influenza A virus on lectin-binding patterns in murine nasopharyngeal mucosa and on bacterial colonization. Otolaryngol Head Neck Surg 1999; 121: 616-621.

Hatano Y, Terashi H, Kurata S, Asada Y, Shibuya H, Tanaka A, Tada H, Fujiwara S, Watanabe T, Suzuki M, Kurono Y, Takayasu S: Invasion of lacrimal system by basal cell carcinoma, Dermatol Surg 1999; 25 (10): 823-826.

黒野祐一，岩坪哲治，林　多聞，出口浩二，松根彰志：口蓋扁桃のケラチンに対する免疫応答．口腔・咽頭科 2000; 12: 199-204.

河野もと子，森園健介，福岩達哉，福山　聡，宮之原利男，西元謙吾，林　多聞，松根彰志，黒野祐一：眼症状を伴う副鼻腔炎症例の検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2000; 18: 64-69.

高木　実，牛飼雅人，西園浩文，松崎　勉，松根彰志，黒野祐一：頭頚部領域における結核症例の検討．日耳鼻感染症研究会会誌 2000; 18: 105-107.

出口浩二，花牟礼　豊，松根彰志，黒野祐一：呼吸上皮障害に伴う炎症の慢性化について．BACTERIAL ADHERENCE 研究会会誌 2000; 13: 56-60.

鮫島篤史，高木　実，牛飼雅人，宮之原利男，黒野祐一：鼻粘膜血管内皮細胞における NF-κB 活性及び VCAM-1 発現に対する Cetirizine の効果．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2000; 18: 112-113.

黒野祐一，岩坪哲治，林　多聞，出口浩二：扁桃におけるケラチン特異的抗体産生．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2000; 18: 126-127.

黒野祐一，松根彰志，牛飼雅人，川内秀之，片岡真吾，岩元純一，佐野啓介，小笠原圭子，石光亮太郎，茂木五郎，鈴木正志，植山茂宏，渡辺哲生，昇　卓夫，清田隆二，島　哲也，杉原純次，渡邉徳武，金田規嗣，堀　文彦，分藤準一，螻川内英臣：急性鼻炎，アレルギー性鼻炎，副鼻腔炎に対する AMQ-7 の臨床評価．アレルギーの臨床 2000; 20: 963-975.

河野もと子，黒野祐一：口蓋扁桃 CD14 陽性細胞のサイトカイン産生能－末梢血単球との比較－．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2000; 18: 128-129.

西元謙吾，松根彰志，河野もと子，黒野祐一：鼻アレルギー粘膜における Thymidine Phosphorylase の分布．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2000; 18: 202-203.

高木　実，松根彰志，宮之原郁代，牛飼雅人，松崎　勉，黒野祐一：当科における上顎洞真菌症症例の検討．日本鼻科学会会誌 2000; 39 (2): 127-130.

岩坪哲治，松根彰志，宮之原郁代，西園浩文，牛飼雅人，黒野祐一：Haller's cell と慢性副鼻腔炎．耳鼻臨床 2000; 93: 923-927.

Matsune S, Miyanohara I, Ohyama M, Kurono Y: Application of YAMIK sinus catheter for patients with paranasal sinusitis with and without nasal allergy. Auris Nasus Larynx 2000; 27: 342-347.

Matsune S, Egawa M, Ohyama M, Kurono Y: Uptake of BrdU in olfactory and respiratory epithelium of rabbits with experimental sinusitis. Acta Otolaryngol. 2000; 120: 535-539.

Miyanohara T, Ushikai M, Matsune S, Ueno K, Katahira S, Kurono Y: Effects of clarithromycin on cultured human nasal epithelial cells and fibroblasts. Laryngoscope 2000; 110:126-131.

Nishimoto K, Matsune S, Miyadera K, Takebayashi Y, Furukawa T, Sumizawa T, Akiyama SI, Kurono Y: The role of thymidine phosphorylase in the pathogenesis of allergic rhinitis. Acta Otolaryngol. 2000; 120: 644-648.

松根彰志，宮之原郁代，大城　浩，牛飼雅人，黒野祐一：低酸素下 LPS 刺激による鼻茸線維芽細胞の VEGF とケモカイン．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2001; 19: 105-108.

松根彰志，宮之原郁代，大城　浩，牛飼雅人，黒野祐一，松尾克彦：低酸素，リポ多糖刺激による鼻茸線維芽細胞からの血管内皮細胞増殖因子とケモカインの産生．日本鼻科学会会誌 2001; 40: 16-19.

松根彰志，宮之原郁代，松尾克彦，牛飼雅人，黒野祐一：低酸素下 LPS 刺激による VEGF とケモカイン．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2001; 19: 112-113.

福岩達哉，福山　聡，田中紀充，幸　義和，黒野祐一：組み換え抗原を用いたインフルエンザ菌に対する経鼻粘膜免疫応答．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2001; 19: 100-101.

高木　実，牛飼雅人，大堀純一郎，黒野祐一：アデノイド線維芽細胞における NF-κB の活性化と IL-8 発現．口腔・咽頭科 2001; 13: 215-220.

高木　実，牛飼雅人，大堀純一郎，宮之原利男，黒野祐一：ヒト鼻粘膜由来培養上皮及び線維芽細胞における NF-κB の活性化と炎症性サイトカインの発現．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2001; 19: 142-143.

福山　聡，廣井隆親，柳田　学，黒野祐一，清野　宏：NALT 形成における特異性．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2001; 19: 30-31.

大堀純一郎，高木　実，牛飼雅人，松根彰志，黒野祐一鼻粘膜血管内皮細胞における細胞接着分子発現．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2001; 19: 84-85.

Watanabe T, Hirano T, Suzuki M, Kurono Y, Mogi G: Role of interleukin-1b in a murine model of otitis media with effusion. Ann Otol Rhinol Laryngol. 2001; 110: 574-580.

Seki D, Ueno K, Kurono Y, Eizuru Y: Clinicopathological features of Epstein-Barr virus-associated nasal T/NK cell lymphomas in southern Japan. Auris Nasus Larynx. 2001; 28: 61-70

牛飼雅人，西元謙吾，出口浩二，福岩達哉，黒野祐一：上気道細菌感染症のガイドライン－小児急性中耳炎に対する初期治療の検討－．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌. 2002; 20: 132-135.

牛飼雅人，大堀純一郎，松根彰志，黒野祐一：鼻粘膜由来培養細胞における接着分子の発現とその制御．耳鼻咽喉科免疫アレルギー．2002; 20:12-13.

福山　聡，廣井隆親，識名　崇，黒野祐一，清野　宏：NALT の形成と機能における LT と NIK の役割．耳鼻咽喉科免疫アレルギー．2002; 20: 88-89.

吉福孝介，松根彰志，大堀純一郎，森園健介，黒野祐一：嗅覚障害に対する内視鏡下鼻内副鼻腔手術の治療成績．日本鼻科学会会誌 2002; 41: 156-161.

孫　東，松根彰志，大堀純一郎，牛飼雅人，黒野祐一：培養鼻茸線維芽細胞からの VEGF の産生と制御．耳鼻咽喉科免疫アレルギー．2002; 20: 102-103.

大堀純一郎，牛飼雅人，宮之原郁代，松根彰志，黒野祐一：当科における扁桃細菌叢の検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌．2002; 20: 59-62.

大堀純一郎，牛飼雅人，高木　実，黒野祐一：ヒト鼻茸線維芽細胞における細胞接着分子の発現．耳鼻咽喉科免疫アレルギー．2002; 20: 216-217.

奥田　稔，石川　哮，馬場廣太郎，洲崎春海，今野昭義，岡本美孝，間島雄一，荻野敏，川内秀之，黒野祐一，中島光好：ロラタジンの通年性アレルギー性鼻炎に対する臨床的検討－プラセボとケトチフェンを対照として－．耳鼻臨床 2002; 107（補冊）: 1-24.

大久保公裕，友永和宏，島　哲也，江川雅彦，松根彰志，水越文和，杉田邦洋，今中政支，馬場俊吉，黒崎貞行，滝沢竜太，島田　均，佐々木　邦，太田浩明，吉田博一，黒

野祐一，竹中　洋，馬場廣太郎，奥田 稔：プロピオン酸フルチカゾン小児用点鼻液（小児用フルナーゼ点鼻液 25）の第 III 相臨床試験．耳展 2002; 45: 503-516.

Mtsune S, Kono M, Ushikai M, Deguchi K, Kurono Y: Vascular endothelial growth factor (VEGF) and chemokines from fibroblast of human nasal polyp under hypoxic condition. Proceeding of Airway Secretion Research: 67, 2002.

Fukuyama S, Hiroi T, Yokota Y, Rennert PD, Yanagita M, Kinoshita N, Terawaki S, Shikina T, Yamamoto M, Kurono Y, Kiyono H: Initiation of NALT organogenesis is independent of the IL-7R, LTbetaR, and NIK signaling pathways but requires the Id2 gene and CD3(-)CD4(+)CD45(+) cells. Immunity 2002; 17: 31-40.

牛飼雅人，林　多聞，相良ゆかり，黒野祐一：滲出性中耳炎の発症機序とアデノイド切除の有用性．口腔・咽頭科 2003; 15: 285-290.

牛飼雅人，孫　東，大堀純一郎，松根彰志，黒野祐一：低酸素下培養鼻粘膜線維芽細胞からの VEGF 産生におけるマクロライドの影響．The Japanese Journal of Antibiotics 2003; 56 (Suppl): 89-90.

福山　聡，識名　崇，黒野祐一，清野　宏：NALT の形成と機能発現における LT と NIK の役割．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2003; 21: 15-18.

孫　東，松根彰志，大堀純一郎，牛飼雅人，黒野祐一：低酸素刺戟下における培養鼻茸線維芽細胞からの VEGF 産生と制御．耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2003; 21: 19-22.

田中紀充，福山　聡，牛飼雅人，黒野祐一：細菌抗原に対する口蓋扁桃の免疫応答．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2003; 21: 176-179.

品川長夫，夜陣紘治，鈴木賢二，黒野祐一，小田　恂，岩井重富，石塚洋一，山中　昇，横山　隆，川内秀之，竹山廣光：耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域における術後感染予防についてのアンケート報告．The Japanese Journal of Antibioticus. 2003; 56: 15-26.

Matsune S, Kono M, Sun D, Ushikai M, Kurono Y: Hypoxia in paranasal sinuses of patients with chronic sinusitis with or without the complication of nasal allergy. Acta Otolaryngol. 2003; 123:

519-23.

Takaki M, Ushikai M, Deguchi K, Nishimoto K, Matsune S, Kurono Y: The role of nuclear factor-kappa B in interleukin-8 expression by human adenoidal fibroblasts. Laryngoscope 2003; 113:1378-85.

Iwatubo T, Tanaka N, Hayashi T, Fukuyama S, Kurono Y: The role of palatine tonsil in the pathogenesis of pustulosis palmaris et plantaris. International Congress Series 1257: 167-170, 2003.

Tanaka N, Fukuyama S, Ushikai M, Miyashita K, Kurono Y: Immune responses of palatine tonsil against bacterial antigens. International Congress Series 1257: 141-144, 2003.

Hayamizu Y, Miyanohara I, Fukuyama S, Deguchi K, Kurono Y: Clinical aspects of inferior pole peritonsillar abscess. International Congress Series 1257: 127-130, 2003.

松根彰志，孫　東，牛飼雅人，黒野祐一：鼻アレルギーとサイトカイン－アレルギー性炎症と血管内皮細胞増殖因子（VEGF）－．日本鼻科学会会誌 2004; 43: 110-111.

松根彰志，孫　東，大堀純一郎，牛飼雅人，黒野祐一：低酸素と TNF-α の共刺激による血管内皮細胞増殖因子（VEGF）産生亢進に対するマクロライドの抑制効果に関する検討．The Japanese Journal of Antibiotics 2004; 57 (Suppl): 25-28.

出口浩二，下麦哲也，田中紀充，黒野祐一：当科における小児 OSAS 症例の検討．口腔・咽頭科 2004; 16: 357-363.

吉福孝介，出口浩二，林　多門，松根彰志，黒野祐一：小児正中頚嚢胞症例の検討．小児耳鼻咽喉科 2004; 25, 33-35.

宮下圭一，出口浩二，牛飼雅人，黒野祐一：急性喉頭蓋炎に対する外科的処置－ 32 症例の検討から－．喉頭 2004; 16: 13-16.

鈴木秀明，松谷幸子，川瀬哲明，飯野ゆき子，川内秀之，暁　清文，黒野祐一，新川 秀一，高橋　姿，福田　諭，森山　寛，山下敏夫，小林俊光：好酸球性中耳炎全国疫学調査．

Otology Japan 2004; 4: 112-117.

三輪高喜，古川　仞，松根彰志，黒野祐一，原田博文，加藤寿彦，徳丸久子，中島　格，小野信周，山下裕司，立川隆治，夜陣紘治，小川晃弘，西崎和則，深澤啓二郎，阪上雅史，松本考司，山根英雄，久保伸夫，山下敏夫，金田宏和，細井裕司，鈴木元彦，村上信五，鴻　信義，森山　寛，横森恵夏，洲崎春海，中村英生，高橋　姿，池田勝久，小林俊光：5 種の嗅素を用いた噴射式基準嗅力検査の臨床的有用性について－多施設による検討結果－．日本鼻科学会会誌 2004; 43: 182-187.

Kurono Y, Matsune S, Sun D, Suzuki M, Mogi G: The role of allergic rhinitis in upper respiratory tract inflammatory diseases. Clin Exp All Rev 2004; 4: 15-20.

Umehara F, Matsumuro K, Kurono Y, Arimura K, Osame M, Kanzaki T: Neurologic manifestations of Kanzaki disease. Neurology. 2004; 62:1604-1606.

Maeda K, Hirano T, Ichimiya I, Kurono Y, Suzuki M, Mogi G: Cytokine expression in experimental chronic otitis media with effusion in mice. Laryngoscope 2004; 114: 1967-1972.

牛飼雅人，相良ゆかり，福岩達哉，西　謙吾，松根彰志，黒野祐一：鼻茸線維芽細胞における IL-8 発現および NF-κB 活性化に対するテリスロマイシンの影響．The Japanese Journal of Antibiotics 2005; 58 (Suppl); 149-151.

西元謙吾，大堀純一郎，下麥哲也，黒野祐一：ソルセイブ検査における味覚閾値の再現性について－正常者での検討（第 1 報）－．口腔・咽頭科 2005; 17: 309-315.

西元謙吾，林　多聞，吉福孝介，福岩達哉，松根彰志，黒野祐一：頸部リンパ節転移症例における内頸静脈の処理・評価と術後成績．頭頸部癌 2005; 31: 565-569.

西元謙吾，大堀純一郎，早水佳子，松根彰志，黒野祐一：扁桃周囲膿瘍における嫌気性菌の検討．日本嫌気性菌感染症研究 2005; 35: 113-122.

吉福孝介，松根彰志，黒野祐一：好酸球性副鼻腔炎に対する経口ステロイド薬の有用性．耳鼻臨床 2005; 98: 865-871.

森園健介，西元謙吾，早水佳子，黒野祐一：扁桃周囲膿瘍重症例の検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2005; 23: 92-95.

Matsune S, Sun D, Ohori J, Nishimoto K, Fukuiwa T, Ushikai M, Kurono Y: Inhibition of vascular endothelial growth factor by macrolides in cultured fibroblasts from nasal polyps. Laryngoscope 2005; 115:1953-1956.

Sun D, Matsune S, Ohori J, Fukuiwa T, Ushikai M, Kurono Y: TNF-α and endotoxin increase hypoxia-induced VEGF production by cultured human nasal fibroblasts in synergistic fashion. Auris Nasus Larynx 2005; 32: 243-249.

Ikeda M, Aiba T, Ikui A, Inokuchi A, Kurono Y, Sakagami M, Takeda N, Tomita H: Taste disorders: a survey of the examination methods and treatments used in Japan. Acta-OtoLaryngologica. 2005; 125: 1203-1210.

西元謙吾，大堀純一郎，早水桂子，福岩達哉，相良ゆかり，黒野祐一：扁桃周囲膿瘍の膿瘍局在部位と臨床像．日耳鼻感染症研究会会誌 2006; 24: 105-108.

吉福孝介，松根彰志，黒野祐一：副鼻腔陰影を伴うアレルギー性鼻炎に対するマクロライドと抗アレルギー薬の併用療法．耳鼻臨床 2006; 99: 1023-1027.

川畠雅樹，西元謙吾，相良ゆかり，福岩達哉，黒野祐一：喉頭癌の治療前診断としてのPET の有用性についての検討．喉頭 2006; 18: 137-140.

Fukuyama S, Nagatake T, Kim DY, Takamura K, Park EJ, Kaisho T, Tanaka N, Kurono Y, Kiyono H. Uniqueness of lymphoid chemokine requirement for the initiation and maturation of nasopharynx-associated lymphoid tissue organogenesis. J Immunol 2006; 177: 4276-4280.

宮之原郁代，松根彰志，相良ゆかり，西元謙吾，黒野祐一：スギ花粉症に対する初期療法としての塩酸レボカバスチン点鼻薬の有用性．耳鼻と臨床 2007; 53: 34-39.

相良ゆかり，田中紀充，黒野祐一：掌蹠膿疱症におけるケラチン特異的抗体活性とその臨床的意義－治療効果予測の指標の確立を目指して．口腔・咽頭科 2007; 19: 341-346.

永野広海，吉福孝介，黒野祐一：慢性穿孔性中耳炎，慢性鼓膜炎，慢性外耳道炎に対するブロー液の有用性について．耳展 2007; 50: 306-312.

福岩達哉，西元謙吾，林　多聞，黒野祐一：頭頸部癌手術の周術期感染予防に関する検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2007; 25: 241-245.

藤枝重治，山田武千代，小島章弘，工藤睦男，洲崎春海，門倉義幸，三邉武幸，吉橋秀貴，牧山　清，大木幹文，大越俊夫，大久保公裕，八尾和雄，吉田高史，佃　守，大橋　卓，櫛田嘉代子，服部　綾，伊藤佳史，濱島有喜，大野伸晃，鈴木元彦，中村善久，田中美子，村上信五，浜　雄光，出島健司，久　育男，兵　佐和子，平川勝洋，夜陣紘治，岡野光博，西崎和則，片岡真吾，川内秀之，松浦宏司，東野哲也，宮之原郁代，黒野祐一，竹中　洋：スギ花粉症における第 2 世代抗ヒスタミン薬の臨床効果－多施設，3 ヵ年による初期治療と発症後治療の検討－．日本鼻科学会会誌 2007; 46: 18-28.

Matsune S, Ohori J, Yosifuku K, Kurono Y: Vascular endothelial cells and eosinophil infiltration in allergic rhinitis. Clinical and Experimental Allergy Reviews. 2007; 7: 5-10.

Kousuke Yoshifuku, Shoji Matsune, Junichiro Ohori, Yukari Sagara, Tatsuya Fukuiwa, Yuichi Kurono: L-4 and TNF-α increased the secretion of eotaxin from cultured fibroblasts of nasal polyps with eosinophil infiltration. Rhinology 2007; 45: 235-241.

Tanaka N, Fukuyama S, Fukuiwa T, Kawabata M, Sagara Y, Ito HO, Miwa Y, Nagatake T, Kiyono H, Kurono Y: Intranasal immunization with phosphorylcholine induces antigen specific mucosal and systemic immune responses in mice. Vaccine 2007; 25:2680-2687.

Ohori J, Ushikai M, Nishimoto K, Sagara Y, Fukuiwa T, Matsune S, Kurono Y: TNF-alpha upregulates VCAM-1 and NF-kappa B in fibroblasts from nasal polyps. Auris Nasus Larynx. 2007; 34: 177-183.

黒野祐一，早水佳子，田中紀充，大堀純一郎，林　多聞，川畠雅樹：扁桃周囲膿瘍におけるレボフロキサシンの組織移行性に関する検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2008; 26: 219-222.

松根彰志，大堀純一郎，吉福孝介，砂塚敏明，大村　智，黒野祐一：好酸球性副鼻腔炎

由来，培養線維芽細胞に対する EM900 の抗炎症効果．The Japanese Journal of Antibiotics 2008; 61 (Suppl): 59-63.

宮之原郁代，松根彰志，黒野祐一：使用実態調査からみた花粉症に対する第 2 世代抗ヒスタミン薬の選択基準．臨床免疫・アレルギー科 2008; 49: 420-425.

福岩達哉，黒野祐一：口蓋扁桃摘出術－ Cold instruments による術式－．頭頸部外科 2008; 18: 21-25.

福岩達哉，川畠雅樹，林　多聞，黒野祐一：喉頭肉芽腫の治療成績に関する検討 −Microdebrider による外科的治療の有効性－．喉頭 2008; 20: 13-19.

福岩達哉，川畠雅樹，黒野祐一：治療に難渋した喉頭乳頭腫症例－再発性気道乳頭腫に対するマイクロデブリッダーの使用経験－．JOHNS 2008; 24: 1083-1087.

吉福孝介，松根彰志，黒野祐一：プランルカストの鼻茸好酸球浸潤抑制効果に関する臨床的検討．耳鼻臨床 2008 ; 101: 715-720.

原田みずえ，松根彰志，大堀純一郎，砂　敏明，大村　智，黒野祐一：エリスロマイシン誘導体 EM900 の抗炎症作用に関する検討．The Japanese Journal of Antibiotics 2008; 61(Suppl): 56-58.

鈴木賢二，黒野祐一，小林俊光，西村忠郎，馬場駿吉，原渕保明，藤澤利行，山中昇，生方公子，小林寅喆：第 4 回耳鼻咽喉科領域感染症臨床分離菌全国サーベイランス結果報告．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2008; 26: 15-26.

馬場駿吉，鈴木賢二，山中　昇，山下裕司，黒野祐一，堀　誠：治耳鼻咽喉科感染症に対する sitafloxacin の有効性，安全性および組織移行性．日本化学療法学会雑誌 2008; 56 (Suppl. 1): 110-120.

Matsune S, Ohori J, Sun D, Yoshifuku K, Fukuiwa T, Kurono Y. Vascular endothelial growth factor produced in nasal glands of perennial allergic rhinitis. Am J Rhinol. 2008; 22: 365-370.

Fukuiwa T, Sekine S, Kobayashi R, Suzuki H, Kataoka K, Gilbert RS, Kurono Y, Boyaka PN,

Krieg AM, McGhee JR, Fujihashi K: A combination of Flt3 ligand cDNA and CpG ODN as nasal adjuvant elicits NALT dendritic cells for prolonged mucosal immunity. Vaccine. 2008; 26: 4849-4859.

Fukuiwa T, Nishimoto K, Hayashi T, Kurono Y: Venous thrombosis after microvascular free-tissue transfer in head and neck cancer reconstruction. Auris Nasus Larynx. 2008; 35: 390-6.

吉福孝介，馬越瑞夫，黒野祐一：耳介血腫に対する持続陰圧ドレナージ法の効果．耳鼻臨床 2009; 102; 197-200.

吉福孝介，宮下圭一，黒野祐一：急性喉頭蓋炎 84 症例の臨床的検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2009; 27: 165-169.

川畠雅樹，田中紀充，黒野祐一：肺炎球菌 / インフルエンザ菌の気道上皮接着における phosphorylcholine の役割．Bacterial Adherence & Biofilm 2009; 22: 71-74.

川畠雅樹，田中紀充，黒野祐一：気道上皮細菌付着における phosphorylcholin の役割．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2009; 27: 213-216.

西元謙吾，林　多門，早水佳子，黒野祐一：口蓋扁桃摘出術後の疼痛に対する含嗽療法の試み－アズレンスルホン酸ナトリウムトポピドンヨードとの比較－．耳鼻臨床 102: 945-949, 2009.

宮之原郁代，松根彰志，大堀純一郎，黒野祐一：スギ花粉症に対するプランルカスト初期療法の有用性．耳鼻と臨床 2009; 55: 31-38.

鈴木賢二，黒野祐一，小林俊光，西村忠郎，馬場駿吉，原渕保明，藤澤利行，山中　昇，生方公子，池田文昭：耳鼻咽喉科領域感染症起炎菌に対する garenoxacin の抗菌力．The Japanese Journal of Antibiotics 2009; 62: 71-78.

都築建三，深澤啓二郎，竹林宏記，岡　秀樹，三輪高喜，黒野祐一，丹生健一，松根彰志，内田　淳，小林正佳，太田　康，志賀英明，小早川　達，阪上雅史：簡易な嗅覚評価のための「日常のにおいアンケート」．日本鼻科学会会誌 2009; 48: 1-7.

中山敦詞，鈴木賢二，藤澤利行，黒野祐一，小林俊光，西村忠郎，馬場駿吉，原渕保明，山中　昇，生方公子，小林寅哲：第 4 回耳鼻咽喉科領域主要検出菌全国サーベランス－分離菌頻度を中心に－．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2009; 27: 57-61.

藤澤利行，鈴木賢二，黒野祐一，小林俊光，西村忠郎，馬場駿吉，原渕保明，山中　昇，生方公子，小林寅哲：第 4 回耳鼻咽喉科領域主要検出菌全国サーベランス－薬剤感受性を中心に－．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2009; 27: 63-68.

Sakagami M, Ikeda M, Tomita H, Ikui A, Aiba T, Takeda N, Inokuchi A, Kurono Y, Nakashima M, Shibasaki Y, Yotsuya O: A zinc-containing compound, Polaprezinc, is effective for patients with taste disorders: randomized, double-blind, placebo-controlled, multi-center study. Acta Otolaryngol. 2009; 129:1115-1120.

Sekigawa T, Tajima A, Hasegawa T, Hasegawa Y, Inoue H, Sano Y, Matsune S, Kurono Y, Inoue I: Gene-expression profiles in human nasal polyp tissues and identification of genetic susceptibility in aspirin-intolerant asthma. Clin Exp Allergy. 2009; 39: 972-981.

黒野祐一，大堀純一郎，松根彰志：上気道感染症に対するガレノキサシンの臨床効果．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2010; 28: 25-29.

黒野祐一：通年性アレルギー性鼻炎の鼻・眼症状に関するインターネット調査 2009 －医師および患者の両側面から－．アレルギー・免疫 2010; 17: 1548-1557.

松根彰志，吉福孝介，原田みずえ，大堀純一郎，砂塚敏明，大村　智，黒野祐一：好酸球性副鼻腔炎鼻茸由来の培養線維芽細胞を用いた EM900 の効果に関する検討．The Japanese Journal of Antibiotics 2010; 63 (Suppl): 62-64.

吉福孝介，宮下圭一，大堀純一郎，早水佳子，林　多聞，黒野祐一：急性喉頭蓋炎の診断・治療における問題点と対策－成人における問題点－．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2010; 28: 209-214.

鈴木賢二，黒野祐一，小林俊光，西村忠郎，馬場駿吉，原渕保明，藤澤利行，山中　昇，生方公子，池田文昭：耳鼻咽喉科領域感染症由来 Streptococcus pneumoniae に対する garenoxacin の mutant prevention concentration(MPC). The Japanese Journal of Antibiotics

2010; 63: 312-318.

Matsune S, Ohori J, Yoshifuku K, Kurono Y. Effect of vascular endothelial growth factor on nasal vascular permeability. Laryngoscope 2010;120: 844-848.

Nagano H, Yoshifuku K, Kurono Y. Association of a globus sensation with esophageal diseases. Auris Nasus Larynx. 2010; 37: 195-198.

Nagano H, Yoshifuku K, Kurono Y. A useful procedure for observing the cervical esophagus via the hypopharynx. Auris Nasus Larynx. 2010; 37: 713-719

Majima Y, Kurono Y, Hirakawa K, Suzaki H, Haruna S, Kawauchi H, Ichimura K, Moriyama H. Reliability and validity assessments of a Japanese version of QOL 20-Item Sino-Nasal Outcome Test for chronic rhinosinusitis. Auris Nasus Larynx. 2010; 37: 443-448.

黒野祐一，森山一郎，茶園篤男，友永和宏，大堀純一郎，松根彰志：上気道感染症に対するガレノキサシン（GRNX）投与後早期の治療効果に関する検討．耳展 2011; 54: 49-61.

西元謙吾，松崎　勉，早水佳子，大堀純一郎，牧瀬高穂，黒野祐一：蝶形骨洞内異所性下垂体腺腫の臨床的検討．耳鼻臨床 2011; 104: 559-563.

川畠雅樹，黒野祐一：肺炎球菌上皮接着における Poly (I:C) の関与．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2011; 29: 166-167.

馬越瑞夫，大堀純一郎，黒野祐一：扁桃周囲膿瘍の CT 画像とその臨床的特徴．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2011; 29: 164-165.

Kohsuke Sekiyama, Jun-ichiro Ohori, Shoji Matsune, and Yuichi Kurono: The role of vascular endothelial growth factor in pediatric otitis media with effusion. Auris Nasus Larynx. 2011；38: 319-324.

Kawabata M, Kurono Y: Polyinosine-polycytidylic acid enhances cellular adherence of Streptococcus pneumoniae. Laryngoscope 2011; 121: 2443-2448.

Tahara M, Minami H, Hasegawa Y, Tomita K, Watanabe A, Nibu K, Fujii M, Onozawa Y, Kurono Y, Sagae D, Seriu T, Tsukuda M: Weekly paclitaxel in patients with recurrent or metastatic head and neck cancer. Cancer Chemother pharmacol 2011; 68: 769-776.

Yonekura S, Okamoto Y, Yamasaki K, Horiguchi S, Hanazawa T, Matsune S, Kurono Y, Yamada T, Fujieda S, Okano M, Okubo K: A randomized, double-blind, placebo-controlled study of Ten-Cha (Rubus suavissimus) on house dust mite allergic rhinitis. Auris Nasus Larynx. 2011; 38: 600-607.

黒野祐一：スギ・ヒノキ花粉症患者の受診実態と治療満足度－患者アンケート調査から－．Prog. Med. 2012; 32: 2687-2693.

大堀純一郎，吉福孝介，早水佳子，黒野祐一：扁桃周囲膿瘍におけるレボフロキサシン500mg の扁桃組織移行の検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2012; 30: 47-50.

大堀純一郎，黒野祐一：好酸球性副鼻腔炎における VEGF の関与．日本鼻科学会会誌 2012; 51: 34-35.

永野広海，黒野祐一：生活習慣が味覚に与える潜在的な影響について－地域住民における潜在的味覚低下に関する調査－．耳鼻臨床 2012; 105 (1): 33-40.

永野広海，牧瀬高穂，馬越瑞夫，黒野祐一：コレラトキシン経皮免疫による粘膜免疫応答．口腔・咽頭科 2012; 25: 79-84.

川畠雅樹，黒野祐一：肺炎球菌の中耳粘膜上皮接着についての検討．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2012; 30: 168-169.

小林正佳，三輪高喜，黒野祐一，丹生健一，松根彰志，内田　淳，都築建三，近藤健二，志賀英明，藤尾久美，松脇由典，本間博友，中西清香，三村英也，小河孝夫，清水猛史，竹林宏記，愛場庸雅，將積日出夫：静脈性嗅覚検査・希釈法の有用性に関する検討．日本鼻科学会会誌 2012; 51: 445-449.

Kurono Y, Nagno H, Umakoshi M, Makise T: Diversity of mucosal immune responses in upper respiratory airways and the suitability of mucosal vaccines. Clinical & Experimental Allergy

Reviews 2012; 12: 1-6.

Majima Y, Kurono Y, Hirakawa K, Ichimura K, Haruna S, Suzaki H, Kawauchi H, Takeuchi K, Naito K, Kase Y, Harada T, Moriyama H. Efficacy of combined treatment with S-carboxymethylcysteine (carbocisteine) and clarithromycin in chronic rhinosinusitis patients without nasal polyp or with small nasal polyp. Auris Nasus Larynx 2012; 39: 38-47.

吉福孝介，大堀純一郎，宮下圭一，黒野祐一：成人急性喉頭蓋炎に対する気道確保の適応．耳鼻臨床 2013: 106: 149-153.

吉福孝介，黒野祐一，関山幸祐，茶園篤夫，首藤　純：アレルギー性副鼻腔炎患者に対する抗ヒスタミン薬とマクロライドの併用療法の有効性－コンピューター断層撮影（CT）による評価－．耳鼻と臨床 2013; 59: 55-63.

吉福孝介，大堀純一郎，宮下圭一，黒野祐一：成人急性喉頭蓋炎に対する喉頭蓋乱切術の有用性について．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2013; 31: 125-128.

吉福孝介，西元謙吾，川俣洋生，金澤絵莉，高濱哲也，松崎　勉：出血を繰り返す中咽頭癌後発リンパ節転移症例に対する Mohs 軟膏の有用性．耳鼻と臨床 2014; 60: 67-71.

大堀純一郎，馬越瑞夫，宮下圭一，早水佳子，原田みずえ，黒野祐一：扁桃周囲膿瘍の CT 所見とその臨床的特徴．日耳鼻 2013; 116: 947-952.

永野広海，大堀純一郎，黒野祐一：2 コースの導入化学療法（TPF 療法）における急性有害事象の比較検討．耳鼻臨床 2013; 106: 951-957.

川畠雅樹，井内寛之，大堀純一郎，黒野祐一：扁桃周囲膿瘍重症例に対する即時膿瘍扁桃摘出術の有用性．口腔・咽頭科 2014; 27: 73-79.

池田　稔，黒野祐一，井之口　昭，武田憲昭，愛場庸雅，野村泰之，阪上雅史：プラセボ対照無作為化試験による亜鉛欠乏性またな特発性味覚障害 219 例に対するポラプレジンク投与の臨床検討．日耳鼻 2013; 116: 17-26.

阪上雅史，黒野祐一，井之口　昭，武田憲昭，愛場庸雅，任　智美，池田　稔：味覚障

害患者に対する 24 週間の亜鉛内服治療における味覚機能検査と自覚症状の経時的推移および効果予測因子．日耳鼻 2014; 117: 1093-1101.

Tanimoto Y, Fukuyama S, Tanaka N, Ohori J, Tanimoto Y, Kurono Y: Presence of keratin-specific antibody-forming cells in palatine tonsils of patients with pustulosis palmaris et plantaris (PPP) and its correlation with prognosis after tonsillectomy. Acta Otolaryngol. 2014; 134: 79-87.

Shiragami M, Mizukami A, Leeuwenkamp O, Mrkvan T, Delgleize E, Kurono Y, Iwata S: Cost-Effectiveness Evaluation of the 10-Valent Pneumococcal Non-typeable *Haemophilus influenzae* Protein D Conjugate Vaccine and 13-Valent Pneumococcal Vaccine in Japanese Children. Infect Dis Ther. 2014; 4: 93-112

黒野祐一，大久保公裕，奥泉　薫，ほか：アレルギー性鼻炎患者を対象としたディレグラ® 配合錠の使用実態下での安全性および有効性の検討－使用成績調査（DEPARTURE 試験）の結果－．アレルギー・免疫 2015; 22:1619-1638.

宮之原郁代，宮下圭一，原田みずえ，間世田桂子，井内寛之，馬越瑞夫，川畠雅樹，黒野祐一：新たに開発したオンラインシステムを用いたスギ花粉症患者 QOL 調査の試み－症例登録の工夫と今後の展望－　耳鼻と臨床 2015; 61: 41-48.

吉福孝介，西元謙吾，松崎　勉，川俣洋生，大園ゆかり，内宮礼嗣：当科で経験したセツキシマブ投与症例の重篤な副作用と Infusion Reaction 発現時の対応．耳鼻と臨床 2015; 61: 1-8.

永野広海，地村友宏，宮本佑美，井内寛之，馬越瑞夫，牧瀬高穂，川畠雅樹，黒野祐一：セツキシマブ治療におけるインフュージョン・リアクション軽減の試み．口腔・咽頭科 2015; 28: 183-186.

永野広海，宮本佑美，地村友宏，井内寛之，地村友宏，馬越瑞夫，牧瀬高穂，川畠雅樹，宮下圭一，原田みずえ，宮之原郁代，黒野祐一：頭頸部癌に対するセツキシマブ併用放射線療法における急性有害事象－放射線単独および他の化学放射線療法との比較検討－．耳鼻臨床 2015; 108: 945-950.

牧瀬高穂，大堀純一郎，宮下圭一，井内寛之，黒野祐一：高齢者の舌部分切除術におけ

る PGA シートの有用性．耳鼻臨床 2015; 108: 709-712.

鈴木賢二，黒野祐一，池田勝久，渡辺　彰，花木秀明：第 5 回耳鼻咽喉科領域感染症臨床分離菌全国サーベイランス結果報告．日耳鼻感染症エアロゾル会誌 2015; 3: 5-19.

Nagano H, Kurono Y: Transcutaneous immunization with phosphorylcholine induces antigen-specific mucosal and systemic immune responses in BALB/c mice. Auris Nasus Larynx. 2015; 42: 478-482.

Kenji Suzuki, Yuichi Kurono, Katsuhisa Ikeda, Akira Watanabe, Aikichi Iwamoto, Kyoichi Totsuka, Mitsuo Kaku, Satoshi Iwata, Jun-ichi Kadota, Hideaki Hanaki: Nationwide surveillance of 6 otorhinolaryngological infectious diseases and antimicrobial susceptibility pattern in the isolated pathogens in Japan. J Infect Chemother 2015; 21: 483-491.

Shiragami M, Mizukami A, Leeuwenkamp O, Mrkvan T, Delgleize E, Kurono Y, Iwata S: Reply to Farkouh RA et al. Comment on "Cost-Effectiveness Evaluation of the 10-Valent Pneumococcal Non-Typeable *Haemophilus Influenzae* Protein D Conjugate Vaccine and 13-Valent Pneumococcal Vaccine in Japanese Children". Infect Dis Ther. 2015; 4: 235-244.

Hassani S, Castillo A, Ohori J, Higashi M, Kurono Y, Akiba S, Koriyama C: Molecular Pathogenesis of Human Papillomavirus Type 16 in Tonsillar Squamous Cell Carcinoma. Anticancer Res. 2015; 35: 6633-6638.

Mori K, Miyanohara I, Moteki H, Nishio SY, Kurono Y, Usami S: Novel mutation in GRXCR1 at DFNB25 lead to progressive hearing loss and dizziness. Ann Otol Rhinol Laryngol. 2015; 124 (Suppl 1): 129-34.

黒野祐一，宮下圭一，馬越瑞夫，川畠雅樹，永野広海，原田みずえ，大堀純一郎：桃周囲膿瘍におけるガレノキサシンの組織移行性に関する検討．日耳鼻感染症エアロゾル会誌 2016: 4: 102-106.

川内秀之，大久保公裕，奥泉　薫，亀田博之，黒野祐一：ディレグラ® 配合錠の Patient-Reported Outcomes および QOL の改善効果－日本人通年性および季節性アレルギー性鼻炎患者における実臨床下での検討－．アレルギー・免疫 2016; 23: 1709-1728.

白神　誠，Holl Katsiaryna, Mrkvan Tomas，箱田始美，黒野祐一，岩田　敏：日本における小児用 13 価肺炎球菌結合型ワクチンと 10 価肺炎球菌結合型ワクチンの費用対効果分析－異なる分析結果となった要因としての費用対効果分析モデルの違いに関する検討－．小児科臨床 2016; 69: 387-398.

Kawabata M, Umakoshi M, Makise T, Miyashita K, Harada M, Nagano H, Ohori J, Kurono Y: Clinical classification of peritonsillar abscess based on CT and indications for immediate abscess tonsillectomy. Auris Nasus Larynx 2016; 43:182-186.

Kawabata M, Ohori J, Kurono Y: Effects of benzalkonium chloride on histamine H1 receptor mRNA expression in nasal epithelial cells. Auris Nasus Larynx. 2016; 43: 685-688.

大堀純一郎，宮下圭一，黒野祐一：頭部・顔面非メラノーマ皮膚悪性腫瘍における耳下腺リンパ節郭清の検討．耳鼻臨床 2017; 110: 31-34.

井内寛之，永野広海，地村友宏，馬越瑞夫，牧瀬高穂，川畠雅樹，宮下圭一，原田みずえ，大堀純一郎，黒野祐一：下咽頭癌の病期と患者の居住地域および受診背景に関する検討．口腔・咽頭科 2017; 30: 85-90.

Nagano H, Jimura T, Nagano M, Makise T, Miyashita K, Kurono Y: Transcutaneous immunization in auricle skin induces antigen-specific mucosal and systemic immune responses in BALB/c mice. Auris Nasus Larynx. 2017; 44: 411-416.

Nagano H, Kurono Y, Matushita K: Adult T-cell leukemia/lymphoma in patients with head and neck cancer after S-1 chemotherapy. Auris Nasus Larynx. 2017; 44: 195-198.

Tsuruhara A, Aso K, Tokuhara D, Ohori J, Kawabata M, Kurono Y, McGhee JR, Fujihashi K: Rejuvenation of mucosal immunosenescence by adipose tissue-derived mesenchymal stem cells. Int Immunol. 2017; 29: 5-10.

Yonekura S, Okamoto Y, Sakurai D, Sakurai T, Iinuma T, Yamamoto H, Hanazawa T, Horiguchi S, Kurono Y, Honda K, Majima Y, Masuyama K, Takeda N, Fujieda S, Okano M, Ogino S, Okubo K: Complementary and alternative medicine for allergic rhinitis in Japan. Allergol Int. 2017; 66: 425-431

大堀純一郎，宮下圭一，牧瀬高穂，永野広海，川畠雅樹，原田みずえ，馬越瑞夫，黒野祐一：扁桃周囲膿瘍の臨床所見とガレノキサシンの組織移行性の比較．日耳鼻感染症エアロゾル会誌 2018: 6: 15-19.

原田みずえ，地村友宏，川畠雅樹，黒野祐一：Poly(I:C) 刺激による IL-8 の産生および PAF 受容体の発現とマクロライドの効果．The Japanese Journal of Antibiotics 2018: 71 (Suppl.): 17-20.

川畠雅樹，馬越瑞夫，松元隼人，永野広海，大堀純一郎，黒野祐一：下極型扁桃周囲膿瘍の臨床的特徴．口腔・咽頭科 2018; 31: 187-192.

井内寛之，伊東小都子，松元隼人，花牟禮　豊，松崎　勉，黒野祐一：3-Weekly 高用量シスプラチン併用放射線化学療法の臨床的検討－ 2 回目のシスプラチン投与に注目して－．頭頸部癌 2018; 44: 305-309.

Ohori J, Jimura T, Kurono Y: The role of phosphorylcholine-specific immune responses in the tonsils and peripheral blood on IgA nephropathy. Acta Otolaryngol. 2018; 138: 1099-1104.

Maseda Y, Ohori J, Tanaka N, Nagano H, Miyashita K, Kurono Y: Mucosal and systemic immune response to sublingual or intranasal immunization with phosphorylcholine. Auris Nasus Larynx. 2018; 45: 273-280.

Nagano H, Kawabata M, Sugita G, Tsuruhara A, Ohori J, Jimura T, Miyashita K, Kurono Y, Tomonaga K, Briles DE, Fujihashi K: Transcutaneous immunization with pneumococcal surface protein A in mice. Laryngoscope. 2018; 128: E91-E96.

Miyashita K, Ohori J, Nagano H, Fukuyama, S, Kurono Y: Intranasal immunization with phosphorylcholine suppresses allergic rhinitis in mice. Laryngoscope 2018; 128: E234-E240.

永野広海，宮本佑美，地村友宏，井内寛之，馬越瑞夫，牧瀬高穂，川畠雅樹，宮下圭一，大堀純一郎，宮之原郁代，黒野祐一：再発性多発軟骨炎 9 症例の臨床検討．日耳鼻 2019; 122: 1322-1328.

Ohori J, Jimura T, Kurono Y: Role of Phosphorylcholine-Specific Immunoglobulin M in Acute

Upper Respiratory Tract Infections. Ann Otol Rhinol Laryngol 2019; 128 (suppl), 111-116.

Ohori J, Iuchi H, Nagano H, Umakoshi M, Matsuzaki H, Kurono Y: The usefulness of abscess tonsillectomy followed by intraoral drainage for parapharyngeal abscess concomitant with peritonsillar abscess in the elderly. Auris Nasus Larynx 2019; PMID: 31239095 DOI: 10.1016/j.anl.2019.06.00

Ohori J, Iuchi H, Maseda Y, Kurono Y: Phosphorylcholine intranasal immunization with a 13-valent pneumococcal conjugate vaccine can boost immune response against *Streptococcus pneumoniae*. Vaccine. 2020; 38:699-704.

Iuchi H, Ohori J, Kyutoku T, Ito K, Kurono Y: Role of phosphorylcholine in *Streptococcus pneumoniae* and nontypeable *Haemophilus influenzae* adherence to epithelial cells.　Auris Nasus Larynx　2019；46: 513-519.

【症例報告，その他】

黒野祐一，前田昇一，茂木五郎：特発性外リンパ瘻の 1 症例．耳鼻臨床 1984; 77: 1899-1905.

黒野祐一，藤吉達也，梅原豊治，前田昇一，茂木五郎：両側性耳下腺腫瘍－多発性基底細胞腫の 1 例．耳鼻臨床 1984; 77: 423-428.

藤吉達也，黒野祐一，川内秀之，吉村弘之，佐藤春生，茂木五郎：膿瘍扁摘と両側扁桃周囲膿瘍の 1 例：日本扁桃研究会会誌 1985; 24: 82-88.

吉村弘之，前田昇一，藤吉達也，黒野祐一，川内秀之，茂木五郎：真珠腫性中耳炎と内耳瘻孔－特に 2 カ所に瘻孔のあつた症例－．耳鼻と臨床 1985; 31:917-920.

吉村弘之，藤吉達也，黒野祐一，川内秀之，茂木五郎：上咽頭嚢胞の 2 症例．耳鼻臨床 1986; 79:1815-1821.

植山茂宏，黒野祐一，茂木五郎：嫌気性菌による副咽頭間隙膿瘍の 1 例．日本耳鼻咽喉

科感染症研究会会誌 1986; 4: 158-162.

島村康一郎，黒野祐一，渡辺徳武，茂木五郎：耳下腺結核の 2 症例．耳鼻臨床 1988; 81: 719-724.

Ichimiya I, Fujiyoshi T, Kurono Y, Mogi G：Multiple foreign bodies (fish bones) in the esophagus and rectum.　Auris Nasus Larynx. 1988; 15: 51-5

吉田和秀，重見英男，黒野祐一，茂木五郎：舌下神経に発生した顎下部神経鞘腫例．耳鼻臨床 1994; 87: 391-395.

島崎敏樹，川内秀之，黒野祐一，渡辺徳武，茂木五郎：唾液腺の鰓原性嚢胞 3 症例．耳鼻臨床 1994; 87: 1677-1681.

村上信一，内田雄三，松元克彦，葉玉哲生，茂木五郎，黒野祐一：A3 食道癌に対して 2 期的に大動脈切除を施行した 2 症例．手術 1994; 48: 1397-1401.

螻川内英臣，黒野祐一，堀　文彦，渡辺徳武，茂木五郎：ヘッドホンステレオ装着時落雷による両側性聴器障害を来した 1 症例．Otology Japan 1995; 5: 159-164.

末永　智，黒野祐一，堀　文彦，茂木五郎：口腔咽頭悪性黒色腫の 4 症例．口腔・咽頭科 1955; 7: 307-312.

重見英男，平野　隆，黒野祐一，茂木五郎：他偏側性に発生した口腔底類皮嚢胞．口腔・咽頭科 1996; 8: 435-438.

渡辺哲生，太神尚士，黒野祐一，茂木五郎：下咽頭鰓原性嚢胞の 1 例．日本気管食道科学会会報 1997; 48: 351-354.

平野　隆，黒野祐一, 一宮一成，茂木五郎：Castleman 病例．耳鼻臨床 1997; 90: 463-467.

上村尚樹，末永　智，黒野祐一，茂木五郎：成人呼吸促迫症候群（ARDS）と播種性血管内凝固症候群（DIC）を合併した副咽頭間隙膿瘍の 1 症例．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 1997; 69: 565-569.

平瀬博之，松崎　勉，上野員義，黒野祐一：嚥下困難で判明した重症筋無力症例．耳鼻臨床 1999; 92: 95-99.

福山　聡，牛飼雅人，黒野祐一：下極型扁桃周囲膿瘍の１例．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 1999; 17: 73-76

吉福孝介，西園浩文，松崎　勉，松根彰志，西元謙吾，黒野祐一：中鼻道に発生した有茎性鼻咽腔血管線維腫．耳鼻臨床 ; 1999: 1205-1209.

Watanabe N, Yoshida K, Shigemi H, Kurono Y, Mogi G: Temporal bone chondroblastoma. Otolaryngol Head Neck Surg 1999; 121: 327-330.

黒野祐一：オスラー病に対するレーザー治療．耳鼻臨床 2000; 93: 1004-1005.

森園健介，西元謙吾，牛飼雅人，宮之原郁代，松崎　勉，松根彰志，黒野祐一：頤下部と顎下部に同時に発生した皮様嚢胞例．耳鼻臨床 2000; 93: 1061-1065.

松下能文，宮之原郁代，黒野祐一：鼓室内腫瘍の 1 例．病院病理 2000; 17: 4.

宮之原郁代，牛飼雅人，福岩達哉，出口浩二，黒野祐一：両側扁桃周囲膿瘍の一例．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2001; 19: 1-3.

福岩達哉，牛飼雅人，宮之原郁代，松根彰志，黒野祐一：原発性免疫不全症を合併したペニシリン耐性肺炎球菌による小児反復性急性乳様突起炎の１例．J Otolaryngol Jpn 2001; 104: 1089-1092.

出口浩二，西元謙吾，宮之原郁代，松根彰志，黒野祐一：原発性小児副鼻腔嚢胞例．耳鼻臨床 2002; 95: 165-170.

出口浩二，西元謙吾，松根彰志，黒野祐一：頭蓋内へ進展した巨大な多発性前頭洞嚢胞の一例．日本鼻科学会会誌 2002; 41: 137-142.

西元謙吾，岩元光明，唐木敦子，黒野祐一，西　恭宏，森田康彦：硬口蓋全欠損をきたした硬口蓋悪性腫瘍症例に対するプロテーゼ使用経験．日耳鼻 2002; 105: 1093-1096.

田中紀充，福岩達哉，宮之原郁代，黒野祐一：顔面神経麻痺を伴う乳幼児急性中耳炎 3 症例．Otol Jpn 2002; 12: 166-170.

下麦哲也，西元謙吾，出口浩二，松根彰志，井畔能文，坂田隆造，黒野祐一：長期気管カニューレ留置により気管腕頭動脈瘻を生じた 1 症例．日本気管食道科学会会報 2002; 53: 484-488.

Deguchi K, Fukuiwa T, Saito K, Kurono Y. Application of cyberknife for the treatment of juvenile nasopharyngeal angiofibroma: a case report. Auris Nasus Larynx. 2002; 29: 395-400.

積山幸祐，松根彰志，黒野祐一：好酸球性副鼻腔炎と好酸球性中耳炎を合併した 1 例．アレルギーの臨床 23: 1060-1063, 2003.

田中紀充，出口浩二，黒野祐一：脳出血をきたした睡眠時無呼吸症候群の 1 例．口腔・咽頭科 2003; 15: 179-184.

早水佳子，相良ゆかり，宮之原郁代，牛飼雅人，黒野祐一：巨大喉頭蓋嚢胞の 2 症例－治療法の検討－．喉頭 2003; 5: 118-122.

積山幸祐，出口浩二，黒野祐一：小児上顎洞血瘤腫．耳鼻臨床 2004; 97: 319-323.

吉福孝介，福岩達哉，西元謙吾，松根彰志，黒野祐一：肺結核を伴った喉頭結核疑い例．耳鼻臨床 2004; 97; 1101-1106.

田中紀充，福岩達哉，西園浩文，黒野祐一：意識障害をきたした巨大真珠腫例．耳鼻臨床 2004; 97: 789-795.

田中紀充，福岩達哉，大堀純一郎，黒野祐一：咽後膿瘍を併発した扁桃周囲膿瘍症例．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2004; 22: 135-138.

永野広海，出口浩二，福岩達哉，牛飼雅人，黒野祐一：診断に苦慮したツツガムシ病の 1 例．耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2004; 76: 6-7.

Nishimoto K, Takaki M, Hirase H, Matsune S, Kurono Y: Extravascular papillary endothelial

hyperplasia arising from parapharyngeal space. Auris Nasus Larynx 2004; 31: 305-308.

川畠雅樹，牛飼雅人，福岩達哉，西元謙吾，松根彰志，黒野祐一：自然治癒した挿管後披裂軟骨脱臼の 2 例．耳鼻臨床 2005; 98: 651-654.

西元謙吾，下麥哲也，出口浩二，黒野祐一：鼻粘膜病変による鼻閉を初発症状としたサルコイドーシス症例．アレルギーの臨床 2006; 26: 794-797.

永野広海：診断に苦慮したツツガムシ病による急性喉頭蓋炎例．耳鼻臨床 2006; 99: 955-959.

Koriyama N, Nishimoto K, Kodama T, Nakazaki M, Kurono Y, Yoshida H, Tei C: Oncogenic osteomalacia in a case with a maxillary sinus mesenchymal tumor. Am J Med Sci. 2006; 332: 142-147.

吉福孝介，永野広海，黒野祐一：眼窩骨膜下膿瘍の 1 症例．耳展 2007; 50: 236-243.

永野広海，吉福孝介，出口浩二，黒野祐一：結核性頸部リンパ節炎の 1 症例．地域医学 2007; 21: 450-455.

永野広海，吉福孝介，黒野祐一：結核性頸部リンパ節炎の 3 症例．耳展 2007; 50: 222-229.

永野広海，吉福孝介，出口浩二，黒野祐一：軟口蓋に生じた横紋筋肉腫例．耳鼻臨床 2007; 100: 731-736.

永野広海，吉福孝介，黒野祐一：頬骨弓骨折における超音波断層検査の使用経験．耳鼻咽喉科臨床 2007; 100: 823-827.

永野広海，吉福孝介，黒野祐一：再発性多発性軟骨炎による耳介軟骨膜炎例．耳鼻臨床 2007; 100: 893-897.

川畠雅樹，松根彰志，黒野祐一：鼻副鼻腔に発生した孤立性線維性腫瘍例．耳鼻臨床 2007; 100: 669-674.

福岩達哉，西元謙吾，田中紀充，大堀純一郎，林　多聞，野崎　剛，黒野祐一：抜歯後感染に続発した難治性顎下部膿瘍の一例．日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 2008; 26: 237-240.

吉福孝介，永野広海，黒野祐一：顔面麻痺を伴った破傷風例．耳鼻臨床 2008; 101 (1); 55-60.

吉福孝介，永野広海，黒野祐一：早期診断治療により改善したベーチェット病例．耳鼻臨床 2008; 101; 115-120.

吉福孝介，永野広海，黒野祐一：CO2 レーザーと硬化療法併用治療した喉頭血管腫例．耳鼻臨床 2008; 101; 215-220.

吉福孝介，永野広海，黒野祐一：咽後膿瘍により心肺停止したが救命し得た 1 症例．耳展 2008; 51: 43-48.

吉福孝介，永野広海，黒野祐一：頻回の外科的処置を要した深頸部および縦隔膿瘍例．耳鼻臨床 2008; 101; 367-373.

吉福孝介，黒野祐一：経鼻的下垂体手術後に発症した鼻中隔膿瘍の 1 例．耳展 2008; 51: 447-451.

永野広海，吉福孝介，黒野祐一：喉頭病変との鑑別を要した胸部仮性大動脈瘤に起因した反回神経麻痺症例．耳展 2008; 51: 110-114.

永野広海，吉福孝介，黒野祐一咽喉頭異常感を主訴とした食道カンジダ症．耳鼻臨床 2008; 101: 233-236.

川畠雅樹，福岩達哉，黒野祐一：涙嚢に発生したオンコサイトーマ例．耳鼻臨床 2008; 101: 521-526.

田口周平，宮下圭一，黒野祐一，北島信一，梅北喜久：舌に発生した硬化性類上皮線維肉腫の 1 例．診断病理 2008; 25: 283-287.

Kawabata M, Yoshifuku K, Sagara Y, Kurono Y: Ewing's sarcoma/primitive neuroectodermal tumor occurring in the maxillary sinus. Rhinology 2008; 46: 75-78.

Nagano H, Deguchi K, Kurono Y: Malignant fibrous histiocytoma of the bucca: a case report. Auris Nasus Larynx. 2008; 35: 165-169.

吉福孝介，永野広海，黒野祐一：術前血管塞栓療法が有効であった鼻腔血管腫の 2 症例．耳展 2009; 52: 34-42.

吉福孝介，福岩達哉，林　多聞，大堀純一郎，田中紀充，黒野祐一：頚椎前方固定術 18 年後に発症した食道穿孔例．耳鼻臨床 2009; 102: 389-393.

吉福孝介，宮下圭一，黒野祐一：頚動脈合併切除を要した頚動脈小体腫瘍例．耳鼻臨床 2009; 102: 767-772

谷本洋一郎，松根彰志，黒野祐一：鼻性視神経炎との鑑別を要した Miller Fisher 症候群の 1 例．耳鼻と臨床 2009; 55: 257-263.

川畠雅樹，大堀純一郎，黒野祐一：初診時に鼻腔内異物を疑われた小児逆生歯牙の 2 例（鼻腔内逆生歯牙）．小児耳鼻咽喉科 2009; 30: 299-303.

西川拓朗，岡本康裕，河野嘉文，大堀純一郎，福岩達哉，西元謙吾，黒野祐一：頬骨に発症したランゲルハンス細胞組織球症の 1 例．小児耳鼻咽喉科 2009; 30: 1-4.

Nagano H, Yoshifuku K, Kurono Y. Polymyositis with dysphagia treated with endoscopic balloon dilatation. Auris Nasus Larynx. 2009; 36: 705-8.

吉福孝介，松根彰志，馬越瑞夫，黒野祐一：口腔内排膿誘導を試みた頬部膿瘍の 1 例．耳鼻と臨床 2010; 56: 24-28.

吉福孝介，馬越瑞夫，大堀純一郎，黒野祐一：鼻性眼窩内合併症の検討－眼窩内合併症 5 例－．耳鼻と臨床 2010; 56: 171-176.

吉福孝介，馬越瑞夫，大堀純一郎，黒野祐一：急性副鼻腔炎により発症した小児眼窩骨

膜下膿瘍例．耳鼻臨床 2010; 103 (10): 921-926.

吉福孝介，林　多門，大堀純一郎，黒野祐一：繰り返す頸部腫脹を主訴とした縦隔精上皮腫例．耳鼻臨床 2010; 103: 1045-1050.

吉福孝介，原田みずえ，福岩達哉，黒野祐一：後天性 C1-INH 欠損性血管浮腫例．耳鼻臨床 2010; 103: 1135-1139.

谷本洋一郎，積山幸祐，黒野祐一：上顎洞に生じたリンパ芽球性リンパ腫．耳鼻臨床 2010; 103: 819-824.

牧瀬高穂，福岩達哉，大堀純一郎，吉福孝介，黒野祐一：喉頭原発 Basaloid Squamous Cell Carcinoma 例．耳鼻臨床 2010; 103: 769-773.

Nagano H, Yoshifuku K, Deguchi K, Kurono Y. Adenocarcinoma of the paranasal sinuses and nasal cavity with lung metastasis showing complete response to combination chemotherapy with docetaxel, cisplatin and 5-fluorouracil (TPF): a case report. Auris Nasus Larynx. 2010; 37: 238-243.

Takumi K, Fukukura Y, Kamiyama T, Nakajo M, Ohori J, Kurono Y, Higashi M: Epithelial-myoepithelial carcinoma of the parotid gland: correlation of dynamic magnetic resonance imaging, (18) F-fluorodeoxyglucose-positron emission tomography, and pathological findings. Jpn J Radiol. 2010; 28: 618-622.

宮之原郁代，宮下圭一，黒野祐一：HIV 感染に合併した内耳梅毒の 1 例．Otol Jpn 2011; 21: 821-826.

吉福孝介，大堀純一郎，黒野祐一：ACE 阻害剤による口腔底および顎下部の晩発性血管浮腫例．耳鼻臨床 2011; 104: 285-289.

大堀純一郎，馬越瑞夫，黒野祐一：歯科治療中に発症した縦隔気腫の 1 例．口腔・咽頭科 2011; 24: 199-204.

永野広海，馬越端夫，牧瀬高穂，川畠雅樹，原田みずえ，松根彰志，黒野祐一：耳鳴を主訴とした鼓膜ヤケヒョウヒダニ寄生例．耳鼻臨床 2011; 104: 251-254.

永野広海，馬越瑞夫，原田みずえ，大堀純一郎，黒野祐一：下咽頭血管腫の 2 例．耳鼻臨床 2011; 104: 353-357.

永野広海，馬越瑞夫，川畠雅樹，早水佳子，大堀純一郎，吉福孝介，黒野祐一：唾液管内視鏡を用いて診断した両側ステノン管狭窄の 2 例．耳鼻臨床 2011; 104: 435-440.

早水佳子，黒野祐一：ECM1 遺伝子変異を伴う皮膚粘膜ヒアリノーシス例．耳鼻臨床 2011; 104: 575-580.

早水佳子，黒野祐一：鼻咽腔血管周囲細胞腫に起因する腫瘍性骨軟化症例．耳鼻臨床 2011; 104: 631-636.

早水佳子，大堀純一郎，黒野祐一：上顎に発生した juvenile trabecular ossifying fibroma の 1 例．小児耳鼻咽喉科 2011; 32: 347-351.

Miyanohara I, Miyashita K, Takumi K, Nakajo M, Kurono Y: A case of cochlear nerve deficiency without profound sensorineural hearing loss. Otol Neurotol. 2011; 32: 529-532.

積山幸祐，黒野祐一：内視鏡下手術を行った視神経管骨折の 1 例．頭頸部外科 2012; 21: 217-221.

吉福孝介，馬越瑞夫，黒野祐一：頸部に発生した悪性線維性組織球腫例．耳鼻臨床 2012; 105: 787-792.

永野広海，早水佳子，大堀純一郎，黒野祐一：下鼻甲介に基部を有する鼻ポリープ例．耳鼻臨床 2012; 105: 533-536.

Nagano H, Harada M, Umakoshi M, Hayamizu Y, Yoshifuku K, Kurono Y:Two cases of peritonsillar abscess complicated by von Willebrand disease. Auris Nasus Larynx. 2012; 39: 523-526.

永野広海，井内寛之，吉福孝介，森園健介，黒野祐一：咽頭病変を来した慢性活動性 EB ウイルス感染症の 1 症例．日耳鼻 2013; 116: 802-807.

川畠雅樹，吉福孝介，永野広海，黒野祐一：悪性疾患との鑑別を要した頸部軟部組織ア

ミロイドーマ例．耳鼻臨床 2013; 106: 549-555.

井内寛之，永野広海，大堀純一郎，黒野祐一：耳下腺深葉に発生した AVM 例．耳鼻臨床 2013; 106: 605-608.

地村友宏，永野広海，黒野祐一：粘膜優位型尋常性天疱瘡例．耳鼻臨床 2013; 106: 717-721.

Hanada T, Yamahata H, Hanaya R, Kurono Y, Nagano H, KItajima S, Hiraki T, Arita K: A patient with sinonasal leiomyoma presenting with exophthalmos: Case report and review of the literature. Neurology Asia 2013; 18: 327-330.

積山幸祐，黒野祐一：鼻腔放線菌症例．日本鼻科学会会誌 2014; 53: 566-571.

吉福孝介，西元謙吾，平瀬博之，松崎　勉：下咽頭癌の発見に Valsalva 法が有用であった 2 例．耳鼻と臨床 2014; 60: 60-66.

吉福孝介，西元謙吾，松崎　勉：喉頭麻痺を伴った喉頭帯状疱疹の 1 例．耳鼻と臨床 2014; 60: 168-172.

吉福孝介，西元謙吾，松崎　勉：顎関節症により両側口蓋扁桃摘出術施行時の術野展開が困難であった 1 症例．日耳鼻 2014; 117: 1264-1269.

吉福孝介，西元謙吾，松崎　勉：耳介軟骨骨折を合併した亜急性耳介血腫症例．頭頸部外科 2014; 24: 131-135.

吉福孝介，西元謙吾，松崎　勉：鼻翼に発生したグロームス腫瘍の 1 例．頭頸部外科 2014; 24: 143-147.

永野広海，井内寛之，地村友宏，川畠雅樹，黒野祐一：ワルダイエル咽頭輪に腫瘤形成をきたしたリンパ腫型 ATL 症例．耳鼻臨床 2014; 107: 469-473.

井内寛之，黒野祐一：硬口蓋原発の悪性筋上皮腫例．耳鼻臨床 2014; 107: 919-925.

Hiraki T, Higashi M, Goto Y, Kitazono I, Yokoyama S, Iuchi H, Nagano H, Tanimoto A, Yonezawa S: A rare case of internal jugular vein aneurysm with massive hemorrhage in neurofibromatosis type 1. Cardiovasc Pathol. 2014; 23: 244-247.

吉福孝介，西元謙吾，松崎　勉：頸部リンパ節結核の 6 例．耳鼻と臨床 2015; 61: 35-40.

吉福孝介，西元謙吾，松崎　勉，牛飼雅人：頸部悪性リンパ腫による神経調節反射性失神の 1 症例．日耳鼻 2015; 118: 776-781.

永野広海，馬越瑞夫，地村友：黒野祐一：気道病変を伴った Stevens-Johnson 症候群例．口腔・咽頭科 2015; 28: 211-217.

永野広海，黒野祐一：巨舌とオトガイ下腫脹を契機に発見された全身性アミロイドーシス例．耳鼻臨床 2015; 108: 649-655.

永野広海，宮本佑美，地村友宏，井内寛之，黒野祐一：翼口蓋窩から蝶形骨洞に腫瘤形成を認めた成人 T 細胞白血病例．耳鼻臨床 2015; 108: 775-781.

永野広海，井内寛之，川畠雅樹，黒野祐一：前斜角筋より発生したデスモイド例．耳鼻臨床 2015; 108: 845-850.

原田みずえ，大堀純一郎，黒野祐一：初発症状として急性喉頭蓋炎様の所見を呈した悪性リンパ腫の 1 例．喉頭 2015; 27: 34-38.

宮下圭一，大堀純一郎，黒野祐一：内視鏡下経上顎洞法で翼口蓋窩の操作を行った若年性血管線維腫例．耳鼻臨床 2015; 108: 347-352.

川畠雅樹，宮下圭一，黒野祐一：悪性外耳道炎に伴った頭蓋底骨髄炎の 2 例．日耳鼻感染症エアロゾル会誌 2015; 3: 102-107.

馬越瑞夫，永野広海，黒野祐一：内視鏡により摘出した鼻腔 Glomangiopericytoma 例．耳鼻臨床 2015; 108: 109-113.

吉福孝介，松崎　勉，西元謙吾：血痰を主訴とした胸部大動脈瘤の 1 例．耳鼻と臨床

2016; 62: 141-146.

永野広海，馬越瑞夫，地村友宏，黒野祐一：セツキシマブ併用放射線治療中の誤嚥から生じた急性呼吸促迫症候群例．耳鼻臨床 2016; 109: 203-1016.

原田みずえ，大堀純一郎，黒野祐一：Weekly カルボプラチン併用化学放射線療法により汎血球減少に陥った上顎洞癌例．耳鼻臨床 2016; 109: 269-274.

永野広海，宮下圭一，黒野祐一：中咽頭に発生した EB ウイルス感染を伴うメトトレキサート関連リンパ増殖性疾患例．口腔・咽頭科 2017; 30: 67-71.

永野広海，地村友宏，原田みずえ，大堀純一郎，黒野祐一：化学放射線治療後の咽頭閉塞に対して咽頭形成術とバルーン拡張術を施行した 1 例．口腔・咽頭科 2017; 30: 73-77.

馬越瑞夫，永野広海，牧瀬高穂，黒野祐一：内経静脈並びに腕頭静脈に腫瘍塞栓を形成した腎細胞癌の甲状腺転移の 1 例．口腔・咽頭科 2017; 30: 79-84.

地村友宏，川畠雅樹，永野広海，黒野祐一：軟口蓋麻痺で発症した acute oropharyngeal palsy 例．口腔・咽頭科 2017; 30: 171-174.

井内寛之，宮下圭一，大堀純一郎，黒野祐一：中咽頭小細胞癌の 1 例．頭頸部癌 2018; 44: 300-304.

宮本佑美，永野広海，黒野祐一：上咽頭に発生した多形腺腫例．耳鼻臨床 2018; 111: 469-476.

井内寛之，永野広海，黒野祐一：小児耳下腺腺房細胞癌の 1 例．頭頸部癌 2019; 45:66-70.

久徳貴之，永野広海，井内寛之，地村友宏，黒野祐一：咽後膿瘍を合併した不全型川崎病例．耳鼻臨床 2019; 112: 103-108.

伊東小都子，牧瀬高穂，井内寛之，黒野祐一：鼻副鼻腔に発生した孤立性線維性腫瘍例．耳鼻臨床 2019; 112: 581-585.

Kawabata M, Nagano H, Iuchi H, Umakoshi M, Ohori J, Kurono Y: Squamous cell carcinoma at sites of old maxillary fractures.　Auris Nasus Larynx. 2019, PMID: 30962015 DOI: 10.1016/j.anl.2019.03.008

宮本佑美，黒野祐一：経口切除を施行した咽喉頭脱分化型脂肪肉腫例．耳鼻臨床 2020; 113: 315-321.

せんだい耳鼻咽喉科　内　薗　明　裕

＜総説＞

内薗明裕：乳幼児・子どもに対する耳鼻咽喉科領域での漢方の有用性.
MB ENTONI　229：84-92，2019.

＜学会・講演＞

第26回　日本東洋医学会鹿児島県地方部会　　平成31年２月17日（鹿児島市）
　テーマ別研究会「生活習慣病と漢方」
　「栄養療法と漢方」
第35回　日本耳鼻咽喉科漢方研究会学術集会　　令和元年10月26日（東京都）
　「半夏厚朴湯処方例における鉄代謝異常の検討」

ふくいわ耳鼻咽喉科クリニック　福　岩　達　哉

＜学会・講演＞

第22回日本アロマセラピー学会学術総会　　令和元年11月３日～４日（福岡市）
　シンポジウム「耳鼻科領域におけるアロマセラピー」
　座長：福岩　達哉（ふくいわ耳鼻咽喉科クリニック）

江川耳鼻咽喉科　江　川　雅　彦

＜学会・講演＞

第22回日本アロマセラピー学会学術総会　　令和元年11月３日～４日（福岡市）
　シンポジウム「耳鼻科領域におけるアロマセラピー」
　シンポジスト：江川　雅彦（江川耳鼻咽喉科）

１．共催の講演会

第25回南九州上気道感染症臨床懇話会　　令和元年９月19日
基調講演：「上気道感染症におけるマクロライド系抗菌薬の位置づけ」
鹿児島大学大学院　医歯学総合研究科
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学　教授　黒野　祐一　先生
ディスカッション：テーマ「マクロライド療法の展望」
鹿児島市立病院　耳鼻咽喉科　部長　花牟禮　豊　先生
もりやま耳鼻咽喉科　院長　森山　一郎　先生
うえの耳鼻咽喉科クリニック　院長　上野　員義　先生
うしかい耳鼻咽喉科クリニック　院長　牛飼　雅人　先生
鹿児島大学病院　耳鼻咽喉科・頭頸部外科
助教　原田　みずえ　先生

第116回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会　　令和元年11月14日
特別講演：「アレルギー性鼻炎治療における抗ヒスタミン薬アップデート」
日本医科大学　大学院医学研究科頭頸部・感覚器科学
准教授　後藤　穣　先生

第117回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会　　令和２年１月23日
特別講演：「アレルギー性鼻炎の治療　現在から近未来」
山梨大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
教授　櫻井　大樹　先生

2. 第22回さくらじまフォーラム

本フォーラムは，令和元年12月19日にサンロイヤルホテルで開催されました。一般演題として「当初突発性難聴を疑われた症例」を鹿児島大学の喜山敏志先生に，「頸胸部リンパ節腫大で紹介となったベトナム技能実習生症例」を鹿児島市立病院の林多聞先生に，「下咽頭癌症例における多発肺病変」を鹿児島医療センターの西元謙吾先生に発表して頂きました。いずれの発表も日常診療の pit fall と pearl がつまった非常に興味深いものでした。領域講習では，徳島大学の武田憲昭教授が「めまい診療の最近の進歩」

と題して講演されました。メニエール病における内リンパ水腫の経時的変化をMRIで示されたのが印象的でした。また，めまいの新しい治療の開発についても夢のある話を拝聴することができました。本フォーラムは今回をもって幕を閉じることになりましたが，日常診療における症例を多施設の先生方と気軽に意見交換できる貴重な交流の場でした。これまで本フォーラムの開催に御尽力頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

（文責：川畠雅樹）

３．第18回『鼻の日』市民講座

日時：令和元年８月３日（土）14時00分～15時00分
場所：プラザＮ４階ヴァリエホール　（鹿児島市武1-4-2）

講演内容
　司会　鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科　川畠雅樹

１．慢性副鼻腔炎ってどんな病気？
　鹿児島大学病院耳鼻咽喉科　馬越瑞夫

２．鼻閉と睡眠時無呼吸症候群
　鹿児島大学病院耳鼻咽喉科　松元隼人

３．アレルギー性鼻炎～最近の話題～
　鹿児島大学病院耳鼻咽喉科　地村友宏

上記のテーマについてわかりやすく解説され，盛会であった。

（文責：川畠雅樹）

Ⅳ．同門会報告

鹿児島大学大学院　耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会並びに学術講演会が，令和２年１月18日にSHIROYAMA HOTEL kagoshimaで開催された。元号が変わって初めての同門会総会では，役員改選が行われ，次期会長に森山一郎先生が選出された。新入会員として，有本一華先生，喜山敏志先生を迎え入れた。また黒野教室としての最後の同門会であった。来年には新任教授および新入医局員も同門会に迎え入れることとなる予定であり，益々の同門会の発展が期待される。

学術講演会では，特別講演として藤田医科大学　耳鼻咽喉科学　教授　楯谷一郎先生に「頭頸部外科におけるロボット支援手術の現状と展望」と題して講演いただいた。現時点で，ロボット手術の保険適応は未承認であるが，低侵襲で安全なロボット手術を行うため，当教室としても積極的に取り入れていく方針である。

博士学位取得報告では，本年当教室で学位を取得した間世田先生が「ホスホリルコリン舌下免疫と経鼻免疫による上気道粘膜および全身免疫応答の誘導」，井内先生が「肺炎球菌・インフルエンザ菌の上皮接着におけるホスホリルコリンの役割」として学位取得報告をした。間世田先生の学位論文は，日本耳鼻咽喉科学会のSPIO　AWARDとして表彰された論文の報告であった。今後も同門会で学位取得を報告できる様，一層の教室の発展を期待する。一般演題では，原田先生，牧瀬先生，松崎先生が症例報告を行った。関連病院からの活発な報告は，同門会のみならず鹿児島県医療圏全体の活性化となると期待され今後も同様の報告を継続していくことが望まれる。同門会員の皆様におきましてはふるって演題投稿ください。

次年からは新教授を迎えて同門会が開催される予定である。今後も同門会がますます発展していくことを祈念する。

（文責：大堀純一郎）

鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会　令和２年１月18日　於：城山ホテル鹿児島

【対象地域】

鹿児島市，阿久根市，垂水市，屋久島町，財部町（曽於市），大崎町，輝北地区（鹿屋市）

【受診者数】

小学生　2,731名，中学生　1,332名

【対象疾患】

耳垢栓塞，滲出性中耳炎，慢性耳中耳炎，鼻中隔彎曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎，慢性扁桃炎，扁桃肥大の９疾患

【結果】

疾患別の有病率はアレルギー性鼻炎と耳垢栓塞が圧倒的に多い結果となっていた（図１）。学年別耳疾患有病率は高学年を中心に耳垢栓塞が多かった（図２）。学年別鼻疾患有病率は学年毎に大きな差はなかった（図３）。学年別扁桃疾患では扁桃肥大は学年ごとにばらつきを認める結果となった（図４）。

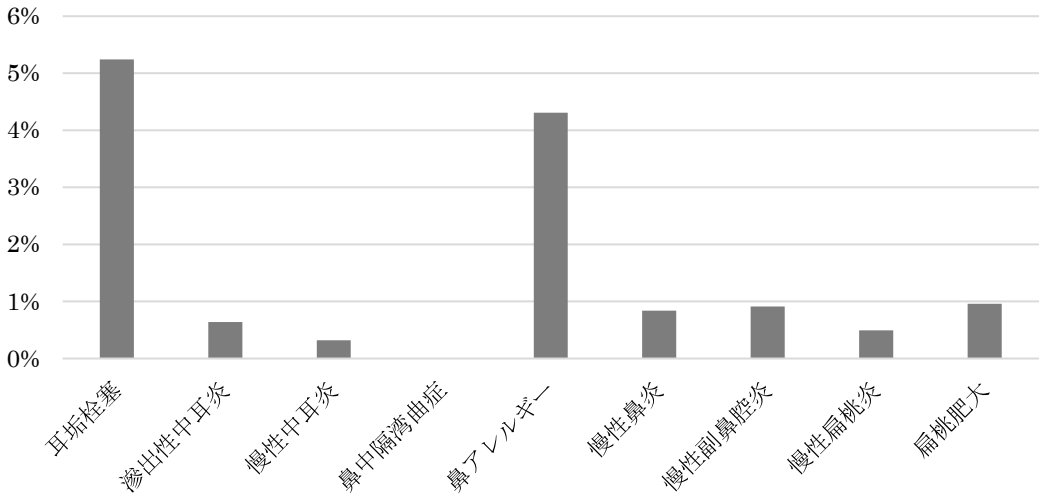


図１．疾患別の有病率

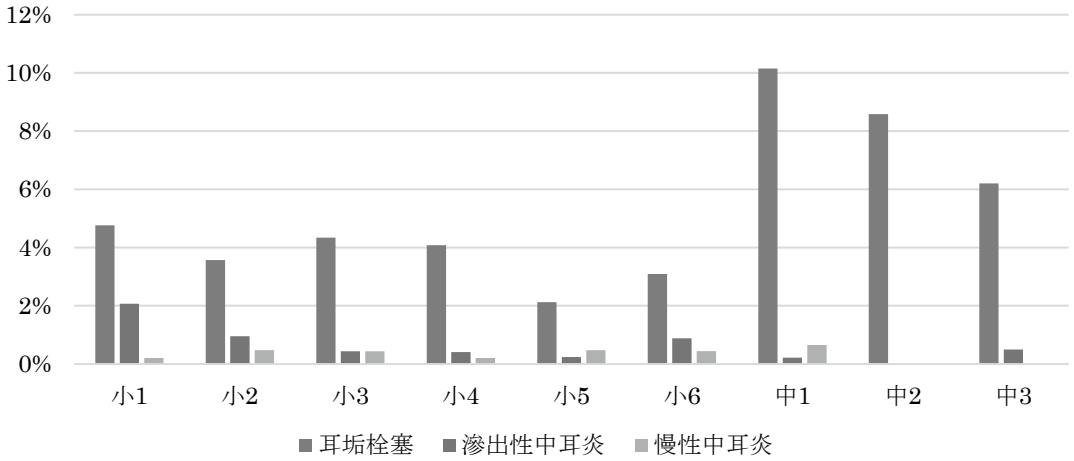


図２．学年別耳疾患有病率

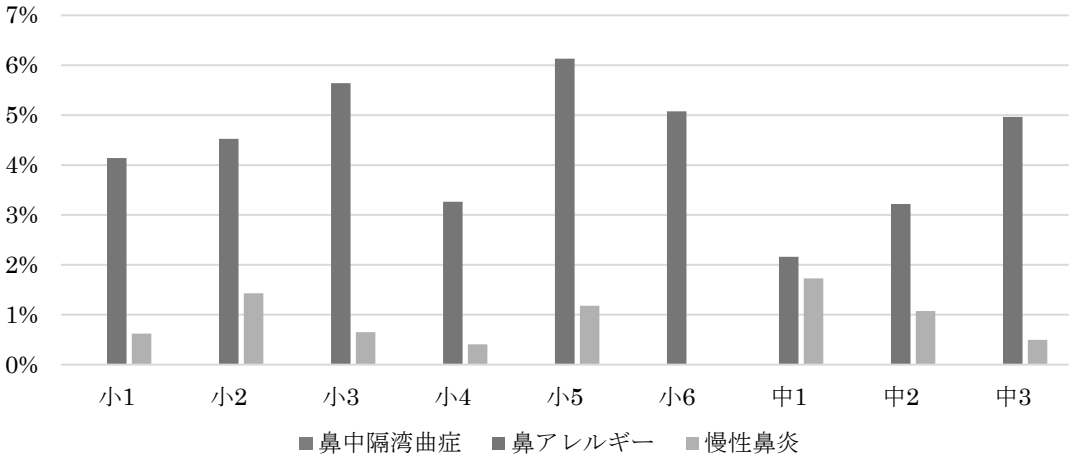


図３．学年別鼻疾患有病率

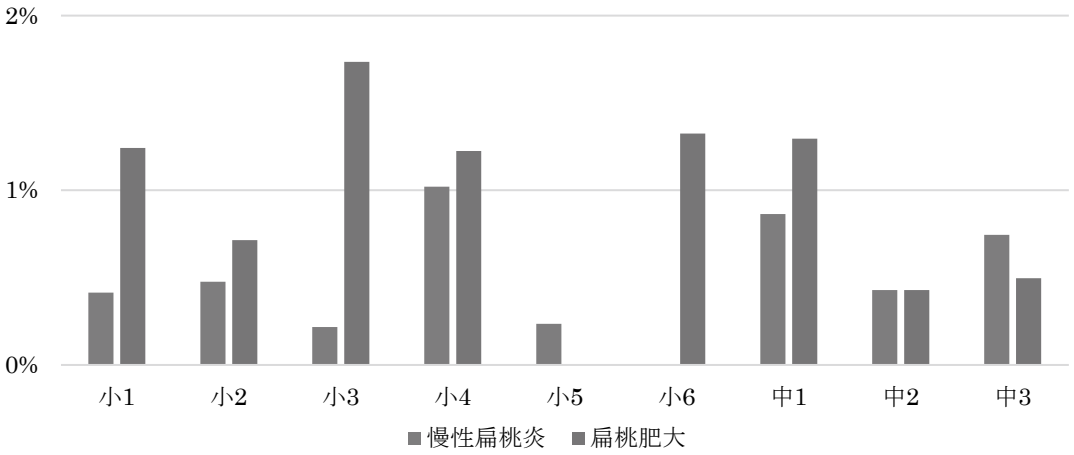


図４．学年別扁桃疾患有病率

難聴・耳鳴り・補聴器外来

宮之原　郁　代

例年に引き続き，小児・成人難聴の精査，難聴の遺伝子診断，人工内耳候補者選定，術後の（リ）ハビリテーション，補聴器フィッティング，TRT 療法，めまいの精査・リハビリ等をおこなっています。

今年度は一区切りですので，2009年以降の各種検査数について表1に示しました。

2009-2012年の ABR 件数は新生児難聴の診断を行った症例数とほぼ一致します。その後は成人を含めた検査件数になっていますが，新生児難聴の症例数はその後も大きな変動はなく，COR 件数も年間25例前後で推移しています。近年の傾向として大幅な出生数の増加はみられないこと，新スク後の精密聴力検査機関が他に一施設あることから，今後も同等の受診数で推移していくものと予測しています。

当科では，成人を中心とした乳幼児期以降の難聴精査での紹介例が多く，これらの症例を対象に遺伝子診断をおこなってきました。2004年から信州大学主管（研究責任者：宇佐美真一先生）の「難聴の遺伝子診断」の臨床研究に参加し，その後，2011年の先進医療を経て2012年に保険収載され現在まで，81家系172名の遺伝子診断を行いました。この間，希少疾患である *GRXCR1* 遺伝子変異による難聴の家系が本邦で初めて同定されました。画像検査（3TMRI）と遺伝子検査によって，いままでよくわからなかった難聴の原因が明らかになるものも多くなってきたことを，この十数年実感しています。ことに，遺伝子診断に関しては（聴覚以外の他の領域でもそうですが），今後ますますニーズが高まることが想定されます。引き続き，遺伝カウンセリングを含めて充実させ，患者さんがよりよい人生選択をできるようサポートしていきたいと思います。

TRT 療法は減少傾向，補聴器フィッティングは微増ですが，耳鳴のある軽度難聴症例では補聴器フィッティングを優先させていますので，その影響と考えられます。

前庭機能検査では，体平衡検査，眼振検査，カロリックテスト，ETT，OKP を評価しています。完全予約制が導入された2010年以降，全体としては減少傾向ですが，高齢者のめまい症例の紹介についてはここ数年増加しています。高齢者のめまいは，いわゆる身体機能の低下に伴って起こるものが多く，単純な前庭機能障害ではないものがほとんどですが，決して前庭機能も正常ではない，というところが難しいところかと思います。当科では本年度，眼球運動検査装置 vHIT を導入しましたので今後のめまい診断への有効活用が期待されているところです。

表1

	ABR *1	補聴器外来	耳鳴外来（TRT療法）	遺伝学的検査（先天性難聴）家系数	遺伝学的検査（先天性難聴）	前庭機能検査*2	COR
2009年	24	39	9	0	† 1	109	
2010年	18	23	13	5	9	95	
2011年	12	21	9	4	16	91	
2012年	22	33	9	3	6	80	
2013年	61	34	11	8	15	86	7
2014年	86	30	20	2	10	82	28
2015年	88	23	12	7	16	71	28
2016年	78	17	13	12	31	92	25
2017年	73	29	13	5	11	42	17
2018年	77	36	6	8	22	67	27
2019年	92	31	5	6	12	60	26

＊1　ABR（2009～12年は新生児のみのデータ）
＊2　前庭機能検査は件数，他は新患数
†　前年度登録家系の家族

Ⅶ. 病理集計

病理集計	件数
入院	452
外来	398
総施行件数	850

2019年1-12月

部位	悪性	件	良性	件
外耳・中耳	SCC	2	cholesteatoma	15
鼻腔	SCC	8	inverted papilloma	3
	malignant melanoma	2	schneiderin papilloma	4
	adenocarcinoma	1	IgG4-related rhinosinusitis	1
	NK/T-cell lymphoma	1		
	DLBCL	1		
副鼻腔	SCC	9	schneiderin papilloma	4
	meningothelial meningioma	1	inverted papilloma	2
	extranodal NK/T-cell lymphoma	1		
口腔・舌	SCC	16	lipoma	1
	ATLL	1		
	peripheral T-cell lymphoma	1		
上咽頭	SCC	4		
	adenoid cystic carcinoma	1		
	nodal peripheral T-cell lymphoma	1		
中咽頭	SCC total	23	squamous cell papilloma	9
	HPV-positive	5		
	HPV-negative	14		
	HPV-unclear	4		
	DLBCL	1		
	ATLL	1		
下咽頭	SCC	25		
副咽頭間隙	Yolk sac tumor	1		
喉頭	SCC	25	squamous cell papilloma	2
	DLBCL	1		
耳下腺	mucoepidermoid carcinoma(low)	3	pleomorphic adenoma	14
	adenoid cystic carcinoma	2	warthin tumor	8
	carcinoma ex pleomorphic adenoma	2	lymphoepithelial cyst	3
	salivary duct carcinoma	1	basal cell adenoma	1
			cystadenoma	1
顎下腺			pleomorphic adenoma	1
			IgG4 related disease	1
小唾液腺			chronic sialadenitis with IgG4	3
			chronic sialadenitis with SS	4
甲状腺	papillary carcinoma	5	adenomatous goiter	2
頸部	metastasis of SCC	10	lipoma	8
	SCC(skin etc)	7	lymphoepithelial cyst	3
	metastasis of carcinoma	5	thyroglossal duct cyst	2
	Classic Hodgkin lymphoma	4	schwannoma	2
	DLBCL	2	lateral cervical cyst	1
	metastasis of papillary carcinoma	2	lymphangioma	1
	peripheral T-cell lymphoma	1	kimura's disease	1
	ATLL	1		
	pediatric-type follicular lymphoma	1		
	metastasis of malignant melanoma	1		
	metastasis of adenocarcinoma	1		

Ⅷ. 手術実績

令和元年度　手術内訳と件数（2019年4月～2020年3月）

全身麻酔	357件
局所麻酔	79件
合計	436件

耳		
	鼓膜形成術	3
	鼓室形成術	18
	乳突削開術	1
	顔面神経減荷術	2
	外耳道腫瘍摘出術	3
	外耳道異物摘出術	
	耳瘻管摘出術	4
	鼓膜チューブ留置	3
鼻		99
	鼻内視鏡下副鼻腔手術	63
	鼻中隔矯正術	7
	眼窩底骨折整復術	9
	鼻出血止血術（全麻）	4
	鼻副鼻腔腫瘍切除術	8
	鼻骨骨折整復術	3
	粘膜下下鼻甲介切除術	3
	上顎全摘術	2
口腔		7
	舌悪性腫瘍切除術	4
	口腔底悪性腫瘍切除術	2
	硬口蓋悪性腫瘍切除術	
	口腔良性腫瘍摘出術	1
咽頭		130
	両側口蓋扁桃摘出術	82
	食道直達鏡検査	28
	下咽頭悪性腫瘍摘出術（経口）	6
	下咽頭悪性腫瘍摘出術（咽喉食摘）	6
	中咽頭腫瘍摘出術	1
	咽頭外瘻閉鎖術	5
	アデノイド切除術	1
	過長茎状突起切除	1
喉頭		29
	喉頭微細手術	15
	喉頭悪性腫瘍摘出術	4
	喉頭直達鏡検査	8
	喉頭狭窄症手術	2
	誤嚥防止手術	
甲状腺		9
	甲状腺良性腫瘍切除術	4
	甲状腺悪性腫瘍切除術	5
	副甲状腺悪性腫瘍切除術	
唾液腺		34
	耳下腺腫瘍摘出術	24
	顎下腺腫瘍摘出術	10
	舌下腺摘出術	
頸部		81
	頸部郭清術	10
	気管切開術	18
	リンパ節摘出術	21
	頸部腫瘍摘出術	19
	気管口狭窄開大術	11
	頸部膿瘍切開排膿術	2
再建		
	遊離空腸再建	6
	前腕皮弁再建	1
	大胸筋皮弁再建	2
	DP 皮弁再建	2
合計		436

Ⅸ. 各種科学研究費

（令和２年３月現在）

文部科学省科学研究費

基盤研究（C）
新規粘膜アジュバントを用いた広域スペクトラムワクチンの開発に関する研究
研究代表者　　黒野　祐一

基盤研究（C）
鼻咽腔関連リンパ組織（NALT）の免疫記憶機能を応用した新規粘膜ワクチンの開発
研究代表者　　大堀　純一郎

基盤研究（C）
ホスホリルコリン経鼻免疫追加によるあらたな肺炎球菌ワクチン接種プログラムの開発
研究代表者　　間世田　佳子

若手研究
ホスホリルコリンによる細菌感染とアレルギー性炎症の制御に関する研究
研究代表者　　川畠　雅樹

基盤研究（C）
インフルエンザウイルス感染症の生体肺イメージング解析技術の開発とその応用
研究代表者　福山　聡

X. 業　　績

1. 原　　著

(1) **井内寛之，永野広海，黒野祐一**
小児耳下腺腺房細胞癌の１例
頭頸部癌　45(1): 66-70, 2018

(2) **永野広海，宮本佑美，地村友宏，井内寛之，馬越瑞夫，牧瀬高穂，川畠雅樹，宮下圭一，大堀純一郎，宮之原郁代，黒野祐一**
再発性多発軟骨炎９症例の臨床検討
日本耳鼻咽喉科学会会報　122: 1322-1328, 2019

(3) Ideura M, Nishio SY, Moteki H, Takumi Y, Miyagawa M, Sato T, Kobayashi Y, Ohyama K, Oda K, Matsui T, Ito T, Suzumura H, Nagai K, Izumi S, Nishiyama N, Komori M, Kumakawa K, Takeda H, Kishimoto Y, Iwasaki S, Furutate S, Ishikawa K, Fujioka M, Nakanishi H, Nakayama J, Horie R, Ohta Y, Naito Y, Kakudo M, Sakaguchi H, Kataoka Y, Sugahara K, Hato N, Nakagawa T, Tsuchihashi N, Kanda Y, Kihara C, Tono T, **Miyanohara I**, Ganaha A, Usami SI.
Comprehensive analysis of syndromic hearing loss patients in Japan.
Scientific Reports 9(1): 2019

(4) **J.Ohori, T.Jimura, Y.Kurono**
Role of Phosphorylcholine-Specific Immunoglobulin M in Acute Upper Respiratory Tract Infections
Annals of Otology, Rhinology & Laryngology　128(6): 111-116, 2019

(5) T. Miwa, K. Ikeda, T. Ishibashi, M. Kobayashi, K. Kondo, Y. Matsuwaki, T. Ogawa, H. Shiga, M. Suzuki, K. Tsuzuki, A. Furuta, Y. Motoo, S. Fujieda, **Y. Kurono**
Clinical practice guidelines for the management of olfactory dysfunction -Secondary pubulication
Auris Nasus Larynx　46(5): 653-662, 2019

(6) **川畠雅樹，宮下圭一，黒野祐一**
鼻性眼窩内合併症の臨床的特徴と視力予後
頭頸部外科　29(3): 267-272, 2019

(7) **宮本佑美，黒野祐一**
経口切除を施行した咽喉頭脱分化型脂肪肉腫例
耳鼻臨床　113(5): 315-321，2020

2．総　　説

(1) **大堀純一郎**
特集　耳鼻咽喉科領域の外傷をマスターする　顎骨骨折
JOHNS　35(5): 589-591, 2019

(2) **黒野祐一**
特集　気管食道科領域における好酸球性疾患
日本気管食道科学会会報　70(5): 320-325, 2019

(3) **宮之原郁代**
【“はなづまり”を診る】はなづまりと加齢・ホルモン・心因
ENTONI 241: 29-34, 2020

(4) **宮之原郁代**
アレルギー性鼻炎治療における鼻噴霧用ステロイド薬の新たな位置づけ
日本耳鼻咽喉科学会会報　(123): 30-35, 2020

(5) **黒野祐一**
上気道感染症と粘膜免疫
日本耳鼻咽喉科学会秋田県地方部会　10-13, 2020

(6) **大堀純一郎**
特集　知っておくべき耳鼻咽喉科領域における医薬品副作用
抗ヒスタミン薬
MB ENT　240 : 45-51, 2020

3. 国内学会発表

(1) 特別講演

第92回北北海道耳鼻咽喉科懇話会　　令和元年６月１日（旭川市）
「上気道感染症およびアレルギー性炎症の粘膜免疫による制御」
黒野祐一

第168回秋田県地方部会学術講演会　　令和元年６月23日（秋田市）
「上気道感染症と粘膜免疫」
黒野祐一

島根大学医学部講義　　令和元年９月２日（出雲市）
「鼻科領域の疾患と治療」
黒野祐一

I & I in Saitama　–Infection & Immunity in Saitama　第８回学術講演会
令和元年11月13日（さいたま市）
「上気道重症感染症の診断と治療における留意点」
黒野祐一

第30回岡山耳鼻咽喉科感染症治療研究会　　令和元年11月21日（岡山市）
「耳鼻咽喉科領域における感染症治療の留意点～急性喉頭蓋炎・扁桃周囲膿瘍を中心に～」
黒野祐一

和歌山耳鼻咽喉科・頭頸部外科臨床懇話会　　令和元年11月30日（和歌山市）
「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」
黒野祐一

大分大学医学部臨床講義　　令和元年12月５日（大分市）
「口腔・咽頭腫瘍」
黒野祐一

アレルギー疾患講演会 in 山形　　令和元年12月12日（山形市）

「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」
黒野祐一

東京都耳鼻咽喉科医会学術講演会・講習会　　令和元年12月14日（東京都）
「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」
黒野祐一

第82回広島市中区医師会学術講演会　　令和２年２月19日（広島市）
「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」
黒野祐一

愛知南部アレルギーセミナー　　令和２年２月29日（名古屋市）
「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」
黒野祐一

(2) 会長講演

第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会　令和元年5月8日～11日（大阪市）
「扁桃周囲膿瘍の病態と治療のエビデンス」
黒野祐一

(3) シンポジウム

第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会　　令和元年5月8日～11日（大阪市）
「耳鼻咽喉科領域のワクチン研究最前線」〈日耳鼻企画〉
大堀純一郎
「耳鼻咽喉科医として働く女と男の本音と建て前　男性医師を夫にもつベテラン女性医師として」
宮之原郁代

(4) ミニシンポジウム

第68回日本アレルギー学会学術大会　　令和元年６月14日～16日（東京都）
アレルギー疾患の疫学・発症因子・発症予防
「ホスホリルコリンに対する血清中抗体活性と
スギ花粉症の感作・発症リスクの関連性についての検討」
宮之原郁代，**大堀純一郎**，**牧瀬高穂**，川島佳代子，**黒野祐一**

(5) ランチョンセミナー

第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会　　令和元年5月8日～11日（大阪市）

「鼻噴霧用ステロイド薬の新たな位置づけ」

宮之原郁代

第81回耳鼻咽喉科臨床学会総会および学術講演会

令和元年6月27日～28日（名古屋市）

「耳鼻咽喉科領域における感染症治療の留意点～急性喉頭蓋炎・扁桃周囲膿瘍を中心に～」

黒野祐一

第32回日本口腔・咽頭科学会総会ならびに学術講演会

令和元年9月12日～13日（大分市）

「アレルギー性鼻炎と咽頭症状」

黒野祐一

(6) パネルディスカッション

第38回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会　　令和２年２月27日～29日（横浜市）

「ここまでわかった扁桃病巣疾患:Tonsil-induced autoimmune/inflammatory syndorome (TIAS)」

胸肋鎖骨過形成症，掌蹠嚢胞性骨関節炎，SAPHO 症候群に対する扁桃摘出術のエビデンス

大堀純一郎

(7) 教育セミナー

第30回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会

令和２年１月30日～31日（宜野湾市）

「扁桃手術」

大堀純一郎

(8) 一般

第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会　　令和元年5月8日～11日（大阪市）

「推定体重240kg，BMI81.1の高度肥満患者に対する気管切開術の経験」

積山幸祐，川上翔平，上田　剛，平元良英，川越憲治，吉田真一，**黒野祐一**

「IgA 腎症におけるホスホリルコリン特異的免疫応答の意義」

大堀純一郎，地村友宏，黒野祐一

「セツキシマブ併用放射線治療を行った舌下腺腺様嚢胞癌の一例」
宮下圭一，牧瀬高穂，黒野祐一
「高気圧酸素療法を施行しなかった突発性難聴症例の検討」
永野広海，松元隼人，松崎尚寛，宮本佑美，地村友宏，井内寛之，馬越瑞夫，牧瀬高穂，川畠雅樹，宮下圭一，間世田佳子，大堀純一郎，宮之原郁代，黒野祐一
「若年性甲状腺癌5例の臨床的検討」
川畠雅樹，地村友宏，永野広海，黒野祐一
「嚥下障害および呼吸困難を来した強直性脊椎骨増殖症の一例」
牧瀬高穂，久徳貴之，馬越瑞夫，黒野祐一
「黄色ブドウ球菌およびレンサ球菌の上皮細胞接着に対するホスホリルコリン重合体の阻害効果」
井内寛之，黒野祐一
「マウス経鼻免疫における結合性ホスホリルコリン化合物（リピジュアシリーズ）の粘膜アジュバント効果の検討」
地村友宏，川畠雅樹，永野広海，松元隼人，大堀純一郎，黒野祐一
「顔面打撲による眼瞼腫脹が疑われた小児ランゲルハンス組織球症の一例」
宮本佑美，永野広海，黒野祐一
「腎細胞癌の上咽頭転移を認めた一例」
松元隼人，井内寛之，大堀純一郎，黒野祐一
「耳下腺内に発生した黄色肉芽腫の２症例」
伊東小都子，西元謙吾，久徳貴之，松崎　勉，黒野祐一

第14回小児耳鼻咽喉科　学会総会・学術講演会　令和元年5月23日～24日（福岡市）
「当科における小児突発性難聴４例の検討」
田淵みな子，宮之原郁代，黒野祐一

第43回日本頭頸部癌学会　　令和元年６月13日～14日（金沢市）
「後期高齢者喉頭癌症例の臨床的特徴についての検討」
川畠雅樹，井内寛之，伊東小都子，黒野祐一
「若年に発症した外耳道耳垢腺癌の１例」
伊東小都子，西元謙吾，松元隼人，松崎　勉，黒野祐一

第81回耳鼻咽喉科臨床学会総会および学術講演会
令和元年６月27日～28日（名古屋市）

「頭頸部癌治療中に非閉塞性腸間膜虚血症（NOMI）を発症した２症例」
馬越瑞夫，松崎尚寛，黒野祐一
「診断に苦慮した異所性小唾液腺の１例」
松元隼人，吉福孝介，西元謙吾，松崎　勉，黒野祐一

第34回九州連合地方部会学術講演会　　令和元年７月13日～14日（福岡市）
「当科における経口的咽喉頭部分切除術（TOVS）症例の現状と問題点」
喜山敏志，大堀純一郎，黒野祐一
「切開排膿が無効であった扁桃周囲膿瘍の検討」
藤原義宜，大堀純一郎，黒野祐一

第７回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会総会・学術講演会
令和元年９月５日～６日（津市）
「即時膿瘍扁桃摘出術の手術手技に関する検討」
大堀純一郎，藤原義宜，永野広海，川畠雅樹，井内寛之，黒野祐一
「ホスホリルコリン重合体のうがい液への応用」
井内寛之，大堀純一郎，黒野祐一
「細胞内寄生細菌に対する抗菌薬の効果に関する検討」
喜山敏志，井内寛之，黒野祐一
「扁桃周囲膿瘍に対する切開排膿の手技と有効性に関する検討」
藤原義宜，大堀純一郎，黒野祐一

第32回日本口腔・咽頭科学会総会ならびに学術講演会
令和元年９月12日～13日（大分市）
「耳下腺悪性リンパ腫の臨床的検討」
川畠雅樹，井内寛之，黒野祐一
「中咽頭癌予後因子としてのmodified Glasgow prognostic score の有用性について」
井内寛之，川畠雅樹，黒野祐一

第29回日本耳科学会総会・学術講演会　　令和元年10月10日～12日（山形市）
「当科を受診した先天性サイトメガロウイルス（CMV）感染症患者の臨床的特徴」
宮之原郁代，田淵みな子，大堀純一郎，黒野祐一

第58回日本鼻科学会総会・学術講演会　　令和元年10月３日～５日（東京都）
「Bevacizumab 投与後に生じた鼻中隔穿孔例」
牧瀬高穂，黒野祐一
「結合化ホスホリルコリン化合物（リピジュアシリーズ）の粘膜アジュバント効果」
地村友宏，川畠雅樹，永野広海，大堀純一郎，黒野祐一
「眼窩吹き抜け骨折の術式に関する検討」
伊東小都子，大堀純一郎，黒野祐一

第71回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会
令和元年11月28日～29日（宇都宮市）
「喉頭に発生した髄外性形質細胞腫の１例」
宮下圭一，黒野祐一
「食道入口部狭窄症例の治療経験」
宮本佑美，永野広海，大堀純一郎，黒野祐一
「経口的咽喉頭部分切除術（TOVS）の問題点」
喜山敏志，大堀純一郎，黒野祐一

第30回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会
令和２年１月30日～31日（宜野湾市）
「喉頭肉芽腫の臨床的検討」
井内寛之，黒野祐一

第38回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会　　令和２年２月27日～29日（横浜市）
「ホスホリルコリン経眼投与による上気道粘膜免疫応答の誘導」
永野広海，川畠雅樹，大堀純一郎，黒野祐一
「IgA 腎症におけるホスホリルコリン特異的免疫応答の意義と腎予後」
地村友宏，大堀純一郎，永野広海，黒野祐一

4. 国際学会発表

RHINOWORLD CHICAGO 2019　ISIAN・IRS・ARS
38th International Symposium of Inflammation and Allergy of Nose
Chicago, USA　June.6-9, 2019
「Phosphorylcholine intranasal immunization after 13-valent pneumococcal

conjugate vaccine can boost immune response against Streptococcus pneumoniae」
J.Ohori, Y.Maseda, Y.Kurono
「Intranasolacrimal Immunization of Pneumococcal Surface Protein A plus Poly（I:C）in Mice 」
H.Nagano, J.Ohori, Y.Kurono

15th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery
Fukuoka, Japan　December6-7, 2019
「Sublingual immunization with phosphorylcholine reduces antigen specific IgE levels and nasal symptoms in allergic rhinitis model mice」
T. Makise, Y. Kurono
「Two cases of carcinoma at sites of old maxillary fractures」
M. Kawabata, H. Nagano, Y. Kurono

5. 学位論文要旨

総研第５０９号

Role of phosphorylcholine in *Streptococcus pneumoniae* and nontypeable *Haemophilus influenzae* adherence to epithelial cells
（肺炎球菌と無莢膜インフルエンザ菌の上皮細胞接着におけるホスホリルコリンの役割）

井内　寛之

【序論及び目的】

７価そして13価の結合型肺炎球菌ワクチンは小児の侵襲性肺炎球菌感染症ならびに耐性菌による難治化症例を減少させ，急性中耳炎に対しても鼓膜切開の頻度が減少させたことが報告されている。しかし，急性中耳炎全体の予防効果は６％と低く，血清型置換やインフルエンザ菌による急性中耳炎の増加が問題となっている。また，2013年に定期接種化されたインフルエンザ菌ｂ型に対するワクチンも髄膜炎などの侵襲性感染症には優れた予防効果を示すが，中耳炎の起炎菌となるのは莢膜を持たない無莢膜型インフルエンザ菌（NTHi）であるため，このワクチンは中耳炎には無効である。そのため，

すべての肺炎球菌（Spn）やNTHiに有効な広域スペクトラムを持つワクチンの開発が急務である。そのワクチンの候補として，我々が注目しているホスホリルコリン（PC）がある。PCはSpnおよびNTHiを含む多種多様な病原体の構造成分であり，PCの発現が高いSpnは発現が低いSpnと比較して侵襲性の感染を引き起こし，PCの発現が高いNTHiは滲出性中耳炎患者の鼻咽頭に長期にわたって定着する。さらに，SpnおよびNTHiのコロニー形成や細胞内侵入は，PCと宿主粘膜細胞表面上の血小板活性化因子受容体（PAF-R）との結合を介する細菌の接着によって誘導される。我々は，キャリア蛋白としてKeyhole limpet hemocyanin（KLH）をPCに結合させたPC-KLHをコレラ毒素とともにBALB／cマウスに経粘膜投与することで，PC特異的粘膜および全身免疫応答が誘導され，SpnおよびNTHiの異なる株の鼻腔からのクリアランスが高まることを示した。SpnおよびNTHiのクリアランスの亢進はPC特異的分泌IgAによってもたらされ，これが細菌の付着を阻害することが知られている。これらの知見は，PCが広域スペクトラムのワクチンとして有効なことを示唆している。しかし，PCワクチンは，PCの発現が低いすなわち病原性が低い細菌で構成された常在細菌叢に影響を与える可能性が懸念される。そこで，PCをターゲットにしたワクチンの有用性を証明することを目的として，SpnおよびNTHiにおけるPCの発現，さらにこれら細菌の上皮細胞への接着や細胞内侵入におけるPCの関与について検討した。

【材料及び方法】

①細菌とそのPC発現

Spnは滲出性中耳炎患者の上咽頭由来の16菌株，ATCC株の2菌株，和歌山県立医科大学の保富先生から提供していただいた5菌株，鹿児島大学の西先生から提供していただいた4菌株合計27菌株を使用し，NTHiは滲出性中耳炎患者の上咽頭由来の18菌株，西先生から提供していただいた4菌株合計22菌株を使用し，PCの発現はFACSを用いて測定した。

②培養細胞とそのPAF-R発現

*in vitro*の系ではヒト咽頭癌由来のDetroit 562細胞，in *vivo*の系では生後6週齢の雌性BALB/cマウスを使用し，Detroit 562細胞のPAF-Rの発現はFACSを用いて確認した。

③細菌の接着および細胞内侵入

*in vitro*の系では接着もしくは細胞内侵入した細菌数をコロニー数で判定し，in *vivo*の系では鼻腔粘膜を採取し，それに含まれる細菌のコロニー数で評価した。

④接着と細胞内侵入の阻害

細菌に発現しているPCを阻害するために抗PC-IgA（TEPC-15）を使用し，細胞の

PAF-R を阻害するために PAF-R 拮抗薬（ABT-491）または PC-KLH を使用した。

【結　果】

① PC の発現強度と細菌接着

Spn，NTHi の PC 発現は各菌株で異なっており，Spn と NTHi ともに PC の発現と細菌接着数は正の相関を認めた。また，Spn，NTHi それぞれの全菌株の mean fluorescene intensity（MFI）の中央値で PC 高発現株と PC 低発現株に分類し検討し，以下の検討を行った。

② PAF-R の発現

Detroit 562 cells の PAF-R 発現は iso-type control と比較して有意に発現が高かった。

③細菌接着における抗 PC-IgA，PAF-R 拮抗薬，PC-KLH の作用（*in vitro, in vivo*）

Spn と NTHi の PC 高発現株では，抗 PC-IgA，PAF-R 拮抗薬，PC-KLH で処理することで細菌接着が有意に抑制されたが，PC 低発現株では抑制されなかった。

④細胞内侵入における抗 PC-IgA，PAF-R 拮抗薬，PC-KLH の作用（*in vitro*）

細菌接着と同様に NTHi の PC 高発現株では，抗 PC-IgA，PAF-R 拮抗薬，PC-KLH で処理することで細胞内侵入が有意に抑制されたが，PC 低発現株では抑制されなかった。

【結論及び考察】

Spn および NTHi の PC 発現は各菌株で異なるが，その培養上皮細胞への接着性はともに PC 依存性に増加した。Spn および NTHi の接着性は病原性と関連することが知られており，病原性が高い細菌ほど PC の発現が強く，上皮細胞への接着性も強いと考えられる。さらに，細菌に発現している PC を抗 PC-IgA で処理すると，PC 高発現株の Spn および NTHi が細胞へ接着することが有意に抑制された。つまり，PC の発現が高く病原性が高い細菌のみが抗 PC-IgA によって細胞への接着が阻害されると考えられる。一方，PC 低発現株は抗 PC-IgA で処理しても接着が抑制されなかった。また，PC 高発現株でも抗 PC-IgA で完全に接着が阻止されないことから，細菌の接着には PC 以外の表面タンパクや線毛などの接着因子も関与するが，PC 高発現株では，その影響が少ないと推測される。今回使用した Detroit 562 細胞には PAF-R が発現し，これを PAF-R 拮抗薬や PC-KLH で処理すると，PC 高発現株では細胞への接着が有意に抑制され，PC 低発現株では抑制されなかった。さらに，*in vivo* でも同様の結果が得られた。細菌の細胞内侵入は NTHi のみで観察され，PC 高発現株のみが細菌および細胞の処理によって侵入が抑制された。この結果は，接着する細菌数が減少しそれに伴って細胞内に侵入する細菌も減少したことによるものと推測される。また，口腔内常在菌の PC

発現は，Spn および NTHi より低かった。以上のことから，Spn および NTHi の細菌接着や細胞内侵入に PC の発現が関与し，さらにその発現が高い細菌は病原性が強いことが示唆される。すなわち，PC をターゲットとしたワクチンは病原性が高い Spn および NTHi に有効であり，口腔内常在菌などの PC 発現そして病原性が低い細菌には影響を与えず，安全であると考えられる。

（Auris Nasus Larynx　46 ; 513-519　2019　掲載）

鹿児島フォーラムと黒野祐一教授

耳鼻咽喉科田上クリニック　伊　東　祐　久

黒野祐一教授におかれては教授就任以来，日頃より私ども開業医にも医会にも心を寄せて頂き，暖かくご指導ご鞭撻頂きましたことを心より感謝申し上げます。

黒野教授との一番の思い出は何と言っても平成27年（2015年）の「鹿児島フォーラム2015」です。当時，私は，今では解散していますが，特定非営利活動法人（NPO）日本耳鼻咽喉科医会（日耳鼻医会と略す）の理事長を拝命していました。前身は昭和42年（1967年）に，耳鼻科処置点数減点問題が発端となって，全国の耳鼻科医会が集まって設立された日本耳鼻咽喉科医会連合会（医連と略す）です。処置点数問題が解決された後，昭和50年（1975年）から，耳鼻科開業医の研鑽と懇親を目的とし，職員家族にも開かれた臨床家フォーラム（フォーラムと略す）が始まりました。

フォーラムは医連に加入している都府県耳鼻科医会が持ち回りで担当して全国各地でほぼ毎年開催されていました。当初は学会の協力も頂き，多くの教授にも講師になって頂き，中身の濃いフォーラムが行われてきましたが，ある時より学会と医連の良好な関係が断たれてしまい，フォーラムへの協力も頂けず，以後医連は独自の活動を続けないといけなくなりましました。ただ地域医療の充実発展の為には他科と同様，学会との良好な関係が必要であり，関係改善が大きな課題でした。平成13年（2001年）に医連はNPO 日耳鼻医会となりましたが，その後も学会との関係は改善を見ることなく時間が過ぎてしまいました。また退会する医会も多く出て，胸を張って「全国組織です」とは言えない状態になってしまいました。

平成24年（2012年）６月より私は日耳鼻医会理事長に就任しましたが，鹿児島でのフォーラムを是非にという理事会の強い要望もあり，平成27年（2015年）に第40回となるフォーラムを鹿児島で行う事を引き受けました。引き受けたものの，全国規模のフォーラムを行うには，県耳鼻科医会だけの力だけは無理で，どうしても大学の協力が必要でした。私なりに素案を造り，県耳鼻科医会会長，顧問の承諾を頂いた後に，黒野教授にフォーラムへの協力をお願い致しました。

黒野教授に，医連から日耳鼻医会へ移行した事，学会との関係が修復できない事，フォーラムに対して学会の協力を貰えず，教授に講師をお願い出来なかったこと等を申し上げて，是非とも鹿児島でフォーラムを行いたいので教授のお力を貸して頂きたいとお願い致しました。

黒野教授もこれまでの経緯は良くご存じで，地域医療の充実には学会と医会が両輪で

なければならないと思われていたのでしょう。快く協力することをお引き受け頂き，また講演も引き受けて頂きました。この時の喜びは天にも昇るような気持ちでした。大学の教授がフォーラムの講師を引き受けて頂くことは，実に約30年ぶりという画期的な出来事でした。同年７月全国から200名余の参加があり，フォーラムは好評盛会裡に終わる事ができました。翌年の第41回中四国フォーラムでも山口大学の山下教授も講師になって頂いています。

学会理事長の森山寛先生も，地域医療の充実には学会だけでなく，改めて名実ともに全国組織の耳鼻科医会が必要ということで，平成28年（2016年）７月に「医会全般に関するWG」を立ち上げられ，当時日耳鼻医会理事長だった私もそのメンバーに加えて頂きました。それを踏まえて平成29年12月（2017年）NPO日耳鼻医会は解散，昨年９月には全国耳鼻咽喉科医会が，そして本年令和２年（2020年）４月一般社団法人日本臨床耳鼻咽喉科医会が設立されました。黒野教授の鹿児島フォーラムへのご理解とご協力が，この全国組織の耳鼻科医会設立への足掛かりとなったといっても過言ではありません。本当に有り難く心より感謝しております。

黒野教授の，専門医講習会，総会，宿題報告などなど枚挙にいとまないその精力的なご活動ご活躍には感嘆するばかりで心より敬意を表しますとともに，まだまだご活躍して頂きたいと思っております。退官後も変わらず私どもをご指導ご鞭撻頂きますようお願い申し上げます。

黒野祐一教授　御退官に寄せて

せんだい耳鼻咽喉科　内　薗　明　裕

私は，1983年昭和58年に，故　大山勝先生の教室に入局し，同時に大学院生という肩書きで診療と研究生活を始めました。そのときすでに，黒野先生は，大分医科大学の茂木先生の教室に出ておられ，直接のご指導を受ける機会はありませんでした。

日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会が，まだ，耳鼻咽喉科アレルギー研究会だった頃，東京の砂防会館で開催されていました。まだ，１年目で，初めて演題を出して発表した際に，フロアから難しい質問が飛んで，壇上でたじたじになった私に助け船を出して下さったのが黒野先生でした。大山先生は，他の会議に出席のためにすでに会場を後にされていたので，とてもありがたかったのを思い出します。同門の後輩が立ち往生しているのを見るに見かねてのことだったと思いますが，発表者の私よりも内容を深く理解されていた事に，感銘し，我ながら不明を恥じる思いでした。

その後も，直接，間接に研究という仕事の厳しさを，ことあるごとに教えていただいたように思います。

よもやの新型コロナウイルスのせいで，締めの行事がいくつか延期となってしまいましたが，日耳鼻総会，総会宿題報告，専門医講習会，鼻科学会，頭頸部腫瘍学会，耳鼻咽喉科臨床学会，耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会，耳鼻咽喉科感染症研究会などなど主な学会をほぼ網羅的に主催され，医局の先生方のご苦労も含めて深く敬意を表したいと思います。今後のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

黒野祐一教授へのお礼のことば

日本医科大学耳鼻咽喉科学　教授
日本医科大学武蔵小杉病院　耳鼻咽喉科　部長　松　根　彰　志

黒野祐一先生が，鹿児島大学の耳鼻咽喉科の教授として，大分医科大学（現，大分大学医学部）から赴任，着任されたのは，1997年11月１日でした。1984年に鹿児島大学医学部を卒業し大学院生として耳鼻咽喉科に入局した私にとっては，医局員生活14年目で助手（現，助教）をしていました。年齢も38歳でそろそろ郷里の大阪に帰って地元の病院に勤務しながら開業の準備をはじめてもおかしくない時期でした。その後，結局，2011年３月まで，黒野教授のもと鹿児島大学耳鼻咽喉科に在籍することになりました。2011年４月に日本医科大学に移動するまでの13年半，黒野教授には直接熱くご指導いた

だいきました。思い出深いことは，多々ありますが，①アレルギー性鼻炎，②日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会主催，③ゴルフをキーワードにお礼申し上げます。

私は大学院生で入局した際，当時の大山　勝教授から，副鼻腔炎の病態研究に関するテーマをいただき，その後13年半，副鼻腔炎の病態研究と内視鏡手術などの診療を中心にご指導をしていただきました。現在では考えられないことですが，当時は，同じ鼻科学でも副鼻腔炎の世界とアレルギー性鼻炎の世界は別といった感じで，たまにアレルギー性鼻炎の研究会などに出席するといつもとは違う先生にお会いできるといった感じでした。黒野教授が着任されてからは，アレルギー性鼻炎のみならず広くアレルギー・免疫の勉強をする機会を数多くいただき，私の鼻科学の学問や診療の幅を広げることができたと思い感謝しています。また，黒野教授が初めて会長として主催された全国学会である，第21回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会（2003年）の事務局の責任者を担当させていただきました。その後いくつかの全国学会の主催事務局の責任者をさせていただきましたが，それまで，学会というと演題を持って参加するのみで，学会主催の大変さやプログラムを組む際に気を遣うことなども多々経験させていただき，その後の様々な学会活動に役立つ貴重な機会となりました。ところで，黒野教授は，武道，自転車やワインなど多彩な趣味をお持ちでしたが，ゴルフコンペで何度か同じ組でラウンドさせていただく機会がありました。大変安定した良いスコアでいつもまわられていたと記憶していますが，ティーグラウンドからグリーン，カップまで，ぶれることの無いフォームで正確にきっちりとスイングしておられた印象が強いです。まさに，研究や手術も含めた診療の姿勢がそのままプレースタイルになっているように思われ，感心して拝見していました。私の場合は全く逆で，クラブを振りますだけの出たとこ勝負のようなプレースタイルで，打ってみないとわからない，行き先はボールに聞いてくれといった感じでしたのでなおさらでした。今でもたまに当地の医会の先生方と18ホール回ることがありますが，まったく進歩がありませません。

私も昨年還暦を迎え，現役の大学人としては長くてあと５年にも満たない時間を残すのみとなっています。鹿児島大学時代に黒野教授にご指導いただい事，見せていただいた事を糧として，職責を全うできるよう努力したいと思います。黒野祐一先生，大変お疲れ様でした。そして，多々ご指導いただき有り難うございました。今後の益々の御活躍をお祈り申し上げます。

この22年

国立病院機構鹿児島医療センター　松　崎　　勉

月日の経つのは早いもので，黒野祐一教授が平成９年11月に就任されて22年余り経過しました。この間，教室の運営や学会活動，地域医療へのご尽力等精力的にご活躍され定年退官されることにお慶び申し上げますとともにこの誌面を借りて心から感謝申し上げます。

さて，私は大山　勝教授の御指導を受け，頭頸部がん診療を臨床テーマとしておりました。久留米大学形成外科（田井良明教授）の下へ国内留学し，形成外科的手技も学び，何とか頭頸部がん診療において少し自信がつきだしたのが，平成９年ごろだったと思います。当時，教室の同僚たちと長時間の再建手術などを必死にやっていたことが懐かしく思い出されます。丁度その頃，教室の先輩でもある黒野教授を上司としてお迎えすることになりました。大分に在籍されていた頃から学会や研究会等でお会いする機会がありましたが，臨床や研究に対する真摯な姿勢に学びたいと思っておりました。赴任されてから，術前・術後のカンファレンス等で多くのご指導をいただき，平成11年８月，さらに今まで蓄えた臨床の力を試す機会として当時の南九州中央病院で，勝田兼司先生の下で働く機会を与えられました。その後，５年間，症例数も多く，日夜休む間もなく臨床に没頭でき，コメディカルのサポートでとても充実した時間を過ごすことができました。

その後，諸事情で１年７カ月，郷里の霧島市医師会医療センターで働きましたが，やはり，頭頸部がん治療を中心とした診療をやりたい気持ちがあり，中村一彦院長や黒野教授のお力で名称も変わった鹿児島医療センターに復帰できました。それから14年間，頭頸部がんの臨床に継続しながら，緩和ケアをはじめとするがん治療における支持療法に積極的にかかわることができたのも，医局からの人的サポートを頂けたことが大きい要因でした。

黒野教授が就任されて，この22年間，医局運営を行う中で最も苦労されたことは，初期臨床研修医制度が始まり，地方大学での耳鼻咽喉科医の確保ということではないでしょうか。地域の耳鼻咽喉科医療の維持に大変なご苦労をされてきたと思います。私共，基幹病院では，学生の臨床実習（ポリクリ）で週１回教育する機会を与えられ，また，初期研修医の研修を担う立場でもありましたが，思うように教室員が増えないことは，私共の力量不足で忸怩たる思いでした。幸い，ここ数年，新入医局員も確保できており，これまでの黒野教授のご苦労が報われてきつつあるのかと思います。

黒野先生，本当に長い間ご苦労様でした。有難うございました。

黒野祐一教授の御退官に寄せて

医療法人エターナルふくいわ耳鼻咽喉科クリニック　福　岩　達　哉

黒野祐一先生におかれましては，23年間にわたる教授の任期を終えられ，無事御退官を迎えられましたことに対し，心よりお祝い申し上げます。また永年，私達門下生をご指導頂いたことに深く御礼申し上げます。

私が鹿児島大学耳鼻咽喉科学教室に入局して３年目の1997年，黒野先生が教授に御就任されました。当時私は大学院生であり，秋山伸一教授（当時）が主宰する鹿児島大学腫瘍研究施設にて1996年から血管新生因子・チミジンホスホリラーゼ（TP）の研究を行っていました。日中は病棟と手術室での研修医業務，夜間と休日は研究室で免疫組織化学の実験を行う日々であり，当時は若さに任せた体力だけを武器に，やみくもに研究へ没頭していたことを思い出します。実験室から医局に戻る頃は既に深夜で，誰もいないことが常だったのですが，黒野先生の教授就任以降，驚くべきことに教授室だけはいつも煌々と灯りが灯っておりました。午前１時過ぎにもかかわらず，さながら早朝カンファレンス時のような高いテンションで「おう，頑張っているか！」といつもお声をかけて頂き，とてつもなくパワフルな教授がこられたものだと，日々驚きの連続でした。

夜中でも，さらには休日でも灯り続ける教授室の灯りは，私にとって無言の御指導でした。ともすればくじけてしまいそうな時でも，あの灯りを見る度に「教授がこんな遅くまで頑張っておられるのに，若手の自分が怠けてどうする」と自責の念に駆られ，歯を食いしばって海外論文を読みふけったことなど，本当に懐かしく思い出されます。

その甲斐あって研究が何とかまとまり，1999年２月にアメリカ癌学会会誌「CANCER」への論文掲載が叶いました。大学院も無事卒業して学位を取得できました。その後の研究について黒野先生へご相談させて頂いたところ，教授のご専門である「粘膜免疫」の研究をお勧め頂きました。マウスの鼻へ粘膜ワクチンを経鼻投与した後，各種臓器から免疫細胞を採取して様々な手技により解析するという実験系です。

私にとっては全く未知の分野で，まずマウスの飼育から学ばねばならなかったのですが，黒野先生自ら動物舎へ赴き，当時大学院生だった福山聡先生と共に手取り足取り御指導して下さいました。マウスへのワクチン投与方法に始まり，生体からの組織採取方法，そこから細胞を分離してのELISPOT法，さらにマウスから採血してELISA法による解析など，粘膜免疫の基礎的実験方法をとても丁寧に伝授して頂きました。マウスの実験は生きた細胞を扱うため途中で止めることができず，日曜日の朝６時に開始する

と同日深夜まで休みなしであり，はじめて黒野先生の実験姿を拝見した時はその手際の良さと集中力に驚かされました。改めて何とパワフルな教授だろうと感嘆することしきりでした。

実験の合間に昼食をとるため出前を頼むよう御指示頂いた際，不慣れな私は何も考えずに馴染みの店からラーメンの出前を取りました。しかし当然ゆっくり食事する時間など取れるはずもなく，組織採取が一段落してようやく空き時間ができた時には，ラーメンはすっかりのびてしまいスープも麺に吸われてほぼ無くなった状態でした。大失敗に背筋が凍る思いでしたが，しかし先生は怒ることなく「次からラーメンだけは勘弁して欲しいなあ」とニヤニヤ笑いながら，のびたラーメンを私達と一緒に食べて下さいました。赴任したばかりの教授が，休日に私達のような若手とのびたラーメンをすすりつつ深夜まで実験に取り組むお姿は，今でも忘れることができません。先生の研究に対する真摯な思いと部下への思いやりがあってこそのエピソードだと思います。

私が耳鼻咽喉科学教室へ入局した理由は，頭頸部腫瘍の外科的治療と再建手術を学ぶためでした。腫瘍研究施設での研究も腫瘍の基礎を学び臨床へ役立てたいとの思いからでした。研修医時代から大学院での研究と並行して，耳鼻咽喉科手術の臨床研修も幅広く取り組ませて頂きました。黒野先生は前任の大分医科大学（現・大分大学医学部）耳鼻咽喉科学教室において頭頸部腫瘍手術を御専門とされており，教授就任直後から積極的に手術も執刀されました。腫瘍切除はもとより，遊離皮弁の採取，マイクロサージェリーによる皮弁移植など再建手術まですべて一人で執刀されるお姿を初めて拝見したときは，改めて凄い教授が赴任されたものだと驚きました。粘膜免疫に関する数多くの研究業績のみならず，頭頸部外科医としての高い技術と経験をも併せ持つ黒野先生は「研究と臨床の二刀流」を体現されており，まさに私が目指す医師像そのものでした。

頭頸部外科医を目指したいとの思いを強く抱きながら，日々臨床と研究に取り組んでおりましたところ，黒野先生より癌研究会付属病院での頭頸部外科研修をお勧め頂きました。同院頭頚科部長の鎌田信悦先生（当時）と黒野先生とのご高配により，2000年１月から３か月間の頭頸部外科研修を行うことが出来ました。黒野先生就任後３年目で医局員も少なく，医局運営が厳しかった時でしたが，それでも敢えて学外研修に出させて頂いたことに深く感謝しながら，限られた研修期間を最大限に使うべく必死で過ごした３か月でした。ここで得られた経験は，その後の臨床における大きな武器となりました。

そして癌研病院での研修後は，鹿児島大学にて再建外科を担当させて頂くこととなりました。遊離皮弁採取の研修から始まり，皮弁移植，微小血管吻合といった一連の手技を，黒野先生に直接ご指導頂きました。教授が頭頸部がんの御専門であったこともあり手術症例がどんどん増えていた時代で，連日深夜までの長時間手術が続きました。

黒野先生も教授室と手術室を往復する日々であり，日中は外来診療・学生講義もこなしつつ，その合間に教授会はじめ数多くの会議に出席して医学部運営に御尽力され，さらには科学研究費獲得に向けて粘膜免疫の実験計画までたてるという，信じられないほどの御多忙ぶりでした。しかも驚くべきことに，そんな生活の中でも夜９時から10時までの１時間，大学近郊のスポーツジムにてみっちり泳いでトレーニングしつつ，また医局に戻って深夜まで仕事するという，とんでもない荒業を行っておられました。ニヤッと笑いながら「おもいっきり泳いでリフレッシュすると頭が冴えて，どんどん仕事がはかどるんだよね」と仰られるお姿を拝見した時は，その底知れぬ体力とモチベーションの高さに驚愕することしきりでした。

黒野先生の背中を追いかけながら，臨床面では頭頸部がん手術，研究面では経鼻粘膜実験を行う日々が続きました。2001年から病棟医長を担当し，2003年から医局長に御指名頂き，医局運営業務にも携わることとなりました。私の未熟さゆえに仕事が山積みとなり，途方に暮れることもしばしばあったのですが，黒野先生はどんな時でもお変わりなくエネルギッシュで，いつものようにニヤッと笑いながら「僕ら（前任の）大分では当時医局員が５人しかいなくて教授も当直するくらいだったけど，今よりも沢山手術してたし論文ももっと書いてたよねー」と仰られました。そのお話を伺う度に「大分時代の黒野先生に負けないように頑張りたい」と自身へ気合を注入していたものです。

2004年５月から黒野先生のご高配を賜りまして米国アラバマ大学バーミングハム校（UAB）免疫ワクチンセンターへ博士研究員として赴任いたしました。ここは黒野先生が大分医科大学時代に留学された研究室であり，藤橋浩太郎教授（現・東京大学特任教授）の下で粘膜免疫の研究をさせて頂きました。経鼻免疫ワクチンを賦活化させるDNA アジュバントの研究であり，これまで以上に専門的な知識と技術が要求されることから，当初は期待と不安が入り乱れてとても心配していました。しかしそんな不安を打ち消すかの如く，渡米前に黒野先生から「焦らずに，まずは健康第一で，家族を大切にしなさい」と優しいお気遣いを賜り，非常に感激したことを思い出します。また渡米後は藤橋教授より大変ご丁寧なご指導とお気遣いを賜り，おかげさまで充実した研究生活を送ることが出来ました。研究室の秘書 Sheila はじめスタッフも黒野先生をよく覚えておられ，「Yuichi の部下だね，よろしく！」とフレンドリーに接して頂きました。さらに研究室には黒野先生が御留学時のお写真も貼られたままで，UAB における先生の存在感をまざまざと見せつけられました。黒野先生の明るいご性格とお人柄，そして研究に対する強い情熱が，UAB のスタッフに深く受け入れられていた証拠だと思います。

黒野先生は常々「いつも探求心を忘れずに科学する心を持ち続けなければならない」と仰っていました。そのためにはただ単に日々の診療をこなすだけでなく，治療成績をまとめて論文として発表し，医学の発展に貢献しなければならないと，厳しくご指導なさっていました。私は2005年９月に帰国しましたが，以後再び頭頸部がんの手術に取り組むと共に粘膜ワクチンの研究を継続することとなりました。忙しい日々が続きましたが，黒野先生の教えに少しでも応えたいとの一心で，とにかくがむしゃらに働いていたように思います。臨床面では再建手術時におけるマイクロサージェリーの手術成績に関するデータをまとめ，2007年に論文を発表することが出来ました（AURIS NASUS LARYNX, 2008）。一方粘膜免疫の研究に関してはなかなか成果がまとまらず，帰国後3年がかりでようやく論文を発表することが出来ました（Vaccine, 2008）。無事に論文が受理され掲載が決まったことを黒野先生にご報告しますと，いつものようにニヤッと笑いながら「いやー長かったねぇ。でも本当にお疲れ様！」とお褒めの言葉を頂きまして，この時は心から安堵したことを覚えております。

私は医局長と大学講師の地位をお与えいただき，その後ますます邁進しようと思っておりましたが，残念ながら健康上の理由によりまして2008年に大学を退職することとなりました。最後は黒野先生が盛大な送別会を開催くださいまして，さらに記念の色紙を賜りました。先生からの御言葉は「Be scientist」と書かれており，この一言にこれまでの教えが全て集約されているような，まさに私にとって最大の金言となりました。

退職後は生まれ故郷の南さつま市で開業して耳鼻咽喉科医を続けることとなりました。基礎的研究とは縁のない生活となりましたが，黒野先生から頂いたお言葉「Be scientist」をいつも忘れずに，今でも細々ではありますが臨床研究を続けております。2010年には第34回日本医用エアロゾル研究会におけるシンポジウム「エアロゾル療法有効性の検証」にて，開業医の立場からシンポジストを務めさせて頂きました。また2018年には第119回日本耳鼻咽喉科学会総会において黒野先生が宿題報告「上気道炎症の粘膜ワクチンによる制御」をご講演されましたが，同名の冊子を発刊するにあたり，「第３章・経鼻免疫とワクチン」の一部分を分担させて頂きました。退局して開業した身でありながら，このような素晴らしい研究発表に少しでも貢献することが出来て本当に嬉しかったです。教授からのお声がけには今でも心から感謝しております。

黒野先生は医療に対していつも真摯に向き合い，さらに科学者としての目線で常に新しいことを探求されておられました。私達医局員にとっては正直大変厳しい師匠でしたが，それはすなわち黒野先生の熱い情熱と強い想いの裏返しであったのだろうと思います。いつも深夜まで灯っていた教授室の灯りは，先生御自身がまさに先頭に立って私達

を導かんとされていた証であったと，今改めて思い返しております。

「黒野教室」で叩き込まれた「常に科学する心」は，地域医療の最前線にあっても常に忘れず持ち続けております。どんな些細な症状も見逃さず，そこに隠れた病気を見抜き，すべての患者さんの健康に貢献すること，そのためには「Be scientist」の精神が不可欠であると思っています。

退職時に頂いた色紙は診療所の院長室に飾っております。出勤時に眺めては気を引き締め診療に臨み，診療後の疲れた時に眺めては，先生が時々お見せになる「ニヤニヤ笑い」を思い出し，くすりと笑ってリラックスしています。のびたラーメンの味は今でも忘れません。

最後になりますが，黒野先生の長年にわたるご功績に対し，改めて衷心より敬意を表しますとともに，先生をはじめご家族皆様の益々のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。

第19回環太平洋外科学会にて（2002年，ホノルル・ハワイ）

XII. 医局通信

1. 新入局員紹介

徳　重　豪　士

この度入局させていただくことになった徳重豪士と申します。

鹿児島大学を卒業し，市立病院で２年間初期研修を行いました。

市立病院の耳鼻咽喉科で研修した際，手術の多様性や奥深さに興味を持ち入局を決心しました。

一人前になるまでの道のりは険しく，ご迷惑をお掛けすることも多々あるかと思いますが，ご指導の程宜しくお願い致します。

原　口　めぐみ

この度，４月より入局させていただく原口めぐみと申します。原稿を書いている４月２週目になって，医局から見下ろせる大学構内の桜が満開に咲いています。

私は，鹿児島市出身で鶴丸高校，鹿児島大学を卒業しました。大学在学時は軽音楽部に所属しておりました。（最近は外科系には体力が必要だと強く感じたためピラティスを始めました。）

医学部に入学後，具体的な進路は漠然としておりましたが，幼い頃より父の影響で「ジビカ」という響きはとても身近な存在であったのと，初期研修中に，内科・外科の双方のアプローチが出来る診療科に魅力を感じ，当科に進むことに決めました。入局後は，耳鼻科領域の範囲の広さ，専門性の高さに憧れた分，知識や手技の獲得に四苦八苦しておりますが，先輩方や同期のお蔭で充実した日々を過ごさせて頂いています。少しでもどなたかの役に立てるように耳鼻科研修を着実に進めていきたいです。

ご迷惑をおかけすると思いますがご指導・ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

安　藤　由　実

新入局員の安藤由実と申します。

福岡県久留米市の出身で同市の県立明善高校を卒業後，鹿児島大学に入学しました。今年で鹿児島歴９年目になり，今ではすっかり鹿児島のイントネーションで患者さんと会話しております。

幼少期から刺繍やビーズといった長時間の細かい作業が好きで，学生時代に頭頸部癌の手術をみて自分の性に合っているかもしれないと感じたことが，耳鼻科に興

味を持ったきっかけでした。研修医として回った際には複雑な解剖が理解できず，耳鼻科医として働けるか不安になりましたが，それ以上に手術をしたいという気持ちが強かったため入局を決めました。カーナビを見ていても道に迷うほどの方向音痴ですが，耳鼻科医という道の選択は間違っていないと信じて日々精進して参りたいと思います。ご指導，ご鞭撻の程，宜しくお願い致します。

2．医局人事（令和２年５月現在）

教　　授　　山下　勝
講　　師　　大堀純一郎，永野広海
助　　教　　原田みずえ，宮下圭一，川畠雅樹，井内寛之
医　　員　　間世田佳子，宮本佑美，伊東小都子，久徳貴之，田淵みな子
　　松崎尚寛，有本一華，安藤由実，原口めぐみ

医 局 長　　川畠雅樹
外来医長　　原田みずえ
病棟医長　　大堀純一郎

関連病院（令和２年５月現在）

鹿児島医療センター	西元謙吾，喜山敏志，徳重豪士
鹿児島市立病院	高木　実，馬越瑞夫
国立療養所星塚敬愛園	宮之原郁代
藤元総合病院	森園健介
あまたつクリニック	松元隼人
鹿児島厚生連病院	牧瀬高穂

3．学会報告

第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

宮　下　圭　一

2019年５月８日（水）から５月11日（土）までの４日間，当教室主催により，大阪国際会議場（グランキューブ大阪）で開催されました。本学会を会長の所在地以外の都市で初開催となると同時に，令和に改元後初めて開催された記念すべき学会でした。３年前から準備に取り掛かり，同門会の先生方にも多大なご協力を頂きながら，成功裡に終えることができました。あらためて御礼申し上げます。

主催ということもあり，当教室の先生方からも多数の発表を頂きました。以下に発表された先生方を記します（敬称略）。

学術講演

「扁桃周囲膿瘍の病態と治療のエビデンス」黒野祐一

シンポジウム

「耳鼻咽喉科医として働く女と男の本音と建て前」＜日耳鼻企画＞宮之原郁代

「耳鼻咽喉科領域のワクチン研究最前線」＜日耳鼻企画＞大堀純一郎

一般演題

「推定体重 240kg，BMI 81.1 の高度肥満患者に対する気管切開術の経験」積山幸祐

「IgA 腎症におけるホスホリルコリン特異的免疫応答の意義」大堀純一郎

「高気圧酸素療法を施行しなかった突発性難聴症例の検討」永野広海

「局所進行の舌下腺腺様嚢胞癌に対してセツキシマブ併用放射線治療を行った１例」宮下圭一

「若年性甲状腺癌５例の臨床的検討」川畠雅樹

「嚥下障害および呼吸困難を来した強直性脊椎骨増殖症の一例」牧瀬高穂

「黄色ブドウ球菌およびレンサ球菌の上皮細胞接着に対するホスホリルコリン重合体の阻害効果」井内寛之

「マウス経鼻免疫における結合性ホスホリルコリン化合物（リピジュアシリーズ）の粘膜アジュバント効果の検討」地村友宏

「顔面打撲による眼瞼腫脹が疑われた小児ランゲルハンス組織球症の一例」宮本佑美

「耳下腺内に発生した黄色肉芽腫の２症例」伊東小都子

「上咽頭に転移した腎細胞癌の一例」松元隼人

会員懇親会に先立ち，霧島市の指定民族芸能無形文化財である和太鼓を使った「霧島九面太鼓保存会 和奏（わかな）」の皆さんにライブ演奏をして頂きました。お面（天孫降臨の神話に登場する９人の神様）をつけて和太鼓を演奏する姿がとても印象的でした。

黒牛日本

日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会
The 120th Annual Meeting of the ORL Society of Japan

感謝状
鹿児島大学 教授
黒野祐一 殿
貴方は令和元年五月一般社団法人日本耳鼻咽喉科学会第百二十回学術講演会
なる会長として その運営に尽力され斯学の
発展に寄与すること多大でありました
ここに記念盾を贈呈しその労に対し
謹全感謝の意を表します
令和元年五月吉日
一般社団法人日本耳鼻咽喉科学会
理事長 赤山 寛

第14回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

田　淵　みな子

平成31年５月23日～24日に，九州大学耳鼻咽喉科主催で福岡県の福岡国際会議場で開催された「第14回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会」に参加いたしました。黒野先生は，５月23日の一般演題第７群一般・アレルギーの座長を担当されました。私は，一般演題で「当科における小児突発性難聴４例の検討」というタイトルで発表を行いました。２日目のみの参加でしたが，シンポジウムは小児の摂食・嚥下障害に対する診療連携や気道異物についてなど，日常診療に役立つ内容で大変勉強になりました。教育セミナーは九州大学病院臨床遺伝医療部の小川昌宣先生の「最近の出生前診断の変化と多様化する倫理的課題」を聴講いたしました。出生前診断の登場に伴って生じてきた問題や検査を受けた方々の葛藤，カウンセリングの重要さについて考えることができ，大変有意義な時間を過ごすことができました。会場では久々に，九大に所属していたころの同期や先輩の先生方と再開し，楽しい時間を過ごすことができました。参加させて頂いたことに感謝いたします。ありがとうございました。

第43回日本頭頸部癌学会

伊　東　小都子

令和元年６月13日から15日まで金沢市ホテル日航金沢で行われました。大学からは３名参加し，川畠先生は「後期高齢者喉頭癌症例の臨床的特徴についての検討」，井内先生は「Inflammation based prognostic score を用いた下咽頭癌の予後予測因子の検討」，伊東は「若年に発症した外耳道耳垢腺癌の１例」の演題で発表しました。６月12日からの教育セミナーから参加させていただき，舌癌における術前画像診断についての講演は特に興味深く拝聴しました。ひがし茶屋街で小京都と呼ばれる金沢を堪能し，夜は近江町市場でのどぐろと日本酒を味わう充実した学会でした。

第81回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会

松　元　隼　人

2019年６月27日～28日に名古屋（愛知医科大学：植田広海教授）で開催されました。当教室からは馬越先生，松元が演題提出いたしました。馬越先生は「頭頸部癌治療中に非閉塞性腸間膜虚血を発症した２症例」を発表されました。当科病棟にて比較的短期間に非閉塞性腸間膜虚血の症例を立て続けに認めたため，馬越先生の講演にも熱が入っていらっしゃいました。発症リスク等について活発な質問がなされ，聴講者としても有意義な体験をすることができました。松元は「診断に苦慮した異所性小唾液腺の１例」を発表し，聴講された先生方に，症例についての新たな知見を教えていただくことができました。

黒野教授は学会２日目に「耳鼻咽喉科領域における感染症治療の留意点～急性喉頭蓋炎・扁桃周囲膿瘍を中心に～」をご講演されました。問題点をわかりやすくお話しいただき，日常診療にすぐ役立つ貴重なご講演でした。他には信州大の宇佐美先生の「急性感音難聴 up to date」や，愛媛大学の羽藤先生の「顔面神経麻痺の最新治療」等を受講しました。とても有益な学会で，参加させていただいたことに感謝いたします。

また，愛知県の文化に触れ，名古屋コーチンのおいしさや，台湾ラーメンの辛さを堪能できたことも，併せて有益でありました。ありがとうございました。

第34回　日耳鼻九州連合地方部会学術講演会

藤　原　義　宜

第34回日耳鼻九州連合地方部会学術講演会が７月13，14日に福岡市で開催されました。当教室からは喜山先生が「当科における経口的咽喉頭部分切除術（TOVS）症例の現状と問題点」，私が「切開排膿が無効であった扁桃周囲膿瘍の検討」の演題名で発表させて頂きました。私にとっては初めての学会発表となり非常に良い経験となりましたし，各大学の多くの若い先生方が様々な演題で発表されているのをみて，これから研究し学会発表を続けていく上での良い刺激となりました。本講演会に際して野球大会が行われるのが恒例となっておりますが生憎の雨のため中止となり非常に残念でした。代わりに全員で水族館に行き，また夜は福岡の美味しい料理に舌鼓を打ち，よく学びよく遊ぶことができた学会となりました。

第7回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会総会・学術講演会

井　内　寛　之

令和元年９月５日～６日に津市で第７回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会総会・学術講演会が開催されました。大学からは黒野教授，大堀先生，喜山先生，藤原先生，井内が参加しました。大堀先生は「即時扁桃周囲膿瘍の手術手技に関する検討」，喜山先生は「細胞内寄生細菌に対する抗菌薬の効果に関する検討」，藤原先生は「扁桃周囲膿瘍に対する切開排膿の手技と有効性に関する検討」，井内は「ホスホリルコリン重合体のうがい液への応用」で発表しました。ランチョンセミナーで薬剤耐性細菌が増加しており，適切な抗菌薬の使用が必要であることを改めて考えさせられました。松坂牛のお膝元でもあり美味しいお肉をご馳走になりました。

第32回日本口腔・咽頭総会ならびに学術講演会

川　畠　雅　樹

第32回日本口腔・咽頭科学会が令和元年９月12，13日に大分市で開催され，当教室からは黒野教授，大堀先生，井内先生，私の４人が参加致しました。井内先生は「中咽頭癌予後因子としての modified Glasgow prognostic score の有用性について」と題して発表しました。高用量シスプラチン併用放射線治療において，シスプラチンを計画通りに投与する為には栄養状態の管理が重要であることを当科のデータで示しました。私は「耳下腺悪性リンパ腫の臨床的検討」の演題名で発表させて頂きました。切除後に初めて診断がつく耳下腺悪性リンパ腫を時に経験します。それらの症例の特徴について考察しました。さらなる検討を加え，今後の日常診療に活かしていきたいと思います。口腔・咽頭領域は扱う疾患が多岐にわたり，幅広い知見を得る良い機会となりました。大分といえばなんと言っても“鶏天”。同じ九州内でありますが鹿児島から足を運ぶ機会はそれほどなく，学会期間中は勉強だけでなくあらゆる鶏天を堪能することに精をだし，満足することができました。

第29回 日本耳科学会 総会・学術講演会に参加して

2019年10月10日（木）～10月12日（土），山形市

宮之原　郁　代

第29回 日本耳科学会 総会・学術講演会は初秋の山形で開催されました。初日は野村恭也先生の中耳針状鏡管見の特別講演がありました。現在は，デジタル画像処理の発展により，クリアな内視鏡画像を容易に撮影できるのが当たり前の時代ですが，40年前に限られた資材を用いて鼓室内を観察され，息を止めて針状鏡が動かないように，患者が痛がらないようご苦労されながら施行された，というお話をお聞きし大変感動しました。特別講演２ は今回の学会テーマでもある「Original から Standard へ」と題して，工業デザイナーの奥山清行氏の話を聞きました。氏は，イタリアのデザイン会社ピニンファリーナに入社し，その後日本人初の同社チーフデザイナーに就任して，フェラーリ・エンツォフェラーリ，マセラティ・クアトロポルテなどの数多くのカーデザインを担当された著名な方です。イタリアでの苦労話や，現代においてデザインとはどういうことか？など，非常にインフォーマティブで興味深い講演をお聞きすることができました。会場は満席でした。私自身の発表は，翌日金曜日の午前で，その後もいろいろ興味深いセッション，講演もあったのですが，台風19号の影響で帰りの飛行機がすべてキャンセルされてしまい，さらに計画運休で12日（土）の新幹線はすべて運休になることが決定したので，急遽，山形から鹿児島まで，金曜のうちに新幹線で移動することになりました。朝いちの発表を終え，山形を10時すぎの「つばさ」に乗車し，東京で乗り換えました。東京駅は，うねるような人の波でした。元来，列車派というより空旅派で，このような長距離の移動ははじめてでしたので，不安はありましたが，他の選択肢はありませんでした。幸いに，指定席が確保できたので，タブレットで映画をみたり本を読んだり，稲花餅（いがもち：山形の伝統的な和菓子）を食べたりし，疲れ果てるかなと思った旅でしたが，以外と快適に過ごせました。終点の鹿児島中央駅には20時頃到着し，無事に帰宅できたのにはほっとしました。その後の台風19号による大規模な被害をニュースでみるにつけ，鹿児島では子どもの頃から慣れている台風ですが，昨今の気象状況の変化とそれに伴う自然の猛威を再認識しました。2020年は新型コロナウイルスの流行もあり，今後は，「これから先，何がおこるかわからない，想定外のことがあってもフレキシブルに」，という気持ちを持って生きていくことが求められる時代なのかな，と思うことでした。

第58回日本鼻科学会総会および学術講演会

伊　東　小都子

令和元年10月３日から５日まで東京都千代田区の都市センターホテルで開催されました。大学からは黒野教授，宮之原先生，牧瀬先生，地村先生，伊東の５名が参加しました。黒野教授はランチョンセミナーの司会を，宮之原先生はアレルギー性鼻炎のセッションの司会をされており，牧瀬先生は「Bevacizumab 投与後に生じた鼻中隔穿孔例」，地村先生は「結合課ホスホリルコリン化合物（リピジュアシリーズ）の粘膜アジュバント効果」，伊東は「眼窩吹き抜け骨折の術式に関する検討」の演題でそれぞれ発表しました。ポスター発表の場では周りの先生方がとても積極的に発言をされており，時折助言をされている場面も見受けられ，各大学を超えたカンファレンスのような，とても実りある時間となりました。

第71回日本気管食道科学会総会・学術講演会

宮　本　佑　美

「第71回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会」が令和元年11月28，29日に獨協医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科の主催で開催され，当教室からは黒野教授，宮下先生，喜山先生，宮本の４名が参加しました。学会第１日目に「いま求められる気管切開チューブの特性」というテーマで黒野教授が座長をされました。宮下先生は「喉頭に発生した髄外性形質細胞腫の１例」，喜山先生は「経口的咽喉頭部分切除術（TOVS）の問題点」，宮本は「食道入口部狭窄症例の治療経験」というタイトルで口演しました。「安全な気管切開の方法とその管理（成人・小児）」というテーマのシンポジウムでは，日本医療安全調査機構より提言された「気管切開術後早期の気管切開チューブ逸脱・迷入に係る志望事例の分析」の作成背景を知り，耳鼻咽喉科医に求められる役割を再認識しました。会場では，神経性難病にて気管切開後にスピーチカニューレで歌う声楽家の青野浩美さんのコンサートや，育児期に癌の治療をしたアグネス・チャンさんの特別講演を拝聴しました。ライフイベントやキャリア形成時に，抗えない様々な事が起こるのに際し，流動的に，決して妥協せず，柔和に対応する精神をお二人の歌や言葉から感じ心を打たれました。懇親会ではとちおとめの甘味や，宇都宮餃子の食べ比べを楽しみました。会場の宇都宮市は jazz が盛んな街ということで，機会があれば次は jazz スポット巡りをしたいと思います。

第30回　日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会

井　内　寛　之

令和２年１月30日～31日に宜野湾市で第30回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会が開催されました。大学からは黒野教授，井内が参加しました。井内は「喉頭肉芽腫の臨床的検討」で発表しました。治療方法について指摘を受け，今後の臨床に活かしたいです。沖縄での開催でしたが，まだ寒く泡盛とオリオンビールで温まりました。

RHINOWORLD CHICAGO 2019　ISIAN・IRS・ARS 38th International Symposium of Inflammation and Allergy of Nose

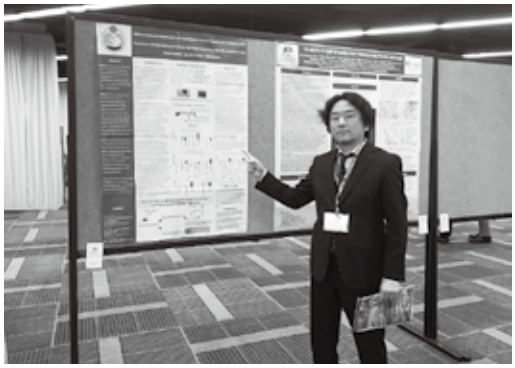
永　野　広　海

『RhinoWorld Chicago 2019』に黒野教授，大堀講師とわたし永野が参加して参りました。

2019年６月５日～９日まで５日間の日程，イリノイ州シカゴで開催されました。羽田発シカゴ行きの ANA 直行便のため移動はさほど苦になりませんでした。空港から市内ホテルまでは，地元の電車で移動しました。シカゴ市は全米きっての大都会であり，20世紀後半まで世界一の高層ビル『Willis Tower』があります。学会の空き時間を利用して，103階のガラス張りの展望台から景色は圧巻でした。

私は『Intranasolacrimal Immunization of Pneumococcal Surface Protein A plus Poly (I:C) in Mice』をポスター発表させて頂きました。会場は，なぜか日本人が多く参加していました。

今後もこのように国際学会に多く参加できるように実験を継続していきたいです。



15th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery

牧　瀬　高　穂

2019年12月６日から二日間，九州大学医学部百年講堂で開催された15th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery に，黒野教授，川畠先生，小生の３名で参加いたしました。国内開催の国際学会でしたが，台湾で話題となっている演題，特に外鼻形成や睡眠障害に対する手術治療（ロボット手術を含む）は日本であまり聞くことのできない内容で，非常に有意義な学会でした。真冬の福岡は大変寒かったですが，台湾の先生方も多数参加し，熱気のこもった学会でした。当時はCOVID-19の蔓延もなく，いつも通りの福岡の街と学会参加者と外国人観光客でした。COVID-19が早く終息し，次回以降も開催されることを切に祈念いたします。

4．関連病院便り

鹿児島医療センター便り

西　元　謙　吾

今年度は元号が平成から令和に時代が移り，世の中は大きな変動につつまれた１年でした。それでも，今年度の鹿児島医療センター耳鼻咽喉科は体制としては大きな変化はなく安定して診療することができています。半年ごとに大学から来ていただいているスタッフが変わり，前半は久徳先生・松崎尚寛先生，後半は馬越先生・松崎尚寛先生が来ていただいて，忙しい中主に病棟業務を担って鹿児島医療センターを支えていただきました。来年度もまた新しい先生に頼っていくこととなりますのでよろしくお願いします。

初期研修医は今年度もぼちぼち耳鼻咽喉科を選択していただきました。令和２年度に鹿児島大学耳鼻咽喉科教室へ入局予定の原口先生，小林先生も研修に回ってきて耳鼻咽喉科の手術に多少なりとも参加していただきました。両先生たちには少しでも医療センターの印象が残っていれば幸いです。

遜信病院との合併と診療科増設もだいぶ板についてきました。むしろ，これまで相談できなかった領域の専門家が近くにいることのメリットは大きいと実感しています。病院の入退院支援の効率化などは当病院で耳鼻咽喉科が先導を切って導入していく予定ですので，他職種とのコミュニケーションを念密にとって行く必要があり，より一層活用していかなくてはいけないと考えています。

平成31・令和元年度の手術症例は歴代最多の手術件数で700件を初めて突破しました。悪性腫瘍に対する拡大切除・再建手術の減少傾向は変わりなく，保存的手術や手術以外の治療選択肢が多くなっているのもここ最近の傾向通りです。これだけ多くの手術を安全に行えたのもひとえに当院のスタッフや信頼して患者を鹿児島医療センターに紹介していただいた先生方のおかげであり，毎年のことながら御礼申し上げます。２月からの新型コロナウイルス感染症蔓延の影響で医療システムも大きく変容していくかもしれません。今できることを精いっぱいやっていくしかないと覚悟を決めて頑張りたいと思います。

手術件数（手術記録にあるもの）

良性疾患

口蓋扁桃摘出術（アデノイド切除術同時手術も含む）	128例
内視鏡下鼻副鼻腔手術（鼻中隔・下鼻甲介同時手術も含む）	両側47例
	片側89例

鼻中隔矯正術・粘膜下下鼻甲介骨切除術	13例
顔面骨骨折整復手術	1例
鼓室形成術（耳小骨再建あり）	12例
鼓室形成術（耳小骨再建なし）・鼓膜形成術	22例
顔面神経管開放術・内耳窓閉鎖術	3例
外耳道良性腫瘍手術・外耳道遺物（複雑）	6例
チューブ留置術・アデノイド切除・先天性耳瘻孔など	16例
耳下腺良性腫瘍摘出術	59例
顎下腺良性摘出術・顎下腺腫瘍摘出術	22例
舌下腺良性摘出術・舌下腺腫瘍摘出術	6例
甲状腺良性腫瘍摘出術	17例
副甲状腺腫瘍摘出術	4例
頸部良性腫瘍・嚢胞摘出術	28例
深頸部膿瘍切開排膿	2例
口腔・咽頭腫瘍など	21例
喉頭直達鏡手術・食道直達鏡手術	77例
その他（気管切開・リンパ節摘出術・皮弁形成術など）	68例
	643例

悪性疾患

頭頸部悪性腫瘍手術（遊離皮弁による再建術あり：口腔２，中咽頭１，下咽頭７）	10例
喉頭全摘術	3例
口腔・咽頭悪性腫瘍手術（経口腔的）	23例
喉頭悪性腫瘍手術（経口腔的）	5例
鼻副鼻腔悪性腫瘍手術	4例
頸部郭清術単独	9例
甲状腺悪性腫瘍手術	18例
耳下腺悪性腫瘍手術	6例
顎下腺悪性腫瘍手術	1例
	79例

（悪性腫瘍手術で頸部郭清を行った症例：両側７例　片側14例　合計28側）

総症例数	722例

鹿児島市立病院便り

高　木　　実

いつもお世話になっております，鹿児島市立病院耳鼻咽喉科高木です。

2019年度は2020年の大変革に向けて色々なことが起こるかと思っていましたが，従来通りであった年のような気がします。しかし2020年に入り，新型コロナ感染症の脅威とともに徐々に変革の兆しが見えてきました。

2019年度で花牟禮部長は退官となり，2020年度初頭は林・平原でこの鹿児島市立病院を支えていくことになりますが，今後とも御指導御鞭撻のほどお願いします。

花牟禮部長にも一言頂きたいと思います。

同門会の皆様へ

花牟禮　　豊

私は，本年３月31日にて鹿児島市立病院耳鼻咽喉科を定年退職となりました。平成９年７月に赴任し，22年と９ヶ月の間，多くの皆様にお世話になり無事に定年を迎えることができました。これも偏に皆様のご支援の賜と感謝申し上げます。

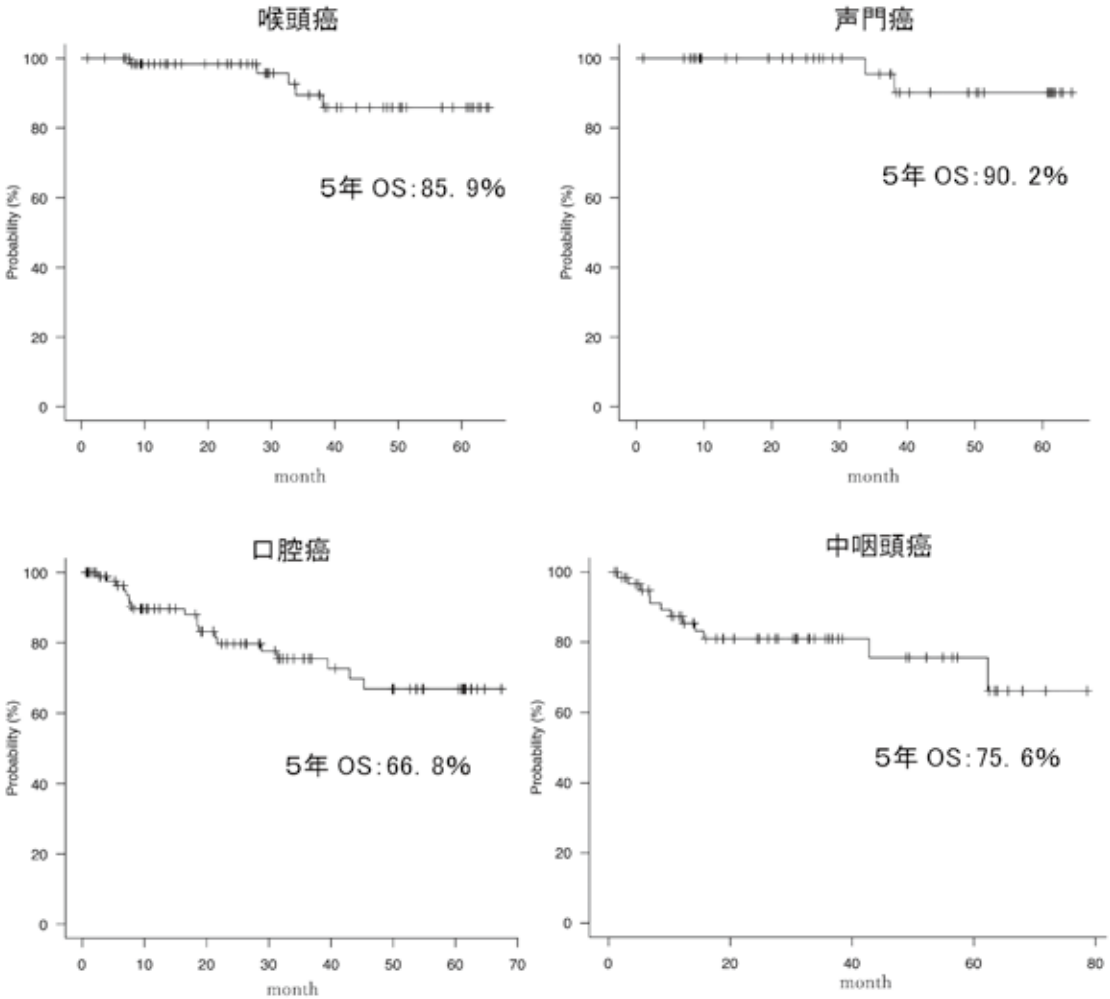
鹿児島市立病院では炎症性疾患や良性腫瘍はもとより，多くの頭頸部癌を担当し，新たに設立された頭頸部がん専門医および指導医の資格も取得することができました。22年の間，頭頸部癌の治療は大きく変貌し，診断技術の進歩とともに，新たな手術法，ELPS，TOVSが開発され，化学療法も大きく進化しエビデンスレベルの高い化学療法レジメンが登場しました。新規薬物療法として分子標的治療薬（小分子化合物，抗体薬）が頭頸部癌においても使用できるようになり，そして，免疫チェックポイント阻害薬も加わりました。ガイドラインの普及により化学療法，化学放射線療法の標準化が行われています。鹿児島市立病院においても積極的に新たな治療方法を取り入れ，頭頸部癌治癒率の改善に努めてきました。

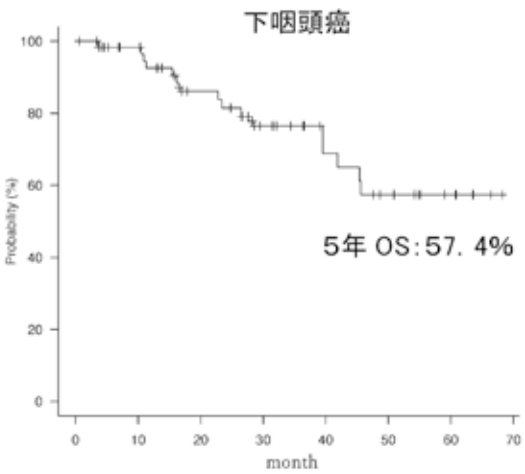
鹿児島市立病院に赴任する前，私は鹿児島大学病院にても頭頸部癌治療に携わっておりました。大山勝教授が退官された平成９年（1997年）の同門会誌「さくらじま」第11号に，特殊外来通信「頭頸部腫瘍外来」として，1996年までの10年間における頭頸部癌（喉頭癌，中咽頭癌，下咽頭癌，口腔癌）の治療成績（カプランマイヤー法による生存曲線，５年生存率）を報告させていただきました。今回，鹿児島市立病院を去るにあたり，当院での治療成績について最近５年間の治療成績をまとめてみました。

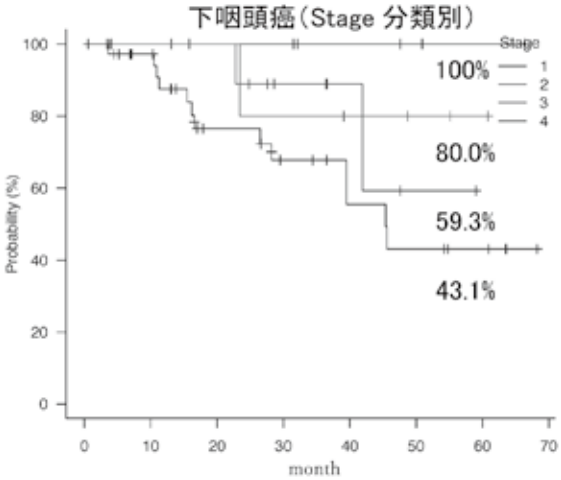
同様にカプランマイヤー法による５年生存率を計算し，喉頭癌85.9％，中咽頭癌75.6％，下咽頭癌57.4％，口腔癌66.8％の結果でした。生存率はそれぞれ改善しており，下咽頭癌については，５年生存率が31.4％から57.4％に改善し，特にStage 4は以前20.2％と悲惨な状況でしたが，今回43.1％であり，まだまだ不十分な結果ですが一定の改善は得られたと思います。世界では多数の臨床試験が進行中で，今後，新たな免疫治療薬などが開発され，免疫複合療法が発展し，また，新しいロボット手術が普及し，さらに10年20年後には，頭頸部癌治療も大きな変貌を遂げていることと思います。

今後，私は立場は異なりますが，これまでの経験を生かし微力ながら地域医療に貢献できるよう尽力したいと思います。鹿児島市立病院での22年の間，多くのご支援をいただいた同門の皆様に深甚なる感謝の意を表します。

鹿児島市立病院耳鼻咽喉科における頭頸部癌治療成績（2014 年−2018 年）







鹿児島厚生連病院便り

牧　瀬　高　穂

鹿児島厚生連病院耳鼻咽喉科の牧瀬です。令和元年５月までは原田みずえ先生が常勤していましたが，６月以降は小生が常勤医として勤務しております。

鹿児島厚生連病院耳鼻咽喉科は，外来診療，入院診療，手術治療を一人で一手に引き受ける，なんともやりがいのある職場環境となっております。６月の赴任後は，咽頭・喉頭の直達鏡下手術器具の導入，緊急気道確保体制の充実，聴力及びめまいに関する臨床検査の拡充など，多大なるご支援をいただきました。その結果，外来，入院，手術のいずれにおいても，耳鼻咽喉科の専門性を生かした診療を実施することが可能となっております。近隣の耳鼻咽喉科の先生，耳鼻咽喉科以外の近隣の先生，当院の他科診療科などから患者さんをご紹介いただき，患者さんの為に日々努力を続けている次第です。外来では，難聴の精査から補聴器相談，めまいの診断と治療，アレルギー性鼻炎や副鼻腔炎の精査と加療，口腔・咽頭・喉頭の疾患に対する精査と加療，嚥下評価，頭頸部腫瘍の精査加療など，多岐にわたって診療を行なっております。また，入院・手術では，急性上気道感染症，急性感音難聴やめまいの保存的加療（突発性難聴に対する高気圧酸素治療が実施可能です），内視鏡下鼻副鼻腔手術，咽頭・喉頭の直達鏡下手術，頭頸部の良性腫瘍性疾患の手術など，様々な耳鼻咽喉科頭頸部外科領域の疾患に対処しております。

一人体制であるが故に全ての耳鼻咽喉科頭頸部外科領域疾患に対処できるわけではありませんが，鹿児島市内の入院施設を持った耳鼻咽喉科として，地域医療の一助となれるよう日々精進する所存です。今後とも，鹿児島厚生連病院耳鼻咽喉科をよろしくお願い申し上げます。

藤元総合病院便り

森　園　健　介

皆様いかがお過ごしでしょうか。藤元総合病院に勤務させていただいております森園です。

元号が令和に変わって２年の2020年となりましたが，武漢から広がったコロナウイルスによる惨禍が世界中に広がってしまい，人々の生活も医療現場も全く様変わりしてしまいました。毎年入稿が遅い私ですが，この原稿を書いている４月中旬では藤元総合病院のある宮崎県だけではなく鹿児島県でも感染者数が２桁になってしまい，緊急事態宣言の中で感染の危険性に怯えながら診療にあたっている毎日です。

都城は現状では幸いまだ爆発的な感染は生じておらず今のところは通常の診療が行えておりますが，差し当たって困るのはやはりマスク不足でしょうか。病院からの支給もだいぶ前から週１枚に制限されているため，やむを得ずマスクを毎日の診療後に次亜塩素酸水を噴霧して消毒し，数枚をローテーションしながら使用しています。

先日は「先生たちもマスクが無くて大変でしょう？これ宜しければ使ってください。」とマスクの差し入れを申し出てこられた患者さんがおられました。これからもマスク不足は続くでしょうから御自身でお使い下さい，と丁重にお断りしたのですが，いいからとスタッフに渡して下さいました。本当に有難いことです。

それぞれの病院で様々な感染対策が行われている状況かと思いますが，当院での対策としてはまず病棟は当面は面会禁止となっております。外来については病院に入る患者に対して，玄関先でサーモグラフィーを用いて体温測定を行い，発熱患者の早期発見に努めています。ただ実際に発熱患者について診察するか（もしくは保健所等の対応機関に相談を行うか）どうかの判断は各診療科の医師がそれぞれ判断するという曖昧な体制となっており，病院全体として感染リスクのある外来患者の把握が十分に出来ているとは言えない状況にあることが個人的には気になっています。

また当科でも日耳鼻の診療指針に従い，待機可能な良性疾患に対しての手術を一旦中止・延期と致しました。近隣の先生方には御迷惑をおかけして大変申し訳ありませんが，状況を見て徐々に再開する予定としておりますので，どうか御了承いただきますよう宜しくお願い致します。

最後になりますが，鹿大耳鼻科に研修医として入局してからずっと御指導いただいた黒野教授に深い感謝と御礼を申し上げたいと思います。大学病院の教授として私たちの

ような若い医師のレベルを引き上げようと日々指導して下さるとともに，自ら様々な症例の診療・手術を行い鹿児島県の耳鼻咽喉科医が安心して診療に当たれる体制を作ろうと尽力されて，私たちには想像もつかないような御苦労をされたかと思います。語彙不足で感謝の伝えようもありませんが，本当にお疲れさまでした。そして教授の職を辞したこれからも耳鼻咽喉科医の先達として引き続き御指導・御鞭撻の程，どうか宜しくお願い致します。

鹿児島生協病院たより　－最終報－

積　山　幸　祐

2005年４月１日に鹿児島生協病院に赴任し15年が経過した。当初これまで経験したことのない数の外来患者に加え，不慣れな電子カルテ，一人医師体制のためかなりハードな勤務であった。昼休みもほとんどなく，昼食も十分取れないことが多く最初の一ヶ月で5kg 体重が減った。土曜の午前に80人を越える患者さんが来院し，倒れそうになったこともあった。

24時間 open の救急外来があり，めまい患者も多く，そのほとんどが翌朝耳鼻科に紹介された。末梢性めまいとして入院させたが翌翌日に小脳硬塞が判明した貴重な症例も経験もできた。眩暈診療に対し少しだけ自信がついてきた。

難治性鼻出血も多く経験した。大量出血，大量嘔吐で誤嚥しかけ，肝を冷やした症例や全身麻酔で止血を余儀なくされた症例も数例経験した。

2006年６月からは病院リニューアル工事が始まった。外来・入院の診療を行いながらの工事であった為，かなりの騒音で聴力検査のたびに工事をとめてもらわなければならず，説明の声も大きくなり，ストレスも増大した。2007年末には，個室は25床から35床になり，狭い６人部屋がなくなり，ゆったりの４人部屋や２人部屋が多くなり，入院患者さんのストレスは軽減された，かもしれない。さらに手術室は一部屋増え，ICU も作られた。このころから耳鼻科の手術数が増え始めた。

2010年には，生協病院耳鼻咽喉科開設以来25年以上使用されていたユニットの椅子が新しくなった。それまでは動かない椅子で診療していたが，椅子が回転し，ロックが解除され，椅子がフリーに動かせることに感動した。診察時に無理な体勢を強いられることがほとんどなくなり，肩コリも少なくなった。

非常に忙しい日常診療ではあったが，学位取得まではとの思いから，生協病院の倫理委員会を通して，滲出性中耳炎（VEGF）研究もおこなった。滲出性中耳炎の患者さんと家族に臨床実験のインフォームドコンセントを行い，同意書を取得後，鼓膜切開直後

に中耳貯留液を採取し，検体は，生協病院外来で冷蔵保存した。診療終了後，大学の実験室に持って行き，重量を測定後，PBS で希釈・攪拌し，遠心分離ののちその上清を採取し，測定まで -80℃で保存した。上清中の VEGF の他，炎症，細菌感染の指標として IL8とエンドトキシンを血管透過性の指標として血清蛋白質であるアルブミンを日曜，祝日を使って測定した。何とか結果をまとめることができ，2011年 9 月29日学位を取得できた。

日常診療に忙殺され，体重は再び増加し不整脈を自覚し，命の危険も感じたため，2006年からジョギングを始め，2008年からマラソン大会に参加しはじめた。最近は，速くは走れなくなったが，マラソン大会参加は現在も続いている。マラソンを走れている間は，どんなに忙しくても心身ともに健康でいられる気がしている。

生協病院に赴任後は，カンファレンスや症例検討もほとんどできず，学会発表をすることもなく，これまでの知識で毎日を過ごしている状態で，新しい知見や手術法に対して非常に飢えていた。３年間ほど全国学会で発表していなかったが2008年に横浜で学会発表してからは，毎年のように発表するようになった。発表に値する珍しい症例も多かった。生協病院在任中の15年間で19演題を全国，国際学会で発表することができた。

手術に関しては，生協病院でできる手術は生協病院でとの思いで，癌以外の手術は積極的に施行した。2005年から2019年までの耳鼻科入院患者数と手術室での手術人数，外来も含めた手術件数を以下に示す（図１）。いずれも2012年13年が，ピークであったが，近年は耳，鼻等の手術時間の長い，難しい手術が多くなった傾向にある。15年間で私が担当した入院患者数は延べ2700人，手術室で手術した患者さんは2265人になった。

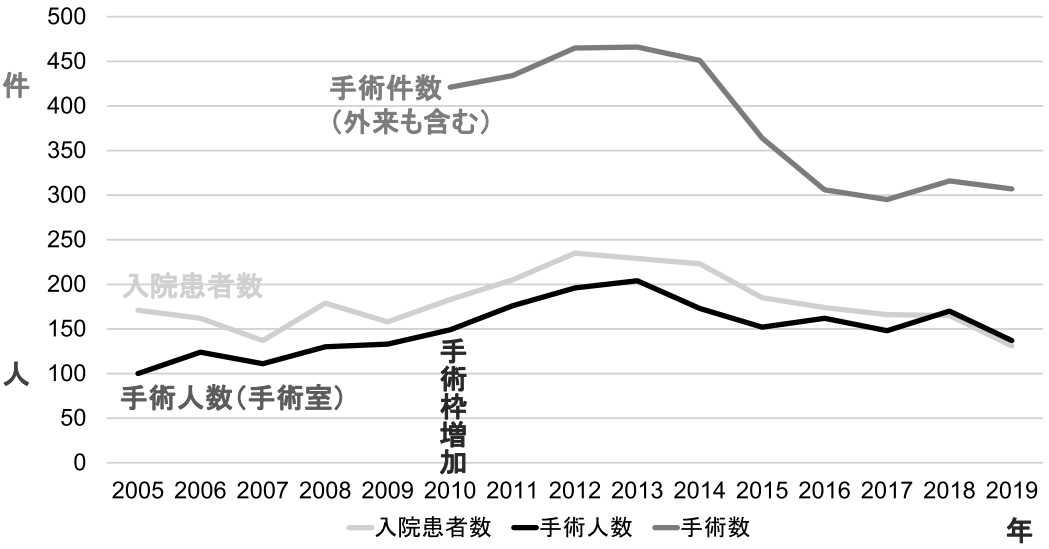


図１．入院患者数，手術人数，手術件数

生協病院での15年間，大きな問題もなく無事に日常診療を行うことができたのは黒野祐一先生をはじめ鹿児島大学耳鼻咽喉科頭頸部外科教室員，同門会の先生方，生協病院スタッフの御指導，御支援の賜物だと深謝している。

15年間，誠にありがとうございました。（図２）

図２

天辰病院便り

地　村　友　宏

2019年９月から私がクリニックに赴任いたしました。谷本洋一郎先生が長く院長を務められ，後任としてはいささか力不足なのは否めませんが，何とか３月まで勤務させていただくことができました。当院は入院施設を併設していますので，1.5次医療のような印象で，救急疾患はもちろんですが，ときには近隣の開業の先生方からご紹介いただいた患者様を入院加療させていただくことや，大学の術後患者様，放射線治療後の継続入院加療なども行ってきました。今後とも先生方との連携を大切にして当クリニックとしての特徴を維持していきたいと思っています。また外来看護師さんは患者さんについて細やかに把握されており，引継ぎの際や日頃の診療で大変助けてもらいました。本当にありがとうございました。患者さんへの思いが強いからこそしっかり把握できるのだと思います。私はおっちょこちょいな性格ですのでとても心強かったです。理事長先生，院長先生，事務長，病棟スタッフ，事務の方々にも大変お世話になりました。毎日おいしいお昼ご飯を作っていただいた調理場の方々にも感謝いたします。健康な食生活を送れました。

私の退職に伴い2020年４月からは大学から松元隼人先生が赴任される予定です。空手家として耳鼻科医として，ますますの活躍を期待しています。診療に行き詰ったときは気合で乗り越えてください。今年度で黒野祐一教授が退官され，今後の派遣人事がどうなるのかスタッフ一同大変心配しておりましたが，黒野教授のご配慮により引き続き医局員を派遣していただくこととなり安堵しております。

３月時点では新型コロナが拡大してきており，耳鼻科診療にも暗い影を落とし始めております。新しい感染症の診療を安全に行うことは大変難しいことで，医療者自身が感染しないこと，医療施設自体が感染の場にならないことなど留意点が多く，今後も緊張を強いられることとなりそうです。

今後も大学，同門の先生方と連携して地域医療の一端を担えるよう頑張っていきますので皆様何卒よろしくお願い申し上げます。

XIII. 関連病院

（令和２年５月現在）

病　院　名	郵便番号	住所（TEL・FAX）	外来診療曜日	手術曜日
国立病院機構 鹿児島医療センター	892-0853	鹿児島市城山町8-1 TEL：099-223-1151 FAX：099-226-9246	月・水・金 (8:30～11:00)	月・火・水 木・金
国立療養所星塚敬愛園	893-0041	鹿屋市星塚町4204 TEL：0994-49-2500 FAX：0994-49-2542	月・水 (8:30～17:00)	
鹿児島市立病院	890-8760	鹿児島市上荒田37-1 TEL：099-230-7000 FAX：099-230-7070	新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30～11:00)	月・水・金
寺田病院	895-2513	伊佐市大口上町31-4 TEL：0995-22-1321 FAX：0995-22-2947	月・火・木・金 (9:00～17:00) 土 (9:00～12:00) 水曜日休診	
藤元総合病院	885-0055	都城市早鈴町17-1 TEL：0986-25-1212 FAX：0986-25-8941	月・水・木・金 (9:00～17:00) 火 (9:00～11:00)	火の午後
あまたつクリニック	891-0175	鹿児島市桜ケ丘4-1-6 TEL：099-264-5553 FAX：099-264-1771	月・火・木・金 (9:00～17:30) 土 (9:00～12:30)	土の午後

病　　院　　名	郵便番号	住所（TEL・FAX）	外来診療曜日	手術曜日
垂水中央病院	891-2124	垂水市錦江町1-140 TEL：0994-32-5211 FAX：0994-32-5722	火・木 (14:00～17:00) 土 (9:00～12:30)	
加治木温泉病院	899-5241	姶良市加治木町木田4714 TEL：0995-62-0001 FAX：0995-62-3778	木 (10:00～16:30)	
種子島医療センター	891-3198	西之表市西之表7463 TEL：09972-2-0960 FAX：09972-2-1313	火 (9:00～17:30) 水 夏(14:00～17:00) 冬(14:00～16:20)	
出水郡医師会 広域医療センター	899-1611	阿久根市赤瀬川4513 TEL：0996-73-1331 FAX：0996-73-3708	火・金 (8:30～15:30)	
栗生診療所	891-4409	熊毛郡屋久島町栗生1743 TEL：09974-8-2103 FAX：09974-8-2751	隔週木曜日 (8:00～15:30)	
豊永耳鼻咽喉科医院	868-0037	人吉市南泉田町120 TEL：0996-22-2031	第２，４土曜日 (9:00～15:00)	

病　　院　　名	郵便番号	住所（TEL・FAX）	外来診療曜日	手術曜日
鹿児島厚生連病院	890-0061	鹿児島市天保山町22-25 TEL：099-252-2228 FAX：099-252-2736	水 (14:00～17:00) 木・金 (8:30～17:00) 土 (8:30～11:30)	火
公立種子島病院	891-3701	熊毛郡南種子町 中之上1700-22 TEL：0997-26-1230	毎週木曜日 (8:30～16:00)	
ゆのもと記念病院	899-2201	日置市東市来町湯田3614 TEL：099-274-2521 FAX：099-274-3306	火・水・木・金 (9:00～17:30) 土 (9:00～12:30)	

XIV. 海外同門会名簿

氏　　名	在　局　期　間	連　　絡　　先
1 李　廷権 （韓国，延世大学）	昭和60年７月１日 ～61年12月25日 平成元年６月26日 ～８月25日	Department of Otolaryngology Severance Hospital College of Medicine Yonsei University C.P.O. BOX 8044, Seoul, 100-680 KOREA TEL 82-2-2228-3605
2 Richard T. Jackson （アメリカ，Emorty 大学）	昭和60年９月６日 ～12月５日	Emory University School of Medicine Center Labolatory of Otolaryngology 441 Woodruff Memorial Building Atolanta, Georgia 30322 U.S.A.
3 閔　陽基 （韓国，ソウル大学）	昭和61年１月22日 ～２月21日	Department of Otolaryngology Collefge of Medicine Seoul National University 28 Yoongun-Dong, Chongro - Koo Seoul 110, KOREA
4 Sumet Peeravud （タイ，ソンクラ大学）	昭和62年５月７日 ～７月11日	Department of Otolaryngology Faculty of Mediciene, Prince of Songkla University Haadyai, Sonkgkla Thailand
5 Khemchart Tonsakurungruang （タイ，チョラロンコン大学）	昭和62年６月25日 ～63年６月14日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine Chulalongkorn University Bangkok 10500, Thailand
6 金　済霖 （中国，中国医科大学）	昭和62年８月１日 ～10月29日	中華人民共和国 沈阳市和平区南京街五段三号 中国医科大学附属第一医院 耳鼻咽喉科学教室
7 Phanuvich Pumhirum （タイ，タイ軍医科大学）	昭和63年３月９日 ～３月31日	Department of Otolaryngology Phra Mongkutklao Hospital Bangkok 10400, Thailand
8 Phakdee Sannikorn （タイ，ラジブチ病院）	昭和63年４月５日 ～平成元年６月５日	Department of Otolaryngology Rajvithi Hospital Rajvithi Road, Phyathai, Bangkok 10400 THAILAND　TEL 2460052　EXT 520

氏　　名	在　局　期　間	連　　絡　　先
9 Acharee Sorasuchart （タイ，チェンマイ大学）	昭和63年４月24日 ～５月15日	Department of Otolaryngology, Faculty of Medicine, Chiang Mai University Chiang Mai 50002, THAILAND
10 Cheerasook Chongkolwatana （タイ，マヒドール大学）	昭和63年５月９日 ～９月30日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine Siriraj Hospital Mahidol University Bangkok 7, THAILAND
11 Chul-Hee Lee （韓国，ソウル大学）	昭和63年７月14日 ～８月14日	Department of Otolaryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
12 金　春順 （中国，白求恩医科大学）	平成元年３月６日 ～４月５日 平成２年４月１日 ～９月30日（11月14日） 平成４年10月26日 ～11月３日	中国吉林省長春市南岭小街吉林工大新村18棟５号
13 Surat Mongkolaripong （タイ，ラジブチ病院）	平成元年３月10日 ～10月31日	Department of Otolaryngology Rajvithi Hospital Rajvithi Road, Phyathai, Bangkok 10400 THAILAND　TEL 2460052　EXT 520
14 Pierre-Marie Benezeth （フランス，グルノーブル大学）	平成元年９月８日 ～10月17日 平成３年４月７日 ～４月９日	7 Place De La Republique 26000 Valence France TEL 75-43-11-86　FAX 75-55-41-10
15 Preedee Ngaotepprutaram （タイ，マヒドール大学）	平成元年９月14日 ～２年９月13日	Department of Otolaryngology Prapokklao Hospital Amphoe Muang, Chanthaburi 22000, THAILAND
16 Myung-Whun Sung （韓国，ソウル大学）	平成２年１月20日 ～３月19日	Department of Otolaryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
17 鄭　勝圭 （韓国，廷世大学）	平成２年３月９日 ～３年４月27日	Department of Otolaryngology Samsung Medical Center 50 Ilwon-dong, Kangnam-ku Seoul, 135-230 KOREA 135-230

氏　　名	在　局　期　間	連　　絡　　先
18 Markus Rautiainen （フィンランド，クオピオ大学）	平成２年12月７日 ～３年12月21日 平成５年10月12日 ～10月17日	Department of Clinical Sciences (ENT) Tampere University, PL607 SF-33101 Tampere Finland
19 Dacha Noonpradej （タイ，ハジャイ病院）	平成３年４月10日 ～９月７日	Department of Otolaryngology Haadyai Hospital Haadyai, Songkhla, 90110 Thailand TEL 074-230800-4
20 Chehlah Muhmaddaoh （インドネシア，YARSI 医科大学）	平成４年５月17日 ～５年５月16日	113/18 Siroros Road T. Seteng A. Muang C. Yala (95000) Thailand FAX 66-073-221665
21 方　深毅 （台湾，台湾大学）	平成４年７月１日 ～９月26日	Department of Otolaryngology National Cheng Kung University Hospital 138, Sheng hi Road, Tainan 70428 Taiwan, R.O.C. TEL 06-2353535　EXT 2309
22 Ic-Tae Kim （韓国，ソウル大学）	平成５年８月３日 ～９月28日	Department of Oto ; laryngology College of Medicine, Seoul National Universi ty 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
23 Joon-Heon Yoon （韓国，廷世大学）	平成５年６月５日 ～６月８日 平成６年１月18日 ～３月１日	Department of Otolaryngology Severance Hospital College of Medicine Yonsei University C.P.O. BOX 8044, Seoul, 100-680 KOREA TEL 82-2-361-5780
24 Prasit Mhakit （タイ，Pramongkutklao 大学）	平成６年３月11日 ～６月４日	Department of Otolaryngology Pramongkutklao College of Medicine, Thailand TEL 662-246-0066　EXT 3076, 3100
25 呂　宏光 （中国，大連医科大学）	平成６年４月２日 ～４月19日	中華人民共和国 大連市中山路222號 大連医科大学附属第一病院 耳鼻咽喉科学教室 〒　116011 TEL 3635963-3088
26 王　振　海	平成５年１月25日 ～平成９年３月31日	中国医科大学附属第二病院 耳鼻咽喉科

氏　　名	在　局　期　間	連　　絡　　先
27 Jussi Laranne （フィンランド，タンペレ市）	平成６年４月４日 ～７年６月13日	SUKKAUAR TAAN KATU 6A8 33100 TAMPERE Finland
28 Sidagis Jorge	平成６年10月３日 ～11年３月31日	Comp. Hab. Malvin Norte, Calle 122, N° 2152/301, Block 7, Montevideo, CP11400 U URUGUAY (South America)
29 馬　秀　嵐 （中国，中国医科大学）	平成８年１月25日 ～８年12月30日	中国瀋陽市和平区南京北155号 中国医科大学第一臨床学院耳鼻咽喉科 〒110001
30 歐　　俊　巖	平成13年３月23日～H13.９	Department of Otolaryngology National Cheng Kung University Hospital 138, Seng Li Rd., Tainan Taiwan TEL +886-6-2353535 FAX +886-6-2377404
31 孫　　東	平成13年４月２日～H17.３	114003 中国遼寧省鞍山市鉄来区対炉山新呉衛21-7号
32 王　旭　平	平成20年11月１日 ～H21年２月13日	〒210002 中国江苏省南京市白下区楊公井34栁34号 南京市楊公井病院　　耳鼻咽喉科 電話番号：86-25-80864050 (office) 86-25-84542942 (home)

XV. 自治医大研修生

氏　　名	最終職別	在局期間
西　宜行	研修生	59. 4-59. 6
河野正樹	研修生	60. 4-60. 6 61. 1-61. 3
山内慎介	研修生	62. 4-62. 6
四元俊彦	研修生	63. 4-63. 6
畑　幸宏	研修生	63.10-63.12
三角芳文	研修生	63.10-63.12
吉満伸幸	研修生	H 2. 7-H 2. 9
斧淵泰裕	研修生	H 2.10-H 2.12
宮原広典	研修生	H 3. 1-H 3. 3
黒木　茂	研修生	H 5. 7-H 5. 9
神野公宏	研修生	H 5.10-H 5.12
藤郷秀樹	研修生	H 5.10-H 5.12
的場康平	研修生	H 7. 1-H 7. 3
伊瀬知　敦	研修生	H 7.10-H 7.12
泊口哲也	研修生	H 8. 1-H 8. 3
島名昭彦	研修生	H 8. 7-H 8. 9
福田弘志	研修生	H 8.10-H 8.12 H 9. 4-H 9. 6
安藤五三生	研修生	H 9. 1-H 9. 3
吉元英之	研修生	H10. 4-H10. 6
肘黒公博	研修生	H11. 1-H11. 3
横山孝二	研修生	H11. 4-H11. 6

氏　　名	最終職別	在局期間
田　中　裕　之	研　修　生	H11. 7－H11. 9
永　野　広　海	研　修　生	H13. 6－H13.12
森　田　喜　紀	研　修　生	H15. 1－H15. 3

鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室
同　門　会　会　則

（総則）

第１条　本会は鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会と称する。

第２条　本会は鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室（以下教室と略す）に事務所をおく。

（目的ならびに事業）

第３条　本会の目的は会員相互の親睦を図り，学術研究ならびに社会的発展に資するにある。

第４条　本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1．同門会総会の開催

2．同門会誌ならびに会員名簿の発行

3．記念事業の開催

4．その他本会の目的を達成するために必要な事業

（会則）

第５条　本会は会員を次のとおりとする。

教室に在籍又はこれと同等と認められる者。本会の趣旨に賛同し入会を希望して承認された者。

第６条　本会の運営は会費及び寄付金をもって行う。会費は年会費（開業医10.000円，勤務医4.000円）を納めるものとする。特別会員，顧問は会費を免除する。（但し70歳以上）

第７条　会費を滞納した会員は本会より連絡を受けられないことがある。

第８条　会員は希望により退会することができる。

第９条　会員であって本会ならびに教室の名誉を著しく傷つけた場合には役員会の決議を経て会長がこの者を除名することができる。

（役員）

第10条　本会には次の役員をおく。会長１名，副会長，理事，監事，幹事それぞれ若干名。

なお本会に名誉会長ならびに顧問をおくことができる。役員の任期は３年とする。

第11条　会長は教室主任教授又は同門会会員から選び，会務を統轄する。

第12条　役員改選時，（旧）役員会は（新）会長候補を決定し，総会での承認を経て

新会長が選出される

第13条　副会長は会員の中から会長がこれを委嘱し，会長を補佐する。

第14条　理事は会員の中から会長がこれを委嘱し，会務を審議する。

第15条　監事は役員会においてこれを選出し，会長がこれを委嘱する。
監事は会計を監査する。

第16条　幹事は会員の中から会長がこれを委嘱し，会務処理に当たるものとする。

第17条　名誉会長ならびに顧問は会員の総意に基づき推挙されるものとする。

（会議）

第18条　総会は年１回開催する。必要があれば会長は臨時総会を招集し得る。
総会における決議は出席会員の過半数をもってする。

第19条　役員会は会長が招集し，事業計画，経理その他重要な事項を審議する。

（会則の変更）

第20条　本会の会則は総会の承認を得て，変更することができる。

（本会則は平成22年１月17日より施行する。）

編　集　後　記

社会が不安の影に覆われると反知性的な言論を見聞きする機会が増えるようです。そのような時に思い出される言葉があります。“悲観主義は気分のものであり，楽観主義は意志のものである。”『幸福論』で知られるフランスのアランの言葉です。ここでいう楽観主義とは単なる能天気とは異なります。知性を裏打ちとする，悲観主義をも内包する楽観主義であると考えます。言い換えると，悲観的な気分になる現実に直面したときに，その原因を知性で以て分析し，その対応策を機嫌よく実行することだと言えます。

知性的であるといろいろなことが理解でき，見える景色も広がってくるのだと思います。したがって自分と相反する意見に遭遇しても，その考えを聞いて理解しようと努めることができます。知性的であるということは寛容であると言ってもいいのかもしれません。しかし，知性も使い方を誤ると人を否定するための刃となり，「不幸な知性」となってしまいます。寛容な心で人を理解し，豊富な知識を使ってその場に最も適した判断を素早く下せることが真に知性的であり，「幸福な知性」と言えるのではないでしょうか。

今年は３人の先生方が，医師としてのこれからの学びの場に当教室を選んでくれました。お互いに「幸福な知性」を目指して切磋琢磨できたらと願います。

同門会および地方部会の先生方におきましては，日頃より多大なるご支援を頂き，大変感謝しております。教室は一つの節目を迎えましたが，今後ともご支援のほど何卒よろしくお願い致します。

令和２年６月吉日

編集長（医局長）川畠雅樹
編集委員　伊東小都子
久徳貴之
大夫堀昌子

さくらじま　第34号

令和２年６月23日　印刷
令和２年６月30日　発行

発　行　鹿児島大学大学院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室
電話（099）275-5410

印　刷　斯文堂株式会社
電話（099）268-8211